勞動問題批判

一

S 30
68

鷗外藏書

＝(改造七月増大號)＝

過激思想のその五分前

　十四日、西伯利の視察をすまして歸朝した、山梨陸軍次官は、過激派は微弱なもので、論ずるに足らぬなどゝ、輕く御手柄話をされておる。成程、銃劍を以て、皇軍に抵抗するものゝみが、過激派であつたら、左樣かも知れぬ。大抵の人々が、左樣な觀察をして、得々と歸朝してくる、しかし、その微弱で、齒牙にかけないでもよい位の、過激派の政府は儼乎として、全露に號令して居るではないか。獨逸でも、米國でもその微弱な過激派のために席捲されて居るではないか。鐵砲玉では抵抗して來る、過激軍は掃蕩し得るが、その思想に向つては撃退が困難である。戰線で齒に立つ戰が、拙いからとて直ちに以て、過激派の微力とか、全滅とかを斷言するは、今信玄を以て稱せらるゝ、山梨將軍の言葉とも受取れぬ。

　飛行機戰爭の慘狀に恐れ慄き、水雷戰の不意打に、恐れを抱いたのは、昔の夢であつた。今はもうマルクスでも追付かぬやうにすべてが大轉換して來た。電光的思想の急播で、國家てふ堅い〳〵砦を、根本的にくつがへそうと、執拗い蛇の如く、附き纒つておるものが現れた。一億萬噸の超努戰艦より、百萬機の大飛行機より、敵として恐ろしいのは、その過激派である。その過激思想である。滔々大江を決しやうとする。その渦卷きが、目に見えないで、歸れる將軍は、矢張り孫吳の韜略のみを、腦中にきざめる、兜甲燦たる錦繪の將軍であつた。幾何學的に觀察のつかぬ、輓近の過激思想は、いやがる東洋にも。支那にも無遠慮に、且つ膽大に押寄せて來た。そしてトグロを卷いて、海洋の一角を、睨みつけておる巨蛇のやうに。その爛々たる眼差のもの凄いによつて、大抵のものは怯氣を出しておる。

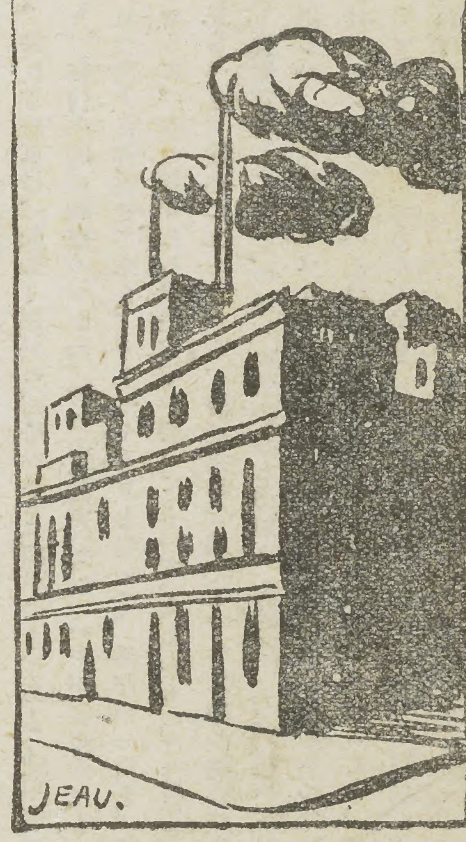
　如斯、恐るべき、險涯に立ちながら、普通選擧問題でも、資本家對無資產階級の問題でも、解決を遲滯荏苒しておるのは、平常決心と勇氣とを誇る、大和民族の所業であらうか。西へ走るか、東へ疾行すべきか、毒蛇の見舞を受けぬ前に、決心をつけて、一目散に急行せねばならぬのだ。人の心は目に見えぬ、形とならぬ前のタイムこそ、眞に勇氣を籠むるタイムである。山雨至らんとする、五分前の靜寂は物凄いもの、經綸の士はこの境地を發見せねばならぬ。

S30-68

東京帝國大學圖書

B 23475

勞働問題批判



(一)經濟生活改造途上の一大福音

―勞働非貨物主義の公認―

法學博士　福田徳三

（一）

國際聯盟に附帶する國際勞働法制に我邦が加入したことは、失態だらけの日本外交に取つては實に怪我の功名と言ふ可きものである。然るに我邦にては、人種差別撤廢の要求が容れられなければ、國際聯盟を脱退せよとまで力說する人にして、國際勞働法制に加入することに大いに反對して居る人が尠くないようである。是は自家矛盾も甚しいのである。國内に於て、勞働者に對して文明國の通義たる合理法保護をさへ加へない國が、差別撤廢を要求するなど丶云ふは、我田引水論も甚しいのであつて、英米佛の僞善的正義人道論に引けを取らぬ不埒千萬な主張である。而して米國や濠洲に於て、日本移民が排斥せらる丶其の經濟上具體的の理由は、日本勞働者が勞働條件の要求に於て甚だ幼稚であること是れであるは、否定する能はざる事實である。若しも、日本勞働者の生活程度が高まり、其勞働條件の要求が、米濠勞働者と同一程度に進んで居るのに、彼等が日本勞働者を排斥するならば、其れは人種的僻見に基く不都合として飽迄爭ふ可きであるが、今日の日本勞働者の程度を以て、無差別待遇を求むるは、聊か無理な次第である、故に眞に人種差別の撤廢を熱望するならば、國際法制の强制を待つまでもなく、日本は自ら進んで、國際法制の認めた程度の勞働保護を實行して、而して後に、正々堂々と差別撤廢を主張す可きである。然るに、既に國際聯盟の一員となり、其の勞働法制に加盟することになつてから後も、其の除外的取扱を求むるなど丶は實に驚き入つた話である。殊に此等の主張者が雇主資本主の意向を迎合する人々によつて臆面もなく唱道せらる丶は、百鬼晝行とも云ふ可きである。前月の「太陽」や「解放」の拙文に於て早大敎授服部氏の此種の議論を罵倒して置いたら、早大學生らしい人々から、脅迫的の書狀が大分舞ひ込むが、イクラ脅迫されても、予輩は、服部氏の議論を大愚論なりと斷定するを止め能はぬものである。學者なれば、局外公平の議論を立つ可し學者に誤謬や錯誤は免れないソレハ仕方がないが、或利害關係を背景として、我田引水的に立論するは、學界の神聖を汚瀆する大曲事である。服部氏は學者たる招牌をかけて實は商業會議所の爲めに德用論をやつて居るのではないかと思ふ。果して然るならば、實に甚しき曲事で、我輩は執念深く皷を鳴らして、其の不可なるを糺さずして已む能はざるものである。而して平生敬重して措かざる　獨立自由の學府早稻田大學の神聖の爲めに實に痛歎に堪へない次第である。早大諸君は匿名の脅迫狀を寄せるやうな卑怯をやめて、正々堂々と予輩と論戰を試むるの勇氣はないか。予

輩は何時でも交戰を辭せざるものである。

（二）

さて國際法制は其第一條に勞働を商品として取扱はずと云ふ大宣言を揭げて居る。人或は之を以て例のウヰルソン式の瞞着的修辭なりとして一笑に附するものがある。其立案者に於ては或は單なる修辭として揭げたのであつて、ウヰルソン式であるかも知れない。然し我々は、其修辭なりとも旣に一度公言せられた以上は、之を責め責めて、何時かは事實上の公認たらしむる日の來る爲めに努力せねばならぬと信ずるものである。今日の世界に於て、殊に我日本に於ては、勞働は商品としても亦た殆んど最劣等の種類の取扱を受けて居る。せめて商品としての充分なる取扱を受ける丈けに進むことは、年來我々の切望する所であつた。故に今國際法制に加入したとて、商品としての取扱をせぬなどと云ふことは、殆んど一のユートピアに近い空想であることは言ふ迄もない。然しソレダカラとて、右の主義宣言を一笑に附するは當を得て居らぬと信ずる。兎に角宣言丈けでも、勞働非商品主義を公認することとなつた以上、日本の勞働問題は、全く新しい生活に立入つたもので、從つて日本の勞働政策は根本からして立て直さねばならぬ。工場法の如きも根本的大改正を急要とするは申すまでもないことである。政府に於ても多少準備に取かゝつたようであるが、民間の輿論が之を鞭韃するにあらざれば、又々骨拔き的改正に墮して仕舞ふことは、殆んど鏡にかけて見得るようである。勞働時間を八時間にすること、幼工使用を禁ずること、婦人賃銀を同質の男子賃銀と同一とすること、團結權の承認、生活賃銀の保障、婦人監督官の設置等は、今直ちに之を法律上に於て規定して、嚴重なる條件の下に於ける除外例丈けを許るす可きである。法の規定其物を國際法制以下に引下ぐることは、斷じて不都合である。今念の爲め、世界經濟生活改造の一大福音たり、勞働者に取つて「マグナカルタ」とも云ふ可き國際勞働法制の箇條を左に揭げて置く

（一）勞働は單に貨物或は商品と認むべからずとする大原則

（二）被傭人幷に傭主が適法の目的の爲め結合する權利

（三）其時代及其國に於て適度の標準として承認せらるゝ所の生活標準を維持するに適當なる賃銀を被傭人に支拂ふこと

（四）一日八時間或は一週四十八時間制を以て目標とすべき勞働標準とし未だ之を採用せざる國は之を採用すること

（五）日曜日又は便宜の日に於て每週一回宛滿二十四時間連續する休暇を與ふること

（六）幼年勞働を廢止すること、及び靑年勞働者の敎育の繼續を許し且適度なる身體の發育を確信する規定を課すること

（七）男女とも同一價値の勞働に對し同額の報酬を受く可き原則

（八）勞働條件につき各國が其法律を以て定めたる標準を基とし適法に其國に居住する凡ゆる勞働者の經濟上公平なる待遇につき適當なる顧慮を拂ふべきこと

（九）各國は被傭者保護の法令の實施を確保する爲監督官制度を制定し其中に婦人監督官を加ふること

（三）

當面の問題として、第一に來るは第二條の團結權の認承是れである。此の規定を誠心誠意に遵守せんとならば、我治安警察法第十七條は卽時に全廢せねばならぬのである。此一條を存して置いて、團結の認承など云ふは世界を欺くものである、聯盟國の信義を破るものである。如何に溫情主義の縱斷關係のと云つて見ても、此一條ある間は駄目の事である。恐らく頑冥者流も廢止の切要を認めざるを得なくなつたらうから、近く其斷行を見るかと思ふ。若し然らざれば日本は文明國として背信の所業を敢てするとの批難を世界中から招くに相違ない。

第四條、第五條、第六條、第八條、第九條は之に準ずる規定を工場法中に設く可きである、除外や割引は一切不可である。第三條は具體的の實施には餘程の困難が伴ふ、コレは即時に實行は出來まい、併し着々として此目標に向つて進み、少くとも、最低生活賃銀を保障し得るようにせねばならぬ。第七條も即時實行は困難である、現に小學教員さへ女教員の俸給は、男教員の其れよりも遙かに低いのである。併し同じく此標準に向つて進む方針丈けは確立せねばならぬ。さて殘る所は、第一條である。是れに就て少しく論じて見よう。

（四）

勞働を單に貨物或は商品と認むべからずとする大原則を認むると云ふことは、具體的の施設として如何にすれば宜しいかは大問題である。而して今日の賃銀制度、資本組織にして存續する限り此原則の認承と云ふことは、事實に於て矛盾である。此意味に於ては、此第一條は世界永遠の平和、軍備全廢などと同樣の大空想であると罵られても辭することは出來ない。故に世人が之をウヰルソン式の修辭なりと一笑することになるのである。然しソレは物の見方にある。「單に」と云ふ一字が挿入せられて居るのは、大に意味のあることと思ふ。即ち今日の賃銀雇傭制度の下に於ける、勞働の雇傭は、商品としての取引たることは已むを得ない。之を根本的に顚覆しようと云ふのではない、其期する所は、單に其れ丈けに止まつて、其以上又其以外に、勞働とは畢竟するに人間の力作に外ならぬこと、從つて其力作の提供は、人間其のものに關係するものなることを忘れ又は無視せぬようにすると云ふことにあるものと思ふ。勞働が商品たること其事を否認するのではない。其は已を得ざることである、然し其れ丈けで安心、滿足して居てはならぬ、更らに一歩進めて勞働雇傭の人間的方面をも發揮せよと云ふのである。斯く解釋すれば決して空想

ではない、單なる一の修辭ではない、否勞働問題の取扱ひ方、其見方に一大福音を齎らすものである。否な世界の經濟生活改造の上に一大福音たるものである。即ち勞働の人間性 Humanity of Labour を認めて、從來の如く單に勞働の商品性 Commodity of Labour のみを視ることを已めよと云ふのである。吾輩は此第一條を斯く解釋するものである。

（五）

勞働者狀態の改善の爲には、幾多の施設が行はれた、併し何れも其商品性を過重するもので其人間性を十分に理解したとは云へない。此點に於ては、近來流行の米國テーラー氏主張にかゝる「科學的經營法」は甚しき誤謬に陷つて居る。テーラー氏は揚言して曰く勞働問題とは畢竟、賃銀と時間との問題である。賃銀を十分にやり、時間を短かくしてやりさへすれば、勞働の不安、不平はなくなると。科學的經營法は即ち如何にして勞働の能率を高め、之によつて時間の短縮賃銀の引上げを實現し得可きかを最高の問題として、幾多有効有力なる工夫を旋らすもので、其實績は實に顯著である。併し乍らコレハ勞働の人間性を彌々益々減滅するもので、其商品性を更に強くインテンシファイするものである。勞働の不平、不安は決して單に賃銀や時間のみに限られるものではない。否勞働問題の根抵は單に勞働者の貧乏に存するのではない。河上博士が「貧乏物語」を著して、社會問題の根本は貧之に在りとの說を大に力說せられて以來、我邦では貧乏の重要に着目する人の殖へたは、誠に結構の事ではあるが、貧乏が社會問題の根本なりと思ふのは、大なる謬見である。此點に於て余は極力河上博士に反對せざるを得ぬものである。若し貧乏さへ取除けば宜しいといふのなら、テーラー式科學的經營法は大に歡迎す可きものである。然るに實際の事實として、テーラー式に依る所でも、勞働問題は決して減じて

居ない、否却つて不平の聲が高くなつて居るので、其爲めテーラー式は一時程の人氣がなくなつたは、適確なる事實であり、勞働者も雇主も之を批難するもの其本國たる米國に續出するのが今の實情である。ソレハ畢竟勞働の人間性を無視するからである。

(六)

テーラー式では、勞働の能率を高める爲に、勞働を全く器械的のものたらしめ勞働者をして、其頭を使はしめる必要を全く省くことを眼目として居る。勞働に考事は敵である。今迄の勞働が力作しつゝ、考ふることを必要として居たから、考ふること丈け無駄となり、時間も徒費する。其必要を全く取去つて、勞働者は勞働時間中一も物を考ふる、頭を使ふと云ふ必要をなくなして、一意專念力作にのみ全精神を集中せしめる。之が能率を增進するのである。成程其爲めに、能率は增進する其代り勞働者は彌々益々唯だ働くのみの動物と成り下つて仕舞つて、僅に殘つて居た人間味は全く取り去られて仕舞ふのである。コレでは人間たる勞働者は永く耐へることが出來ない、從つて不平、不安が昂じて來たのである。

(七)

一體勞働が苦痛であると云ふのは其が力作であるからではない、力作は人間の生理、心理上必要で、或程度迄の力作は人皆之を營むことが、人間生存上の根本要求である。其力作が過大になれば、過大其のものから苦痛の起るのは勿論である。併し今日の勞働の最も苦痛とする所は其れではない。外にある。何かといへば、勞働は創意が伴はぬと云ふことと是れである。雇主の命を唯々諾々として、自分は何の工夫をすることも許されず、唯だ器械的に力作に從ふと云ふ事が、人間たる勞働者に取つては、最大の苦痛であるのである。自分の頭を働かせ、物事を考へると云ふことを許されぬのが最大の苦痛である。創意の餘地なく唯執行のみをすると云ふことが最大の苦痛である。故に時間短くて力作其ものは過大でなくとも苦痛は依然として渝らないのである。之に賃錢を多くやつて、生活に事欠かせぬは結構千萬ではあるが、其爲に勞働其ものゝ苦痛は、輕減せられないのである。貧乏を取除いても、苦痛は依然として存する。從つて不平、不安は去り得ぬのである。時間を短くして過勞を免かれしめ、賃銀を十分にして貧乏を免れしめることは、實に肝要である。併し其れ丈けでは、根本的解決は付かないのである。況んや時間を短くする爲め、賃錢を多くする爲めに、テーラー式によつて、益々勞働の人間性を破壞すれば、一方に得る所は、他方に失ふ所を却つて償はざる結果を持來たすのである。是れテーラー式に勞働者が反抗するようになつた原因である。利益分配法とても略ぼ同じである。利益分配と稱して實は留保せられたる賃銀を後拂すること其事既に甚だ疑問であるが、假りに數步を讓つて、利益分配法が宜いとしても、そ れは單に勞働者の收入を殖やすのであつて、而して他方利益を多く產み出す可く、或は過勞し、或は人間味を破却することを免れぬ、從つてテーラー式の場合と同じ結果に陷る。殊に利益分配法の爲めに、勞働者が其力の極度まで働く結果は、其全部が勞働者に歸着するのではない、其一部のみしか貰へぬので他の部分は資本主の利益を增大するのである。犬にパンを見せてチンくをさせるようなものである。犬は一片のパンは貰へるが、其爲にチンくの藝當をやらせられて、パンの投主の弄み物となるのである。三島彌吉氏の三益主義とは、能く正直に標榜したものである。勞働者の利益の爲めではない、三益主義で、資本主も懷を肥やす名案である。資本主は利益を得る斗り、其れに對する損は一もないが、勞働者は若干の利益の爲めに、益々其力作上に於て人間性を滅却せねばならぬのである。賃銀受授關係に於ては成程利益の分配に預るとて、人間らしい待遇を受けるようであるが、其勞働時間の全部をあげて、非人間的取扱を、インテンシフアイするのである。資本主と云ふものは、轉んでも唯は起きない、誠に甘い事を考へ出すものであるが、勞働者こそ迷惑此上ない譯である。

（八）

國際法制第一條の眞意を吾輩の解する如くに取れば、斯く力作に當つて人間性を滅却することは、反對す可きである。勞働を商品として取扱はずと云ふことは、決して賃錢の受授の上のみに限る可きではない。否其最も重要なる適用は、勞働生活の大々部分を占むる所の力作其ものゝ上に於てゞなければならぬ。單に賃銀の支拂に人間味を增した丈けで力作作業其ものを益々非人間化して行くのは右第一條の精神に逆行する所以である。勞働非商品主義の正さに大いに歡迎す可きは、力作作業其のものを人間化 Humanize すると云ふ一點になければならぬ。强いて極端な事を云へは、時間や賃銀は元の儘でも、力作作業其ものをウント人間化することを得れば是れ眞に勞働者に取つての大幸福、大解放である。

（九）

力作作業を人間化すると云ふは、勞働者に物を考へる餘地を與ふることから始めねばならぬ。殊に創意の餘地を與へねばならぬ。インダストリアル、デモクラシーとは此事である。其れには勞働者をして經營上に參政權を得せしめねばならぬ。一工場、一經營を一の代議政治によつて運營せねばならぬ。此を名けて Democratic Control of Industry と云ふ企業の方面に干與せしめることは、今日の處實行の望甚だ乏しい、何となれば事實不可能である。株式會社の株主さへ、企業には干與せぬ、唯だ報告を聽取る丈けで、實際帳簿の檢閲はやらぬ、やり得ぬ、やつても効はない、却つて害がある、況んや勞働者に於てをや。今日の資本組織の存續する限り企業上の Democracy は、實行不可能である。商賣上のコントロールは出來ない相談である。コレハ現狀に任せる外はない。之に反し技術上、經營上、殊に實際具體的の作業は、行はんとするならば直ぐにも Democratic Control の下に置くことは出來る。武藤山治氏の發案かと思ふが鐘紡では、作業上職工の意見を好んで採用する方針を取つて、之を奬勵して居るのであるが、之れを變じて勞働者本位とし、且つ意見を採用すると云ふに止まらず、必ず意見を陳述す可き權利と義務とあるものとし、一週一回とか、毎月一回とか、職工議會を開いて(其時間は、必ず之を勞働時間中に算入するを要す)差支ない限りは、其決議を待つて作業上一切の事項を定め、工場長は其決議實行の義務あるものとす可きである。若し Direct democracy が實行不可能なら Representative democracy としても差支ない。卽ち代表議員を撰出せしめ、其議會に工場經營の主權を與ふ可きである。

（十）

然し右は歐米では、直ぐに實行出來ると思ふが、日本では中々困難であらう。ソコデ其準備（工場議會開設準備と名けて置かう）を爲す可きである。其れには色々な事もあらうが、吾輩の今考へて居る所は、次の事項である。一は日本で國會開設の下稽古として地方長官會議を開いた、其樣に、工場使用職工中、多少敎育あり、見識あり、人の前で物を言ふことを憚らざるものを撰出して、時々工場以外に於て、諮問會を開くこと是である。其撰出されたものは、自分の考を立てることに勉む可く奬勵するのである。又た他時に同僚職工の意見なり思はくなりを取次ぐ責任を帶ばしむ可きである。其陳述した所は必ずしも採用すると拘束せず、併し成る可く之を尊重し、其可なるものは、ドシ〳〵實行することゝするのである。

紡織工場のように女工のみ又は多數が女工である場合には、右の實行も困難であらう、併しながら奬勵、誘掖して行けば、出來ないことは決してないと信ずる。

(十一)

次には工場監督官をして、職工に接近せしむることである、監督官に對してなしたる陳述に就ては、雇主は決して職工を責めないと云ふことを工場法に嚴かに規定す可きである、此事は女工の場合には殊に必要と思ふ。現に予の乏しい經驗でも、監督官が女工からの申立によつて、工場主の不都合を發見した實例が若干ある。女工からの投書は時々監督官の許へ來るそうである。コレハ大に奬勵せねばならぬ。予の實驗中、或工場には病室の設けはあるが、ソレハ夫婦者の職工か役員の住居に宛てて女工中の病人は大病人と雖も普通の寢室に置いてあることを、其工場を巡視中一女工から聞いて發見したことがある。

(十二)

最後に予の最も力說せんと欲することは、Employment manager（人事支配人又は人事技師長）の設置之れである。

今日の工場は商賣方面には、支配人あり、技術方面には、技術長、工場長があるが、人間方面には、單に雇入、解雇を司る人事係がある計りである。今日の工場は金儲け本位であるから、仕方はないと云へば夫迄であるが、金儲けの爲めに高給の支配人、金儲實行の爲めに技師長、工場長を置いて居乍ら、最も大切な人間の爲めには、殆んど何も置いて居ないのである。即ち人間を單に道具、貨物、商品と見る、否商品以下に見て居る最も有力なる證據である。尤も倉敷紡績の大原孫三郎氏の如く自ら社長であり乍ら、營業、技術には夫々部長主任を置いて居るが、人事課長は自ら之を兼て居て技術や商賣の事は人任せにして、自分は專ら男女工の生活、寄宿舍、貸屋、幼稚園、病室の設備に心を潛めて居る人も我邦にないではないが、其は寧ろ稀有な取除けである。大抵は商賣や技術の事には頭を使つて居ても、人間の方面は全く知らず、女工の寄宿舍などへは、設立以來一度も入つて見たこともないと云ふ社長や重役斗りである。彼等は男女工を以て厄

介千萬にも飯を食つたり寢たり病氣をしたりする道具だ位にしか思つて居らぬのである。同じ道具でも器械は飯も食はず、寢もせねから、之を可愛がる。飯を食ひ病氣になるような贅澤な道具はヤクザ者位にしか考へて居らぬのである。現に或る製糸工場で予輩を案內した幹部の一人は云つて曰く「如何も工女と云ふものはイジの汚ないもので、おまけに男を欲しがると來て居ますから、コンナ厄介なものはありません」と、而して、其欲しがる男を防禦す可く殆んど鐵條網にも類する木柵は、何れの工場にも拵らへてあつて、一々鍵をかける。女工は動物園の猿の如くに其鍵をかけられた木條網の中から一歩も踏み出ることを許されないのである。斯くの如くんば監獄と相去ること幾干もなしと云つて可なりである。製糸工場の多くに於ては、繭を煮る釜の側に揚枝と齒磨（憐れなる女工は每朝口中を掃除するものと見へる、コレ丈けでやつと彼等は人間味を發露して居るのである!!）とがブラ下げてある。何故洗面所で、顏を洗はないのかと問へば、彼女等は答へる、洗面所にはタラヒもなく冬は水がつめたい。繭の釜ならタラヒの代用にもなり、溫かい御湯がイクラでも出て來ると!! 繭はヲカイコ樣と唱へて大事にする。女工は飯を食つたり、男を欲しがつたりする厄介な道具奴等である。コレデハ人間味は何處に之を求め得られよう。

予は力說せんとす、先づ人事支配人、人事技師長を置け。器械よりも原料よりも先きに人間の取扱を研究せよと。

近來米國や英國では此の Employment manager を置く工場が大分ある。其始めの動機は、職工の出入頻繁なるを防ぐにあつた。其道の人々の研究した處では例へば、米國デトロイトにては職工の出入の爲めに、能率を減ずること二十五パーセントであるそうで、之を止めた爲めに二十五パーセントの能率增進を見たと云ふ。（詳くはボイト、フツシアー氏の Industrial loyalty と云ふ本を見よ）此點も我邦に於ても十分に研究す可きことであるが、Employment manager を置いて專問に調査す可きである。而して作業上に於ける人間の取扱を重大事として高給の役員をして之れを專掌せし

め、且つ各種能率と疲勞との問題を研究せしむれば、結局營業上の利益をも增し得よう。米國では Fatigue and Efficiency の問題は、近來大いに研究せられ、其結果を應用して、利益を增進すると同時に、勞働者の待遇に着々改良を施して居るものが殖へて來た。我邦でも少くとも大工場では直ちに之れに傚ふ可きである。例へば前例した大原氏の如き人は世間的の調査事業に費やす金があるなら自己の工場の一部でもいゝから、之を疲勞、能率研究の用に供し、然る可き專門家に托して、實驗、調査、研究をして、他の工場主に參考の材料を提供したならば、國に貢獻し又た勞働者の利害を進むるに於て世間的に聞への宜い事業に於けるよりも更らに有効有力であらうと思ふ。其れに付けても Employment manager に其人を得なければ、我邦多數の工場長の如きを相手では何も出來る見込はない。人間と云ふことに十分に理解あり同情ある人が其處に居なければ、外部から研究者が飛込んでも、手の着けようはないことゝ思ふ。

(十三)

之を要するに國際勞働法制第一條に、勞働非商品主義を公認したことは、目前の効果は一もないであらうが、之を善用すれば經濟生活の改造に取つて一大福音となり、勞働問題の解決に有力なる貢献を爲すことゝ思ふ。我々は Humanity of Labour「勞働の人間性」てふ標語を向後は公然と高く掲げて其の爲めに奮鬪し得られる丈けでも、愉快此上ないことゝ思ふ。大戰爭の齎らしたものゝ內此の國際勞働法制丈けは、實にウキルソンの言前たる「世界をして人類の住むにより善き處たらしむる」一方法である。我邦は無自覺に之に加盟したのではあるが、既に加盟した以上、其加盟をして、大いに有意義たらしめ、大いに有力有効たらしめるは、正さに我々の頭上にかゝる大事業であると信ずる。而して是れ實に、經濟生活改造途上に於ける一大福音と斷言す可きものである。(八・六・十認む)

附言。此文を「解放」及「太陽」六月號の拙文と併讀せらるれば幸甚である

(二) 八時間勞働制の確立

早稻田大學教授 安部磯雄

一 保健上の要求

八時間勞働制の問題に就ては、勞働者側と資本家側との兩面より觀察する必要があると思ふ、八時間制度の要求は久しい間勞働者側より唱へられた問題であるが、愈々其實行に入ると何等か六ケ敷い事情を纏綿して來て却々理想通りに行はれなかつたのが今日迄の實狀である、然るに先般來、米國では或裁縫組合に於て早くも八時間制度を斷行し而も毎週土曜日を四時間に制限して一週間を通じ四十四時間と云ふ實例を示した、斯る例は米國でも寧ろ異數とせらるゝ處で概括すれば四十八時間乃至夫れ以上のものが尠くない、何故勞働時間を八時間に制限すべきかと謂ふに之には種々の理由がある。

勞働者側の理由として先づ第一に時間制限の基礎を爲すものは健康問題である、勞働時間の長きに失すれば失する程勞働者の健康狀態は漸次惡化し隨つて全體の勞働能率に驚く可き影響のある事を免れぬ、今日我國の工場に於ては此最も懼る可き健康問題に餘り多くの考慮を拂はぬ結果勞働者は常に健康上一種の危險を冒して動かねばならぬ、殊に婦人幼年者の勤務狀態に至つては寔に寒心す可きものがある、日本の紡績工場、生糸工場等では十二三歳より二十歳前後の工女を使役して居るが、其勞働時間は十二時間であり、紡績工場の如きは其上に猶四五時間の夜業を課する爲め長きは一日十六七時間を働くのである、此の如き長時間に渉り過當な勞働の結果として健康を害するに至るのは素より當然の事で專門家の調査に依つて見ても紡績工場生糸工場等に肺結核患者の多數なるは歷々證明され居る事實である、其肺病患者が田舍に歸ると直ちに之を一郷一村に傳播し延いては社會の衞生狀態を破壞して害毒の及ぶ處實に測り知られぬのである、嘗つて私が長野縣の某地に赴いた時其附近の或村では村會の決議を以て村內より工女に應募する事を一切嚴禁して居るのを見た、之等は工女出稼の度毎に肺病患者を逆輸

吾々の働くのは人間としての發達を遂ぐる手段であつて勞働共物が人生の目的では無い、昔希臘時代の學者抔は奴隷が學者貴族等の生活を造つて呉れぬならば希臘は進化せぬと考へて奴隷の必要を說いて居た、今日は所謂其奴隷なる者は現存しないが事實は昔の希臘時代に於ける奴隷と等しく少數の者が勉强し道樂する爲めに多數の者が働いて居る、勞働者は資本家の生活の爲めに犧牲となつて居るといふ有樣である、斯る遣り方は人と間しての價値を全く滅却するものであつて、譬へ生産力に多少の減退を見るものと假定しても社會組織の根本的改革の上に之を改めて往く事は頗る大切な問題である、勞働時間の制限は單純なる生産上の利害問題のみでなく人間生活の廣義な解釋よりも極めて重大であり殊に八時間限度と云ふが如き比較的實行の容易なる制限は成る可く速かに實施して廣く産業狀態の改善を期せなければならぬ。

（三）社會政策乎社會主義乎

法學博士　河津暹

一

我國論壇に於て勞働問題の論ぜらるゝこと今日程喧しきことはあるまい、曾て工場法の制定が議會の問題となつた時には一方には資本家側からは盛んに其の法案の不備を指摘して之を葬り去らんと試みたのに對し、一方には工場法の制定を以て我經濟社會の爲には當然なさゞる可らずと信ずる論者は筆に舌に其の意見を發表して輿論を動かさんと試みたのであるがこの重大なる社會政策的施設に關する論議も實は社會一部の論議たるに止つて、我國社會一般は之に共鳴して注意することはなかつたようである、同問題の解決如何に由りては自己の生活に大なる影響のあるべき勞働者階級すら、鎭守樣の祭禮の相談ほどに力瘤を入れなかつたようである。其他勞働問題が時事問題として題はれた機會は決して一再にして止らなかつたのであるが、社會一般からは注意を引かなかつたようである。然るに今日は如何である、數名の友人が集れば勞働問題は必ず其話頭に上るといふも決して誇張の言ではない、從て新聞雜誌も毎日この種の記事を掲載せざることなきに至つたのである。而して今から十年前には「社會主義」は勿論「社會政策」の如き文字を口にするを憚つた社會が今日では此等の文字を口にして何等疑を抱かぬようになつたのは今更ながら社會思潮の變化の激烈なるを驚かざるを得ぬ。十年前勞働問題を論じて稍根本的、過激的に亘つたものに對して少からず壓迫を加へたとは社會が此等の問題に對して殆んど知識を有しなかつたが爲であつて文明國民として汗顏の至りではあるが、飜つて十年經つての今日、縱令、歐洲戰亂の結果、歐米諸國の社會事情に多少知識を得、多少の刺激を受けたとはいへ、我國民の多數は果して此等の問題を咀嚼することが出來るまでの域に達したのであらうか、失禮ながら私は尙この點に疑を抱くものである。我國民の多數が尙これ等の問題を了解し、咀嚼し、正論と邪論とを識別し、更に縱令其の論が理論として正しいものであるにもしろ、俄に之を我國に應用することが出來るや否やにつき鑑別する丈の能力がないとすると、此等の問題を論議する學者先覺者が其の意見を公にし社會民衆を指導するに當つては特に細心の注意をなさねばならぬと信ずる。此等の問題が世間の注意を引くに乘じ、奇嬌なる文字を駢ね、豪快なる言辭を弄んで、民衆の歡呼を買はんとするが如きはこの際大に愼まねばならぬことである、世に曲學阿世は學者として最も耻づべきことといふ、學者が特權階級の利益の爲に學問の命ずる所に背きて堅白の辯を立つるが如きは其罪輕からざれども之と同時に凡俗の歡呼を得るが爲に其の良心に背いた言論をなすことも其罪決して輕くはないと信ずる。

予輩は敢て世に公にせらるゝ勞働問題に關する論說意見を指して悉く世に阿ねるものであると斷言するものではないが、其の論說意見の一部分はこの種のものであるといひ度いのである凡俗の歡呼に迎合するといふのは論者の心事を忖度することであるから、具體的に論者並に論文の名辭を掲げて之を追窮することは俄になすことを憚らねばならぬことであるが、少くとも上に陳べた社會民衆を指導するに當つてなさねばならぬ注意を缺いてゐるものが少くないといふを憚らぬ。論者が如何なる動機から其の說を立つるかは予輩の關知することではないが、其の論が動もすれば社會民衆に危害を及す虞があるから特にこゝに之を排斥するのである。それも社會民衆の多數が十分に正邪を識別する丈の見識素養があるのなら敢てかゝる憂を抱く必要もないのであるが、社會民衆の多數が共れ丈の見識素養がない

とすると、かゝる憂を抱かざるを得ぬ次第である。其れも社會民衆が正邪曲直を十分に識別する丈の見識素養がないにしろ、論者の説明が平明にして解し易いものであつたなら、常識に訴えても、少くとも或程度までは論者の意見に對して取捨をすることが出來ると信ずるけれども、此頃公にせらるゝ勞働問題に關する意見は動もすれば平明なる説明を避けて、故らに難解の哲學的文學を用ひて讀者を煙に卷くものがある。予輩の如く讀書を職業とするものにとりては朧氣ながらも論者の趣旨とする所を捕捉することが出來ると信ずるけれども、社會民衆の多數は恐くは予輩の如く咀嚼する丈の餘裕はないから、論者の片言隻語によりて論旨を判斷し、之を正しいものとなし、或は之れに由りて其の思想を造らんとするものがないとも限らぬ。これが甚だ危險なのである。警察官等が創作や。脚本などの寸言尺語を捕えて之を以て風俗を破るとか道德を傷くるとかいつて、非常識の取締を行ひ識者等から非難を被ること稀ではないが、寸言尺語に由つて全般を推斷し、之を是非するの危險は獨り警察官のみの陷るべきものではない、社會民衆も共に陷り易い誤謬である。警察官等の陷りたる誤謬は其の効果が直接に顯はるゝ丈、識者等からの批判を受くることが出來るのであるが、社會民衆の陷りたる誤解は容易に之を訂正することが出來ないから其の結果は社會の思想を腐敗せしめ、破壞せしめ容易ならざることに立到るのである。予輩が中外新論六月號に勞働問題を論じて社會民衆に教へんとするものは難解の哲學論は避けて平明な説明をしなければならぬとの愚見を披陳したのも畢竟社會民衆をして誤解せしむるの危險を虞れたからである。

二

近頃勞働問題を論ずるものは動もすれば社會主義若くは之に類似の論旨を鼓吹するのである。歐米諸國は今次の大戰亂に促されて社會組織の根柢から改造するのであるから、我國も亦社會組織の根柢から改造しなければならぬ、現今の經濟組織は私有財産制度の基礎の上に築かれたものであるから、今日見る如き富の分配が不公平を來すのである、故にマルクス等の唱へた社會主義の根本精神に由つて私有財産を根柢から破壞しなければならぬ、其は今日は當に其時であると教ふるのである。現今の社會に於て所得額に甚しき懸隔があり、從て富有なるもの益々富み、而かもこれ等の富有者は其の富を善用するの道を知らず、徒らに豪奢なる生活を營み、不健全なる消費行爲をなして恥づ

ることなきに反し、社會生活の落伍者、不幸なる運命に陷れるものは衣食にすら窮するの狀態は世相を觀ずるものゝ直ちに心つかねばならぬ所であつて、何人と雖もこれが健全なる社會狀態であるといふものはあるまい、故に識者はこれ等の社會狀態を矯正せんとするのは當然のことであつて予輩も之に對して異議を挾むものではない。世の中には今日富裕となつたものは決して初から富裕者であつたのではない、同じく貧乏村の住民であつたのであつたが世の多くのものが心なき生活を行ふに當り身を挺して、千辛萬苦、或は死生の巷に彷徨し、或はいふにいはれぬ惡戰苦鬪を行ひ辛うじて築き上げたる富である、其れを富有者を惡魔の如く呪ふのは殘酷であるといふものがある。其れは或る程度までは眞理であらうが、決して全部眞理といふことは出來ない、これ等富有者も衷心から其の造り上げた富其物は自己の力量才幹のみに由つたものであるとは信じてゐまい、僥倖といはうか、運命といはうか、兎に角社會の力に由りてなされたものであることは承認してゐるのであらう、其れがないにしても、力量才幹が光を放つことが出來たのは資本其物が與つて力があることは承認する所であらう。資本其物が偉力を顯はすのは社會組織其物の賜でなければならぬ。社會主義者等の主張が誤つてゐるにもせよ、社會組織の根柢を攻擊するのは其の所であることは承認するであらう。假りにこれ等の富有者は貧乏村から身を起して今日あるを致したのは悉く其の力量才幹に由るものであるとした所で、其の子孫が力量才幹もないのに其の資本力を繼承して社會上層に蹲踞することが正しいものであるといふことは出來まい、其れも、自分獨りで事業を營み、生産を行ひ、販路を擴張するのなら兎に角、其のとは到底出來るものではないのであつて、多くの同胞の力を藉らねばならないことである以上、これ等援助をしたものが衣食にすら窮してゐるのに自分計りが金殿玉樓の裡に生活し酒池肉林の樂を享受することは決して正しきことでないことは富有者と雖も少しく心あるものは氣付かねばならぬ事柄でなければならぬ。故に、世の中で資本主義一點張りの議論をなすものがないではないが其の論旨が甚だ薄弱であつて殆んど採るに足らぬものである。而かも此種の意見も間々見受けるのは世の中で餘りに勞働者本位の議論が勢を逞くして資本家企業家の如きは社會に存在する必要がないかの如くにいはれるから、之に對抗して上に陳べたやうな主張が出るのであらう。予輩は今日の經濟社會に於て資本主義的議論が相當の地歩を維持し得るとは信ずることは出來

ぬ。若し今日の富の分配、所得の形成が公平でないといふ事實を承認する以上はこの結論に到達するのは多くを論ずる必要はあるまい。

三

予輩は今日の經濟社會では勞働問題の解決としては社會主義若くは之に類似の主義に出るか、それとも社會政策、若くは社會改良主義に由るか二者其の一に出でざるものと信ずる、從つてこれからは社會主義が勝を制するか、それとも社會政策が勝を制するかであると信ずる、言葉を換へていへば勞働問題の解決は現今經濟社會の基礎である私有財產制度を破壞する迄行かねば目的を達することが出來ないか、其れとも私有財產制度を破壞しなくとも自ら解決することが出來るかである。

成程、現代の富の分配宜しきを得ないのは根柢に於ては私有財產制が經濟社會の基礎をなしてゐるからであるから私有財產制を破壞したならば資本の魔力を消滅することが出來るであらうといふ想像が起らぬものでもない、然し乍ら、一方からいへば資本の魔力があればこそ、我々が生活をなすに必要な資料の生產が出來、經濟の發展を庶幾することが出來るのである、所で資本の魔力は之を否認することは出來ないが、其の魔力は何も個人の手にある必要はないのであつて社會の共有であつても差支はないではないかの議論も起り得ると信ずる。然し社會のみが資本の魔力を手にすることが出來て、個人は其の魔力の餘光にのみ與ることが出來るのみであるとすると、實は其の魔力を十分に働かすことが出來ないのである、言葉を換へていへば資本といふ魔力は個人の手にあつて初めて十分なる働をなすことが出來るものである。我々が如何に苦んでも僅に我々の生活を安泰に營むことが出來るに過ぎないものとすれば、我々は甚大な刺激を受けないのであるが、我々は安泰に生活を營むことが出來るに止まらずして、子々孫々安泰に生活を營むことが出來るのみではない、更に社會上に優勝な位置を占むることが出來るとすると甚大な刺激を受くるのである。資本の魔力が十分に働をするのは、かくの如き刺激に本きて活動する個人の手に存する場合なのである、そうして見れば、經濟生活の向上の如きは我々生活の標的ではないといふ人生觀からいへば問題にならぬが、苟も經濟生活の向上が我等の生活にとりて輕視す可らざることであるとすると、こゝに矛盾に逢着せざるを得ないのである。即ち、生產を多くし、我々の經濟生活をよくするには

私有財產制を認め、少くとも或る程度までは資本主義の活躍を承認せざるを得ないが、そうすれば資本の魔力が個人の手に存する限り少くとも或程度までは富の分配、所得の形成が公平を失するに至ることを覺悟せざることを得ぬ、富の分配、所得の形成の公平を得せしめようとすると、生產を多くし、經濟の發展を庶幾することが困難とならざるを得ぬ。是れが正直にいふと社會主義若くは之と類似の主義を實行するに困難である一大障害である。それならば社會主義者等は私有財產制を破壞した所で之に代はるべき新しい、而かも社會の發達に有效な、健全な社會組織の基礎を我等に敎へてゐるかといへば悲しい哉今日まで之を敎へて居らぬ、して見れば社會主義者、若くは之と類似の主義を奉ずるものは今日までの所現今の經濟社會組織の缺乏を指摘し、之を攻擊し、從て經濟社會組織の基礎を破壞すべきことを敎へたのみであつて、其れ以上には出てゝ居らぬと信ずる。現に近頃我國論壇に顯はれた勞働問題に關する論說、意見の中で社會主義に由るもの若くは其の傾向あるものは、文章なり言ひ廻しなりは甚だ巧妙であつても畢竟現今の經濟社會組織の基礎を破壞すべきことを敎ふるに止つて其以上には出でてゐぬようである。サンヂカリズムを唱ふるものなどは、現今の經濟社會組織が宜しくないといふならば之を破壞しさへすれば、之が爲に或る社會組織を產れ出ださすことが出來るであらう而かもこの社會組織は縱令理想的でないまでも、今日の經濟社會組織よりは多少善いものであらう、故に新しく產れ出づべき經濟社會組織が如何なるものであるかは特に之を顧慮する必要はあるまい、我々は缺點多い現今の經濟社會組織を破壞すれば其れで宜しいのであると主張してゐるが、隨分心細い話ではないか、この世で添ふことが出來ぬ若い戀人が未來は一蓮托生といつて出來ぬことやら、出來ぬことやら明でないことを賴みに、あえない最後を遂げようとするのと或程度まで似てゐるではないか、側面から觀れば未來に對する憧憬といふよりは寧ろ現在に對する失望といふものではないか、我々はかくまでしなければ、現今の經濟社會の缺點を矯正することが出來ないのであるか、かくまでしなければ勞働問題の解決をなすことが出來ないのであるか、否問題の解決といふよりは其問題の解決は殆んど絕望であるといふのであるか、予輩はこれ等の論者の論調の豪宕であるよりも寧ろ凄愴であるを見て少からず疑を抱くものである。

予輩は勞働問題の解決にかくまで悲觀的態度を採る必要はな

いと信ずる。歐米諸國については予輩は之を論ずる丈の材料を有しないが、我國では幸か不幸か社會政策的施設に氣がついて之を初めだしてから未だ數年にしかならぬ、學者等が工場法の制定の必要を唱へ出したのは餘程前のことであるが、資本家側からの反對があつて永い間實行することが出來なかつた、實行することになつても歐米諸國の工場法と比較して見ると甚だ不完全のものである、其點は甚だ遺憾であるが一面から見ると改善の餘地が多いともいへる、工場法にして既に然り、其他の社會政策的施設に至つては未だに見るべきものが少い、社會政策的施設が未だ見るべきものが少いのは甚だ遺憾ではあるが之を試むべき餘地が甚だ多いともいへるのであるから、政府も、資本家側も、思潮の變遷に注意して、社會政策的施設を實行し、若くは實行することを助けて國民の經濟生活をして安定せしむることに努力して貰ひたい、我々國民は先づ之を要求するのが穩當であり、順序でなければならぬ。これ等の要求もせずに、又其の要求に耳を藉すか藉さぬかにも注意せずに、外國に於ける過激にして、實行することも出來ず、實行することが出來たにしろ之れが我國經濟社會に――若くは我國勞働者階級に幸福を來すことが出來るや否やも甚だ不明である論議に奔ることが得策であるとは考へることが出來ない。或は予輩の意見を以て微溫的であり、姑息であると非難するものがあるかも知れぬが、予輩はこれ等の非難は甘んじて受ける。今日の我國經濟社會は微溫的であるかも知れぬが姑息的でもあるかも知れぬが、一向試みられてゐない社會政策的施設を着々として實行すべき時期であると信ずる。予輩の想像する所では朝野の人士が社會政策の精神を尊重し之に本いて經濟社會の缺欠を補ひ、一種の社會改造を行ふことが出來たならば、國民生活の安定は之を庶幾することが出來るであらうと信ずるのである。

四

社會政策とは一言にしていへば現今の經濟組織の基礎である私有財産制度を其の儘にして置くが企業家、資本家をして自由に行動することを許さない、勞働者の意思人格を尊重して之をして其國の文化に應ずる丈の生活は之をなさしむるは勿論、精神的、肉體的の發達をなさしむることが出來るように施設を行ふことをいふのである。この點から考へて見ても我國の制度の中で改正を要すべきものは多々あると信ずるから識者は徒らに哲學的論理的の遊戯三昧に身をやつすことなく、須く實行的な

實生活的な方面に力を注がれんことを國民の一員として要求せざるを得ぬ。

社會政策は決して咒文ではない、之を口にし、之を筆にした所で、之が爲に國民生活の不安定は取除かれるものではない。之を實行しなければならぬ。國民に對して社會政策を施して遣るぞといつた所で、國民の衣食住は之れが爲によくなるものではない、生活の安定を得やうとするのが彼等にとりては焦眉の急である、其の急を救ふことをせずして、氣休めの辭をいつた所で、何んの甲斐がある、氣休めの辭を聞いた丈其丈期待する念が多くなつたのであるから、之を待つこと久しきに拘らず、其の期待が實現せられなかつたなれば其れこそ過激な思想に奔る結果になることは明白でなければならぬ。期待が大であれば益々其の失望は大でなければならぬ、希望が大きければそれ丈反動が大くなければならぬ。今日の勞働問題は眞劍の問題である、眞面目の問題である。從つて之に對應するものも亦眞劍でなければならぬ、眞面目でなければならぬ、氣休めでは効がない、實行で行かねばならぬ、此理由に由り予輩は社會政策的施設の着々として實行せられんことを希望して已まないのである。

正直にいふと今日我國の勞働問題の論議の盛んなのは勞働者階級が資本家階級に對して發する絶叫といふよりは尙勞働者階級に對して同情を有する學者識者の警告であるといふ方が當つてゐると思ふ、是等の論者の意見が全部正しくないまでも勞働者階級のいはんと欲する所に一致するものがあるから、相當に反響を生じてゐる譯である。其れはそうとして歐米諸國に行はれてゐる過激な議論、文字を以て或程度までは煽動的態度を採つてゐるものもあるようであるから、其の意見が正しくないにしろ、簡短であるが爲に、若くは其議論は簡短にないにしろ之を簡短なるものと誤解するが爲に勞働者階級が其の煽動的文字に刺激せられて、其のことの自己の幸福を増進するものであるかを辨へずして、過激な思想を抱き過激な行動に奔るものがないとも限らぬ、故にこの際世の先覺者は社會政策的施設に由りてこれが機先を制しないと、遂に測るべからざる結果を見ないとも限らぬのである。要するに予輩の見る所では我國勞働問題の將來は一に係りて社會政策的施設が先手を打つて社會主義的思想の瀰蔓を防止することが出來るか、出來ないかにありといひ得る。從つて一方には政府其他が着々として社會政策的施設を實行することを要望すると同時に、勞働問題を論ずるものは我國經濟社會の狀態に細心の注意を拂ひて徒らに過激的思想の

瀰蔓を助長しないことを吳々も希望せざるを得ぬ。

（四）勞働運動を何れに導くべきか

法學博士　河田嗣郎

勞働運動は勞働者の地位の向上、境遇の改善、勞働者階級の解放等を目的とするものであるが、其の目的は又、現制度を認めて行はれる可きものと、現制度を根本的に改造せなければならないものとの二通りに分れて現はれて來る。現制度を認めて行かうと云ふ分は之れまでの實際運動としては英吉利式の職工組合運動の如きものが最も有力なるもので、現制度を根本的に改造しやうとする運動は必竟するに社會主義運動に他ならず、經濟的運動としても現はるゝが又とかく政治的運動として行はるるものである。獨逸の社會運動や、佛蘭西、伊太利其の他のサンヂカリズムや、或は英吉利の新らしい組合運動や、其の他亞米利加の I.W.W. の運動の如きは就中著明なものである。右兩者は何れも同じ勞働運動ではあるが根本的に現制度を肯定すると否定するとの相違があれば、隨分行き方が違つて居る。吾が國の現在の勞働運動と云ふのは徒らに聲ばかりで有て未だ多く實際の勞働運動が覿面の大事實として行はれては居ない然し乍ら近き將來に必ず起つて來なければならぬ勢があり、而して其の勢が漸次強くなるのは疑ふ可くもない。其れを如何に導くか、又如何なる方法を採て進むか、其れは豫め定め難く、實際的に運動を起した上で自ら定まる他ないのである。然し何れの國に於ても、勞働運動の幼稚な時期に於ては、勞働者自身の自覺が充分ならず、自ら運動を起す力の足らぬのが例であるから、斯かる時期に際しては大概は知識階級、言ひ換ふれば有識無產階級の人々が其の運動に携はり是れが先達となつて勞働者を指導し、彼等をして運動の端緒を得せしむるのが例である吾が國の現狀に於ても勞働運動の指導者たる任務は矢張り有識無產階級の人々（是は廣い意味に於て勞働者と云へぬ事はないけれども、現今勞働者と云へば肉體勞働者を意味するが例なれば其意味に於ては勞働者ではない）の任務とならざるを得ない。

是等の人々は元來有識者なれば、歐米諸國の事情も、吾が國の經濟實際狀態も、我國勞働者の實際狀態も解つて居る筈である。從つて是等の人々がいま勞働運動指導の任に當るとならば、大體に於て吾國の勞働運動を如何なる方面に進めるかに關する見當だけはつけて掛らねばならぬ筈である。而して又政府當局者の如きも只徒らに憂へたり又徒らに研究に口を藉りて日を過す可きではない。大體の見當だけは早くつけて、自ら進んで勞働運動の方針の決定に與からねばならぬ。

然らば我が國の勞働運動は將來如何に指導すれば善いかと考ふるに、先づ穩健な考としては、英吉利式に職工組合運動（トレード、ユニオニズム）として現はれて來るのが善からふと思ふ。尤も英吉利式職工組合運動と云へども、何時迄も現制度を肯定して變らぬと云ふものに非ず、現に近時の傾向としては其運動が漸次社會改造の運動に向はんとするやうで有て、廣き意味に於ける社會主義運動となるのは免れ得ない處であらうから、我が國の勞働運動も未來永劫に現制度肯定の態度を取り改めない譯には行かぬので、早晩又矢張り社會主義的運動と化して來ない譯にはゆかない事と信じられる。然し其れは稍後の事で今差し當つての運動としては職工組合運動として健實なる發達を遂ぐるを必要とする。先づ職工組合運動として勞働者の間に堅固なる自助的なる多數の組合が組織され、勞働契約上有利の地位を占め、勞働者一般の地位が高められ、境遇が改善せられ、同時に勞働者の社會的自覺と訓練とが出來上つたならば、其れを基礎として更に進んで更に善美なる狀態に向つて社會及び經濟の制度を改善し改造し行く事が餘程有望となつて來、又有効に行はれ得べき筈である。だから差當ての問題としては、此堅實なる基礎を作るのが必要であらう。政府も一般社會も此の目的の爲めに全力を注がなければならぬ。若し此の堅實なる基礎を築き上ぐる事を忘れて輕擧妄動に出づる運動は兎角破壞的になり易く、革命的傾向を迎へ易く、勞働組合が出來たとしても、其れは佛蘭西式なサンヂカー風のものになる恐れがある。若し吾が國の現狀の如く勞働者も一般民衆も社會的自覺を缺ぎ訓練を缺いで居る際に、勞働運動が斯かる傾向に向つて表はれて來れば、其結果は或は露國の現狀見たいにならないとも限らぬ。破壞は行はるゝと雖も建設は容易に行はれず、社會を擧げて大慘劇を演ぜなければならない事になるかも知れぬ。充分なる建設の見込あり、將來更に整美なる社會組織の作り上げらるゝ見込みありて一時的なる慘劇が行はれる分ならば、將來に於ける大なる利益の爲めに一時

の利益を犧牲にすると云ふ意味にて忍ぶ事が出來るが、建設の見込みなき破壞は只の破壞で有て、其れは決して勞働運動其他一般に社會主義運動の本旨とする處ではない。是に對しては社會一般が協心同力して之を避くるに努めなければならぬ。是は吾々社會生活をなす者の共同の責任である。

扨て官民一般の努力、殊に勞働者の自助に依て近き將來に我國に堅實なる勞働組合が出來上つたとして、尚ほ遠き將來の問題に就て考ふれば、前にも之を述べた如く、其は矢張り社會主義的運動として更に進んで行かなければならないであらう。社會問題一般の解決方法としては矢張り社會改造の大任務が殘る譯だから、是に關しては如何に進む可きかを今から豫想して見るも面白いかも知れぬ。社會組織の根本改造に關しては人も知る如く種々な見解や色々な主義が行はれて居るが、之も吾が國諸般の事情と吾が國民の性情とに照して考へて見る時には、我が國に於て受け容れらるべき主義又は實現せられ得べき社會改造のプログラムは、何れにしても國家主義的色彩を帶びたものでなければならぬと思はれる。國家的色彩を帶びたものと云へば、先づ國家社會主義か或は國家的組合社會主義（ナシヨナルギルヅ）でなければならぬのであるが、此の兩者は可成り行き方が違ふのである。卽ち前者は主として消費的利益の爲めに生產及び分配の國家的統一、國家的直營等の組織を實現せしめんとするものなるに反して、後者は餘りに消費者利益の偏重に陷るを避け矢張り生產者の利益を顧る生產者の團結たる組合（ギルド）制度を基礎として其の上に產業の國家的統一を行はんとするものである。尚ほ又前者は一般的に其思想が餘りに唯物的に傾て、社會主義發生期以來養はれマルクスに依て完成せられたる唯物的社會觀（或は唯物的歷史觀）を根據として立ちたるものであつて、社會改造の事業、將來に於ける社會全般の生活の幸福を齎す可き事業は主として社會に於ける有形的なる諸制度の改造に依て之を行はんとするものである。然るに後者たる組合社會主義は此の唯物的見解に慊らずして、社會改造は制度の改造と同時に人心の改造を行はねばならない、總て社會生活上の諸現象と云はず、一般的に宇宙の現象は精神の働の表現たるに過ぎぬと云ふ唯心的思想に據つて立つて居るもので有るから、社會の改造を行ふに當つては先づ以て人心の改造を行ひ、現時に於ける極端なる物質尊重主義從て生ずる拜金熱、營利心、排他主義等を撲滅して、之に代ふるに宗教、哲學、美術と云ふが如きものに對する憧憬、共助相

互主義の生活と云ふが如きを以てせんとするのである。而して此の精神的改造と相俟つて產業制度の改革としては、中世の組合制度（ギルドシステム）を復活し勞働者が自ら主となりて生產を營み、而も其の生產は必要の爲めにする生產にして金儲けの爲めの生產ではないと云ふ組織を作り出さんと企つるものである。

此の國家社會主義と國家的組合社會主義とは右申す如く根本の考を異にするもので、英吉利に於ても兩者は可成り烈しい論爭をして居るのである。而して此兩者が吾國の事情に當て篏めて何れがよく我國に適するか、從て將來の社會改良のプログラムとして何れが取らる可きかは、俄に判斷し難き事なるも、若し兩者の中間を行き兩者よりして適當なる處を吸收して、よく我國の實情に適した一個の主義が作り上げられ、一個の學說の系統が出來、一個の纏つた實地政策上のプログラムが出來上る事ともなつたなら餘程面白からうと思はれる。私は今此點に就て頻りと頭腦を惱まして居る所である。從て是等に關する考の纏た時には又世間に問ふて見たいとも思つて居る。社會一般に於ても斯ふ云つたやうな考に於て、差當つての勞働運動と併せて又將來の社會改造の大方針に就て考て見る事を希望せざるを得ないのである。

何れにしても社會改造の事業は一朝一夕にして革命的に行はるべきものではないので有て、よし革命が行はるゝとしても其の行はるゝ爲めには基礎を必要とし、然かも其の基礎が我國に於て今最も缺けて居るのであるから、何は扨て置き此の基礎を作るのが當今の急務で有る。而して其の基礎は實に堅實なる勞働組合運動に於て提供せられなければならぬと信ずる、將來の事は其の基礎の出來るに連れて着々と考へて行き度いものである。

(五) 跛的勞働問題に就いて

阿部次郎

改造記者足下

御提出の問題に就いては私は全然門外漢であります。此場合

に適用せらる可き道徳原理に就いては、因より多少の信念を持つてゐるに相違ありませんが、殘念なことには、私にはこの問題の事實に關する徹底した知識が――と云ふよりは寧ろ大體上の智識さへ――缺けてゐます。私は唯自分達の住む社會の上に掛つてゐる一大暗雲として、不安と焦慮とを以てこの問題を懸念してゐるもの、此問題の小學生として識者の徹底した高教を待つてゐるものに過ぎません。今貴下の御命令によつて愚見を申上るのは、要するに小學生の質問書に過ぎないのです。

第一に勞働問題は單純な經濟問題ではないと思ひます。若しこれを單純な經濟問題として見れば、現在餘計に困つてゐるのは工場勞働者よりも地方の小農ではないでせうか。いくら米が高くとも小農よりは所謂「勞働者」の方が樂ではないでせうか。固より工場勞働者には失業や怪我等の危險が多く、此等の點に於いて特別の顧慮を要することは云ふまでもありませんが、全體の收入が少いことに就いては工場勞働者よりも寧ろ小農の爲に心配してやる必要があるのではないでせうか。それにも拘らず工場勞働者の事が現在勞働問題の中心となつてゐるのは、彼等が人格上道德上保健上特殊の危險に晒されてゐるからでなければならないと思ひます。勞働時間工場設備救護保險制度に關する要求は彼等が人格としての要求であつて經濟的物件としての要求ではありません。さうしてこの要求は苟も彼等を人格として認める以上は、其國狀に應じて必ず充さなければならぬ要求であります。彼等が自覺して要求しないならば國家が自ら進んで與へてやらなければならない權利であります。此方面の缺陷の救濟をも勞働者自身が進んで要求するまで放任すると云つたり、資本家の「溫情」に待つと云つたりするのは胡魔化しであります。此意味に於いて勞働者を保護するは私娼を征伐したり傳染病を豫防したりすると同樣に、國民の保健上敎育上の必要であります。これは決して資本家の任意な、要するに打算的な「溫情」に任せて置ける問題ではありません。國家は無自覺な勞働者に代つて資本家を强制する義務があると思ひます。

殊に貴下の先刻の御話のやうに、日本の勞働者の六十パーセント以上は女であるとすれば、この問題は女性に關する特別の顧慮を以て考究しなければならぬ問題であります。先日信州に旅行した友人の話によれば、同地方の製絲工場の工女は「熱情主義」によつて――色事專門の男工との肉體的關係によつて――繫ぎとめられてゐるのが多いといふことでしたが、此の如きは資本主義、生産第一主義の弊害として實に憤慨に堪えないところであります。而も彼等は不攝生な自墮落な工場生活の結果として大低不姙症に陷り、身心の荒廢は女郎に賣られたものよりも甚しいといふではありませんか。これはどうしても此儘にしては置けない問題であります。これは生産費の膨脹物價の騰貴を賭しても改善しなければならない問題であります。さうして資本家に自己犧牲の精神があり、政府に徹底した財政々策があれば、如何に勞働者の人格的待遇を向上せしむるも、物價騰貴を或程度で喰留めることが出來る筈だと思ひます。私は現今の工場法が、國民の道德上保健上の見地から一日も早く徹底的改正を見ることを希望してやみません。

併し勞働問題は固より經濟問題でもあるには違ひありません併し經濟問題として見ても、それは一つの產業に協力する資本家と勞働者との利益分配問題ではすまないと思ひます。今假にこの方面の分配は公平に行はれるとします。國家の特殊な保護を受けつゝその重役に半期で十何萬圓とかの分配をしたとか云ふ日本郵船會社の如き會社が、世間體を憚つてその從業員の全體に殆んど平等の分配をするとします。さうすれば社內の不平はなくなるでせうが他の勞働者との不平均は依然として存續します。又凡ての工場勞働者が公平な分配を受けるにしても彼等に――此等の小成金に――五十錢以下の米を食はせなければならぬ小農は益々物價騰貴の爲に泣かなければなりません。勞働問題は、經濟問題として見れば、資本階級の全體と勞働階級の全體との間の分配問題であります。さうしてこの場合には、勞働階級の中堅をなすものが小農であることを特記しなければなりません。私は我が愛する小農のために力を籠めてこの事を云つて置きたいと思ひます。そうして道德上此等の小農はあらゆる勞働者中最も優秀な人達であります。日本や露西亞のやうな國柄では、小農の問題を閑却して勞働問題が解ける譯がないと思ひます。私は工場勞働者のみの利益を主として勞働問題を解かうとする主張には反對です。

然らば資本家全體と勞働者全體との間の分配は如何にすべきか。この問題についても多少の考がないことはありませんが、何分このやうな大問題に對してまだ自分でもあやふやな思想を述べるのは不本意ですから、當分差控へることにしたいと思ひます。唯この問題は所謂溫情主義でも、所謂主從觀念の復活でも、又勞働者に澤山金をわけてやることでも、共産主義的制度の樹立でも解けないと考へてゐることだけは申上て置きたい。

第一に、傭主が氣が變れば何時でもとりあげることの出來る恩惠、幸ひに一代の間は續くにしても馬鹿息子が出來れば何時轉覆するかも知れないやうな恩惠、さうして假令永久に轉覆せざるにせよ到底局部的現象たるに止つて要するに勞働者全體の問題を解決するには足らざる恩惠――こんな「恩惠」で何が出來ませう。この「恩惠」を「道德的義務」と感じて彼等にこの義務を强ひる權利を國家に托するだけの覺悟のない資本家、又法律の制裁によつて資本家に溫情主義の實行を命令するだけの決心を持つてゐない政府――此等の資本家と政府とが說く溫情主義の說敎が何になりませう。第二に、奉仕の觀念が道德的なのは社會人類に對する奉仕であつて、資本家の利益に對する奉仕ではありませんから、この間違つた基礎の上に立つ舊道德を復活して現狀維持の小康を偸まうとする企圖が到底ものにならないことは知れきつてゐます。資本勞働兩階級の鬪爭を避けようとするならば先づ資本家自身が社會人類に對する奉公の精神を實行しなければ駄目です。資本主義の徹底的處分を承認するだけの勇氣がなければ駄目です。自分がこの實行を怠りながら傭人の「忠義」を要求するなどは虫が好い骨頂です。第三に、さればと云つて勞働者に餘分の金を分配してやることが決して勞働者の幸福にならないことは、既に戰時中に於ける幾多の事例が證明してゐると思ひます。從來の勞働者を小資本家にすることだけでは決して勞働問題の解決がつくわけがありません。勞働問題の中心は寧ろ勞働者に對する人間らしい生活の保證と、分配の不平衡の防止にあると思ひます。さうして分配の不平衡を防ぐ方法は、一つの產業にあづかる資本家と勞働者との間の分配の平均にあるといふよりも、寧ろ資本家の法外な利得を國家が抑制し若くは徵集してこれを一般的福利のために使用するところにあるのではないでせうか。第四に私有財產を否定する意味の共產主義は理想的な宗敎團體にあつてのみ始めて實行が出來る主義だと信じます。今日のやうに利己と享樂とで固つてゐる人心をそのまゝにして置いてその間に共產主義の制度を布くのは、唯懶惰と掠奪との奬勵になるに過ぎますまい。私は今日の社會に於いては何人の制肘をも受けずに自ら使用し得る若干の私有財產を欲するものであります。又我等の文化的事業に使用するために、政府の保護を受けずに纒つた文化的事業を企てる自由を保留するために、多少の財產的不平均をも――財產が私有として「吹き溜め」になつてゐるところをも必要とするものであります。併しその吹き溜めの權利は、勞働者の道德上保健上の福利を犧牲とせざること、勞働者にも人格的敎養と家族的團欒と子女の敎育とに必要な分配を與へることを條件として始めて許される權利であることは云ふまでもありません。この條件を充すことは今日の社會に於ける絕對的必要であります。さうしてこの改革が「我國特有」の方法によつて平和の間に行はるゝか恐るべき混亂を通過するやうになるか、それは偏へに資本家と政府とが思ひきつて先手を打つか、勞働者の對抗略取の運動に引ずられて所謂「溫情」を小出しにして行くかによつて定まる問題だと思ひます。若し後の順序をとるやうになれば恐るべき混亂の後に更に恐るべき勞働者の專權がやつて來るのは誠にやむを得ぬ「世のなり行き」です。今の政府や政黨はこの自然の成行をどうしようと云ふのでせう。

(六) 溫情主義に就て

法學博士　桑田熊藏

近時勞働問題解決の方法として溫情主義なるものが世間に現はれた何人が之を首唱したるや又何年頃より起りたるや之を明かにするを得ざるも目下資本家や官僚の間に於て相當の勢力を有せる思想たることは疑もなき事實である此思想の論據に就き又其實行方法に關し未だ精確なる說明に接するの機會を得ざるは遺憾の事である兎に角溫情を以て資本家と勞働者との聯絡を圖ると云ふ常識に基ける通俗なる思想にして且つ資本家や政府に立てる者に取つて都合よき事である

余は我國に於ける此思想の系統を按ずるに曾つて主從關係とか家族關係とか云ふ語が頻りに資本家の間に行はれたとがある然るに主從關係や家族關係と云ふ語には貴賤尊卑の階級的觀念が含まれて居るが故に勞働者の立場より云へば寧ろ之を嫌惡するの傾あるのみならず近世の思潮たる平等の理想に背馳するものとして識者の擯斥する所となつたのである於是乎此舊き思想は新らしき名稱を以て溫情主義として世に現はるゝに至つた溫情主義と云へば勞働者と資本家の間に階級の觀念を沒却し双方

とも對等の地位に立つて道德の關係に依つて聯絡を保つことになるのである之を要するに不對等の道德關係に代ふるに對等の道德關係を以て二階級の調和を圖るに在るのである

溫情主義の主張者は之を以て我國に特有なる勞働問題解決の方法として頻りに之を誇張するの傾向がある之に反對する者は之を以て歐洲に於て識者は已に之を高閣に束ねて之を顧みざる所の陳套なる學說に基ける舊思想なりとして一概に之を排斥し去るのである此正反對なる二種の見解は孰れが正當なるか是れ余が玆に說明を試みんとする所である

余は歐洲の學理實例に徵し抽象的に云へば社會改良主義具體的に云へば社會政策に就き三種の方針あることを常に信じて居るのである即ち國家の權力に訴ふる所の國家的方針、勞働運動に依る所の個人的方針、資本家の道義に依る所の慈惠的方針である我國に於て所謂溫情主義なるものは即ち此慈惠的方針に外ならぬのである之を以て我國民性や歷史的事實に基ける特有の思想となすは固陋の見解と云はねばならぬ去れば余は溫情主義を以て慈惠的方針の社會政策の意義に解し先づ慈惠的方針の趣旨を明かにするのである

慈惠的方針の理想は經濟と道德の抱合と云ふ一語を以て之を盡すことを得るのである之に關し最も極端なる思想は道德を以て經濟の上に置き凡ての經濟行爲を道德化せんとするのである夫の「マークス」一派の社會主義が凡ての人類の行爲を經濟化せんとする所の所謂經濟史觀と正反對の地位に立つものである此思想は歐洲に於て宗教道德を本位とせる社會改良家の間に行はるゝものである玆に其一例を擧ぐれば獨逸にて「ラッチンガー」氏は「經濟の道德的基礎」と題する書に於て所有權を說明して居る之に依るときは凡ての財產は神の所有である人の所有すべきものでない所有權なるものは必竟するに人が神に代つて神の財產を管理するに過ぎぬのである去れば人が神の財產を管理するに當つて之を自己の欲望の爲に濫費するは固より不當事たるのみならず私利私慾の念に驅られ妄りに之を增殖するも亦愼むべき事たりと說けり又經濟學上に於て節約の觀念に就ても將來資本增殖の目的を以て節約の論據とせる一般の定說を排して之に代ふるに新らしき意義を以てせるのである即ち世間に存在せる消費物には一定の數量あり自己獨り多額の消費をなすときは之に伴つて他人の消費を減少するの結果を生ずるなり去れば他人に對して成るべく消費の餘裕を生ずる爲めに自己の消費を節制せざるべからずと說けり是の如き極端なる學說は慈惠的方針の

說明に就き價値少なきを以て筆を之に止め更らに穩健なる學說に移り說明を試みるのである

適當なる程度に於て經濟と道德の抱合を圖るの思想は佛國にては社會改良主義の泰斗たる「ルプレー」に依りて唱道せられ又社會政策の熱心なる主張者たる羅馬法皇「レヲ」十三世は其敎書に於て此意見を發表して居る獨逸にて社會改良學者の團體として最も有力なる運動をなせる社會政策會の創立宣言書に於て此趣旨は明瞭に現はれて居るのである「アナーヒズム」とは云へ其學說は以て參考となすべき「クロポトキン」は其著書相互扶助論に於て之に關する理論を發表して居る之に依るときは凡そ生物界に於て生存競爭と相互扶助との二大法則が行はれて居る然るに進化論者は生存競爭の方面のみを見て相互扶助の方面に及ばざるは遺憾の事である人類の關係に於ても亦此二大法則は並んで行はるゝことは爭ふべからざる事實であると斷定して居る

余は此斷定に左袒する者である而して生存競爭は經濟の法則たり相互扶助は道德の法則たりとの前提より立論するときは經濟と道德の抱合は啻に勞働問題の解決に關し社會改良家の將來の希望たるに止まらず是れ實に社會を支配せる現實の法則であることを認めざるを得ない從て慈惠的方針は人類の本性と社會の組織に於て其根柢を有するものと云はざるを得ないのである

凡そ勞働問題の中心は分配の問題にあるのである奈何にして資本家と勞働者の間に分配の公平を保つべきやは此問題の骨子である神髓である社會主義の如く新社會の建設に依ることが唯一の解決方法たりと主張するものは措いて之を問はず苟も社會改良主義に依り現社會の範圍に於て之が解決を求むる者は此點に向つて其力を集中するは必然の事である然り而して公平なる分配をなすに就ては勞働運動に依りて資本家に壓迫を加ふるの方法もあらん國家の干涉に依り之を調節するも亦必要の事たり之と同時に資本家が進んで慈惠の施設をなし其所得を勞働者に分與するも亦可なるべし分配の公平は必らずや勞働運動か然らざれば國家の干涉に依らざるべからず其他の方法は凡て不合理なり不正當なりと云ふは誤謬の見解たるを免れぬのである

右述ぶる所に依れば慈惠的方針は理論上の根據は牢乎たるものあり之を以て社會政策の一方針となすに於て何等反對すべき理由を見出だすと能はざるのである我國溫情主義の唱道者も漫然として固有の民風とか歷史の因襲とか陳套なる理由を拋ち正確なる學理に於て其陣地を求むるならば識者の之に對する非難は大に緩和せらるゝことを疑はぬのである

是を論じ來るときは或は余を以て慈惠的方針即ち溫情主義崇拜者となし謳歌者となす者あらんも余は唯此方針を以て社會政策の一方針と認むる者である夫の資本家や官僚が之を以て唯一の解決方法となすか然らざれば之を以て重要なる解決方法となすことに反對の意見を有せる者である

慈惠的方針は之を實行するに當つて至大の困難之に伴ふことを覺悟せざるを得ない顧ふに此方針の前提たる經濟と道德との抱合にあることは先きに述ぶる所である去れば資本家に在つても勞働者に在つても道德觀念は必要なる條件たることは固より言を俟たない然れども自由競爭に驅られ錙銖の利を爭ふ所の資本家に對して此觀念の發達を望むことは至難の事たるべく時に往々慈善家と名づくべき者あらんも天下の資本家に向つて慈善家たらんことを要求するは百年河淸を俟つの類たらんのみ歐米諸國に於て宗教の信仰は尙ほ人心を支配せる所に在つて資本家の道德は或程度に於て之を維持することを得んも我國の如き宗教の威力殆んど地に落ちたる國に於て此事たる更らに一層の困難を加ふるや明白なる事實である去れば經濟と道德の抱合は理想として間然する所なしと雖も之を事實に現はすこと容易に非らずとせば慈惠的方針の社會的効果は推して知るべきである

資本家をして道德觀念を發達せしむるに就き奈何なる方法を採るべきやは道德宗教の問題に屬し余輩の喙を容るべきことに非らざるも之を經濟上の見地より觀察し工業組織と慈惠的の方針の關係を說明するは必要の事なりと思ふのである

慈惠的方針の實行に就ては左の條件を具備せる工業組織たることを要するのである即ち一は小工場たることにして一は個人營業たることである

何故に小工場たるを必要とするかと云へば資本家と勞働者との間に道德觀念を喚起する爲には二者互に接觸し昵近するの機會多きこと肝要である小工場に在つては資本家は勞働者と臂を交へて談笑し其間和氣の靄然たるものあるべきも大工場に在つては資本家と勞働者の間に畫然たる溝渠存し双方親愛の情を起こすの動機甚だ薄弱なるを免れぬのである

何故に個人營業たるを必要とするかと云へば個人營業に於いては資本家と勞働者の關係は比較的永久に涉り資本家は自然に勞働者に對する同情を起こす場合多かるべく又資本家にして道義の念に富める者ならんには外部の制肘を受くることなく自己の思ふまゝに慈惠施設を遂行することを得るのである之に反して會社營業に於ては重役は一定の期間を限つて團體を代表して

勞働者に對するが故に其性格の奈何に拘はらず勞働者に對する道德の觀念稍々薄きことを免れざるのみならず一面には株主の利害を顧慮する結果勞働者に向つて其同情を充分に發揮する能はざるのである

慈惠的方針の代表的施設とも云ふべき純益分配制に於て此事實は明に征服せられて居る之を各國の實例に徵せんに純益分配制なるものは本來の性質として實行の困難なるとは已に識者の定論となれるのであるが之に關して充分の効果を收め久しく存續し模範を後世に示せるものは多くは此條件を具備せる工場である然らざる場合には失敗に了はれる事例少なからぬのである

右述ぶる所の二種の條件は固より概括的說明にして大工場にして會社營業たる場合と雖も慈惠的方針を實行せるの事實を否定せんとする者ではないのである

余は茲に本論を了はるに當り以上の所說を約言すれば社會政策に於ける慈惠的方針即ち所謂溫情主義なるものは其理想や觀念に於て敢て非難を加ふべきものに非らず社會政策の一方針として稱揚すべき價値あるものなるも之が實行に就て道德の問題之に關聯せる爲に至大の困難之に伴ふを免れず從つて之が適用の範圍は狹隘なるべく到底之を以て勞働問題解決の主要なるものとなす能はざることである

新刊紹介

生活と文化　金子筑水著

思想界の中心問題として目下盛に論議せられつゝある文化主義、即ち文化とは抑々何を意味し且夫れが我等の實行生活に如何なる關係を有して居るかの重要問題を解決せんが爲め主として歐羅巴文明を取つて生活の意義を觀測し分析し批判し若しくは批判せんと試みたるものにして載する所の論文『文化と文藝』『民族性の意義』を始め二十餘篇は何れも著者が深き硏究の結果各種の雜誌に發表せるものを蒐集せるものにして文化の意義闡明して剩す所なし（定價金貳圓貳拾錢、牛込通寺町南北社）

英譯 落穗　和田垣謙三著

明治天皇、孝明天皇兩陛下御製、昭憲皇太后御歌を始めとし和漢近古に亘る著名の詩歌、文章、哲學、俳句、又劇數百篇を博士獨特の奇警と洒落を以て翻譯せしものなり英文學界に於ける權威博士に就ては吾人の呶々を要せず、單り英文を學ばんと欲する者のみならず凡ゆる文學を好愛する者は速かに一本を机上に供へよ然らば疑惑の裡に修得せし詩も歌もみな一時に釋然たるものあらん。（定價並製壹圓六拾錢特製貳圓六拾錢、牛込通寺町南北社）

の氣質を善い意味に導いて行くなれば、即ち近來喧傳せられて居る彼の社會主義、あるひはインチビリアリズムの如き外來思想と、日本の現狀を調和せしむる一助となる事は疑ふべくもないのである。

扨て其の日本人氣質とは何であるかと云へは即ち吾が國在來の武士道である、目下の如く時局紛糾を極めた時、國民の胸の中に燃ゆる忠君愛國の思想である。

僕が近頃喜んで居る事は、今回の戰爭で思はぬ儲けをした所謂戰爭成金なるものが、自ら進んで其の利得を公共事業に寄附し、公益の爲めに使用する傾向の見へる事である。而も其れは格別他から敎へられたのではなく自ら進んで爲して居る、是れ即ち商人の胸底に潜んで居た武士道的精神の發揮されしものと信ずる。日本人は知らず識らずの間に國家及び社會の恩惠を感じ之に酬ゆるの義務を知つて居る國民であると云へるのである。

僕の知つて居る範圍で個人企業家會社や企業者の中にも隨分勞働者優遇の方法を講じて居る者が多い。現に先日も心易くして居る工場の番頭が訪ねて來て申すには、私の工場では純益金の三分の二は主人の收益とし三分の一は職工に配當する組織にしやうと思ふ、と云ふ話で有つた。中には怪しげな會社などが有つて何時の間にやら職工の積立金が消へてしまふ事があるが、確實に利益配當を職工にまで及ぼす事が出來るなら之れに優つた事はない。此の主人は決してピロフイトシアリングの講義を聽いたのでも何でもなく全く自發的に思ひついたのである。日本にも自發的の社會主義者もあれば又キヤピタリズムの人もあらう、然し乍ら今後は必らず斯の如き人が實業家中より現はれて日本人を指導して行くだらうと信じて居る。

政治上に於ても曾て流血の慘を見ずして憲法政治を見た吾が日本では經濟上にも外國の如くサンヂカリスズムやソシヤリズムの過激な運動に惱まさるゝ事なく平和に勞働問題なども解決されて行くだらう。其の爲めには勞働者自身も自發的に武士道の精神を忘れず、資本家或は學者は國家社會の恩惠を忘れなかつたならば其處に兩者間の調和が平和の裡に計られて行くのであると僕は信ずる。職工優遇法なども當然の道として講ずる、工場法なども自然の法則として遵て行く。社會政策である、慈善主義であると特別に考へなくとも他から見れば是れが實行されて居るのでなければならぬ。

然らば國家社會の恩惠と云ふのは何であるかと云へば、例へ

ば日本でも戰爭の影響で思はぬ金儲けをした者がある。然し是れは一歩進んで考へると國家が確立して居ればこそもうけたのである、若し日本が戰敗の國で有たなら儲けどころの騷きではないのである。意外の利得を獲たのは全く國家の恩惠であると、自覺すべきである。近來土地投機が流行して居る、其の土地で儲けた人も、是れは社會が進步した爲めに儲かつたのである、白耳義の如くに戰禍を蒙つた國で有つたなら地價は下落するばかりである、儲けたのは國家の恩惠である、と斯う自覺すべきであらう。

さう云ふ風な自覺が起つて來れば眞逆利益を專有すると云ふ譯にも行くまい、土地にしても政府が土地の改良を考へるとすると進んで自分の儲けた土地を提供するが善い、土地收用法などの適用を受けるやうな不體裁な事はあるべき筈でない。

二

外國にはコレクチブズム（合衆主義）と云ふ言葉がある。吾人は國家に對し合衆的に報恩し、同時に子孫に對つては合衆的に恩惠を施すと云ふ事で、此の合衆的（コレクチブ）と云ふ觀念が最も必要な事である。昔は忠臣孝子が多かつたが今日では其れが稀になつた、而して主從の關係なども昔は餘程道德的で有つたが今日では何れも面白くない、寧ろ野蠻な臺灣とか南洋とかに行けば却て昔の美風が殘つて居る、と慨嘆する者が有るが是れなどは其の合衆的の意味の解らぬ時代遲れの言葉である、昔は個人的で有つた報恩の範圍が今では合衆的に擴大せられた事を知らぬ人の言である。社會が未開の時代には道德範圍が狹かつた。

今日では使用せらるゝ職工の數も數萬に達し主人も昔の如く只一人ではない、職工は社會全體から恩惠を受け社會全體を主人として居るのである。昔だつたら一人の親方が自分の乾分（雇人）全部を保護して居たが今日はあらゆる雇主が合衆的に職工を保護しなくてはならぬ、更に擴大して國家全體が勞働階級を擁護しなければならぬ、勞働法だの工場法だのは此の意味に於て作られたのである。同時に職工側から云つても職工全體が合衆的に國家全體に報恩して居るので有つて、今日尙ほ舊幕時代の親分乾分の關係を云々して未開地の臺灣や南洋などの眞似をしやうなどゝは全く時代を知らぬ者と云はねばならぬのである。

彼の同盟罷工の如きは勞働者が合衆的に恩を忘れた爲めに起るので、勞働者全體がアザーホールドして合衆的に國家の恩惠

ない、即ち「ペチー」の如き「ゴドウキン」の如きは其主なるものである、然かも前後一年を隔てゝ彼れの最愛の夫人と長女とが相次で世を去りしことゝ彼れが過度の勞働とは著しく其健康を害して、彼れは千八百八十三年三月十四日自己にとりて第二の生命たる資本論を草せし「テーブル」によりて瞑目せり、生前彼れを最も理解せし「エンゲルス」の記せし中に「多分、醫術で彼れの命は尙ほ二三年を惹止めることが出來きたかも知れぬが、然し斯くの如き存在は「マルクス」の堪ゆる處でなかつたと思ふ自分の事業を完成することが出來ぬことの意識を以て生活することは何等特別の苦痛なくして永却の浪に葬らるゝに比すれば此上もなく苦痛である」と。

以上述ぶるが如き、體驗と環境とによりて築かられた「マルクス」其人の四個の大建築物は社會的な價値に對する虛無主義と唯物史觀と餘剩價値論と政治的社會主義とである。

五

「ウキルヘルム、リーブクネヒト」が「マルクス」の知遇を得た初期のことである、彼「マルクス」は自然科學が今、當さに新しき革命に對する準備をなしつゝありと信じたと共に十八世紀に世界革命を惹起した「汽力」なる主權者の勢力が失墜して、其代りに遙か偉大な革命者たる電力が其地位を占む可きことを語つた其際、彼れは熱烈な意義で數日前彼れは倫敦市の目抜の場所である「レゼント」街に汽車を運轉せしむる電氣機械の雛形が一般公衆の展覽に供せられたことを告ぐると共に更に進んで叫んだ言には「今、既に問題は解決せられた其結果は蓋、計り知り得可からざるものがある、經濟的革命の進展する途に政治的革命は勢ひ其跡を逐ふことになる、何んとなれば後者は單に前者の表現に過ぎないのである」と、斯くして彼れは自然科學、機械學の進步や、世界其者に對する概念的說明や、殊に唯物史觀と稱せらるゝものに就いて平素の懷抱する處を述べたのであるが當時、彼れが自己の所信を直截に述べた結果にや、「フリーフクヒト」は自己の多年の疑問は宛ら長閑かな春の光に照されし淡雪の如く消え去つたと云つてゐる、更に「マルクス」及彼れの一派が如何に自然科學に憧がれたかは其著書の明かに吾人に示す處で、例者、「マルクス」は其資本論の卷頭に於て經濟的發展を自然的發展の史的過程と見做した如き或は資本主義的生產の法則を自然法として說明せしが如き、更に史的自然法の語は彼れが屢々繰り返した處である、又、後日自然科學に親んだ「エ

ンゲルス」の如きも「フォエルバハ」の唯物論の缺點は彼れが近世的な自然科學に近づくの機會を見出し得なかつた點であると云つてゐる、要するに自然科學は「マルクス」一派にとつて革命的意義を有する科學と信ぜられてゐたのであるが、然し彼等の自然科學に對する態度は後の「ベルグソン」及「ポアンカレー」に見るが如き透徹的のものでなく「マサリック」（現時「チエック、スロバック」の大統領）が云たように單に一研究法上の片言（Wauwau）に過ぎないのである、現に「マルクス」は吾人の知る範圍では何等自然科學の修養を積んだものでなく、「エンゲルス」に至つては一、二の點に就いて自然科學的知識を有せしのみで、事實上、自然科學的研究や自然科學的思索は我等の彼れに就て見出す能はざる處である、若夫れ「カント」の自然科學に對する態度を以て「マルクス」のそれに比すると、我等は後者に就て何んとなく輕薄な態底や皮想や見解を見出すのである。斯くて其皮想な見解は宗教を以て單に有產者が一般人民に嗅かしむる阿片と見做し、哲學無能論に於ては「フォエルパハ」に共鳴し、玆に一切の文化的價値を否定するに至つたのである、實に彼「マルクス」は近世の思想界が產出した一種の虛無主義者である。

六

「マルクス」派の或者に於て、今尙ほ金科玉條として信奉せらるゝ唯物的史觀更に適切に云へば經濟的史觀なるものは、必ずしも「マルクス」其人の創見ではない、既に「サン、シモン」の如き晚年の著書中に產業の進步發達を以て歷史の決定的要素と見做し、其他、彼れと其說を同ふする「ミーネ」、「ギゾー」の徒の如きも何れも或時代の思想制度等を以て當時に於ける經濟的狀態の反影となし、總ての法則中、所有權に關するものを以て最も重大なものと見做し、彼の政治的鬪爭も結局之れによつて實現するものと認めてゐるのである、又、「プルドン」の如きは國民經濟學を以て歷史解決の鍵となし、即ち後者は事實を前者は之れが原因を提供するものとなしてゐる、斯くの如きは明かに「マルクス」以前に於て既に佛蘭西思想の中に唯物的史觀の潛んでゐるものを表現せるのである、而して彼れは唯物的史觀に就いて警句的に發達せるは、「プルドン」の「不幸の哲學」に對する答辯とも見る可き「哲學の不幸」と題する書で、更に綜合的に發展せられしものが「エンゲルス」の協力の下に成つた世に有名な「共產主義の宣言書」である。而して之れが主要な點を概括的に

勞動問題批判

二

S 30
69

――《改造十二月號》――

直接行動

國民はいかにして進むべきか、いかなる針路に向へば可なるか、天下此の問題に迷はざるものはない。國民は不完全ながらも、自らの代表者として議員を議會に送つておる。しかもその議員の取れる行動の、業に時代と何等の理解なきのみか、その思想も現代に取り殘されたるは掩ふべからず。三百九十の頭顱中果して幾人か現代の潮流を解するものぞ。現在の議員、政府にして然りとせば國民は何れに向つて政治を求めたらよいか。

我國民は穩和なる社會、穩和なる政治を愛好し、社會のすべての問題を平和に解決するを希望してゐる。然るに輓近我國民の傾向はどうである。すべての問題は政治を通して解決さるゝのが、穩當であり、圓滑に運ぶに拘らず、動もすれば直接行動に出てんず形勢を示しつゝある。議會を通しての政治が眞に國民の期待に副はぬ場合、果して我國民はいかなる道を選んで進まなくてはならぬか。この問題は眞に國民としても。國家としても第一の緊急事として研究すべき大事である。惰眠を貪れる我が議會、根本の究明に透徹せざる改造論者が一度も思ひを玆に潜めざるは何たることだ。

政局の衝に當れる原君は總理として司法を兼ねて居る。兼任そのものが既に識者の疑惑を招く、加之、總理としての氣宇も經綸もなきのみか、時代の了解さへない筈である。反對黨の加藤君は因循にも貴族院を出でずして、世界の改造を呼號しておるところ甚しく滑稽撞着の感がある。眞に日本の改造に深き同情を有し、眞に日本の政治を根柢より改革せんと欲する抱負あらば、家督は嗣子に讓つて大に起つべきの時ではないか。而も加藤君は上院に於ても孤獨の地位にあるほどの無勢力、無氣力者である。原君に對する世人の疑惑、加藤君に對する世人の期待がかくの如くであつたら、日本現在の政治家は一刻も早く總勘定をなさねばならぬのだ。

因襲の陋弊を打破することに政府が干渉の手を緩めぬならば、そこに恐るべき直接行動の第一手は擧げられはせぬか。尤も直接行動そのものが悉く過激、破壞を表徵するものとは思はない。しかしその手が怖かつたら直に普通選擧を斷行するより他に途はない。これが眞に國民を思ひ、國家を愛する爲政家の採るべき道である。これをさへ躊躇逡巡したら日本の將來は大なる不安を以て眺めなくてはならぬ。其の時の責任は我にあらずして原内閣にある。斷じて我等の責任ではない。（一一、一四日）

階級鬪爭批判

產業戰爭に於ける無抵抗主義

――階級鬪爭說の否定――

賀川豐彥

階級鬪爭の事實

私は階級鬪爭の事實を否定するものでは無い。マルクスも、シュモラーもこれに就て詳しく書いて居る。然し私はソレルの樣にそれを學說化しても、人間が救はれるもので無いことを、世界に告げねばならぬ。ボルゼヴヰズムと唯物社會主義とサンヂカリズムと私が別れるのは此の點からである。劍で立つものは劍で倒れるのである。エッチ・ヂー・ウエルスが『此度の戰爭は戰爭を絕滅せしむる爲めの戰爭だ』と云ふて、英國の戰爭主義に贊同したことを心地よく思はぬ私はどうしても、マルキシズムの階級鬪爭說に贊成することが出來ない。

階級爭鬪說の二方面

階級鬪爭說は二つに別けることが出來る、歷史の說明としての階級鬪爭說と、之からの歷史を鑄換へる爲めの社會政策としての階級鬪爭說の二つである。マルクスには之が一つである。即ち彼は掠奪階級と、被掠奪階級の二つに歷史の進展の凡ての花を持たせて居る。

階級鬪爭は事實である。然し階級爭鬪史的歷史說は全く誤つた歷史論である。ヘーゲルが、王より民衆へ進化する唯觀念の歷史哲學を說いたものだから、弟子のマルクスは、王、貴族、資本家、無產者と四つの階級を通じての突變的社界事象の進展を說明する爲めに、階級爭鬪史論を借りて來た。然し、之は歷史の全部では無い。ウイリアム。パトン博士が、その『脊推動物の進化』の結論に書いて居る樣に、生存競爭が進化の唯一の要素であるとすれば、『最初の動物は生れ無かつた』といふ事實は、社會組織に關しても云へることで、階級爭鬪は決して、最初の社會を產み得ないことも事實でもあるし、最後の社會を產み得ないことも事實である。即ち社會性のその本體から云ふても、その本體は相互扶助が本體で有つて、階級爭鬪がその本體では無いのである。日本の社會主義者に思想的根柢が無く帝國主義にはクロパトキンを匂はし、トルストイズムにはダアヴヰニズムから來て居る階級爭鬪說を匂はすのは唯物社會主義の缺陷であると は云へ不徹底な話である。

史觀としての鬪爭說の不徹底

それで最初の社會が成立する要素が相互扶助であることは說いた。どんな社會でも、相互扶助の無い社會の有つた例がない。それでも強いて階級爭鬪のみを以つて、歷史を說明せんとするならば、世界の最初の人間はアダムとエバでは無くて、酋長と奴隷であると說明しなくてはなら無くなる。

それのみならず、階級爭鬪史說は社會自意識の進化そのものを物語ることは出來ぬ。即ち機械の發明、哲學の進化、宗敎、藝術、感覺の內容の進化、言語の歷史等の人間性そのものゝ膨脹と推移に就ては敎へてくれることは實に僅かである。階級爭鬪史說は全人の生活史では無い。ネロの奴隷セネカが羅馬第一の哲人で有つて、ナザレの無產者イエスが世

界宗教の創始者で有ると云ふことは、凡ての文化が掠奪階級から施與せられるもので有ると說かんとするには餘りに危險な暗礁である。

全人の成長史は、階級爭鬪史で說けるものでは無い。生存競爭說が生命の凡てを說明するもので無い如く、階級爭鬪說のみで唯物的に歴史を說明することは全く無謀な企てゞある、生命の現象は、生存競爭說の外に、雌雄淘汰說と云ふ部分的目的淘汰（卽ち配偶と云ふ目的を撰ぶのであるから）と、メンデリズムと云ふ正系遺傳と、ミユーテーションセオリーと稱する趨異說をも借り來らねばならぬのである。つまり人間の內的自覺の發生は、表面生活の階級爭鬪を幾十遍繰り返しても、決して産れて出るものでは無い。卽ち『我』の發生は全く物質の分配から起るとマルクスが考へる階級の差別によつたものでは無く、全く精神的成長によるものである。

階級鬪爭に於ける宗教的分子

歴史上の超越的分子

これは古代の階級爭鬪史を見てもよくわかる。古代の階級爭鬪は近代の如く經濟的原因によるものが頗る少ないもので有つた。それは多くは宗教化せられた非經濟的な社會的因襲で有つた。それでこの宗教的階級は近代に於ける科學の進歩によつて初めて破壞し得たもので、それまでは、どうしても之を破壞することが出來なかつた。マルクスは古代歴史をも經濟史的に說明せんとして居るが、それはマルクスの勝手な解釋で、昔の人々は矢張り之を宗教的に取つたので有る。然し之を何故に宗教的に取つたか？それは素朴な感情を持つて居るものはよく理解せられることである。卽ち、人間と云ひ、社會と云ふ實在の出現は、之は階級爭鬪など云ふ人間の現象、經濟生活と云ふ表面的原因で出來たものでは無くて、それ以上の超越的勢力が動いたから出來たものであるとは、感覺の鋭いものであれば、直に感づかれることである。人間は物を食ふて生きて居るかも知れぬ。然し人間は人間を作らず、物は物を作らない。人間が物を食ふと云ふのも人間の考へついた仕組ぢや無い。人間の口へ這入つてからも、人間の關係し

ない部分が多くある。ヘプシンと膽汁と、膵臓液の作用は人間は考へもつかぬ部分で有る。それであるから、人間として生きて居るにしても、物を食ふて生きて居る部分は極く僅かで有つて、それを消化して血にして腦髓にし、それを意識に變化さす部分は全く人間が直接關係しない、不思議な法則の世界と潜在力の世界である。それで、手から口へ運ぶまでの運動は古代の人は今日の經濟學者が、唯物史觀を唱へる樣な本末を顚倒する樣な見方はしなかつた。それは全く神秘な世界で有つた。經濟生活そのもの——手から口へ運べばそれで生きて行けると云ふことが既に神秘で有つて、それも人間が編み出した條件では無く、必要で與へられた條件であるだけそれだけ、深く神秘の奥へつき込んで居つた。それで古代人は唯物史觀を說く前に唯神史觀を說いた。從つて階級爭鬪史も、マルクスの云ふ樣な唯物的なものでは無くて、宗教的階級史となつたことは不思議とすべきことでも無い。

神秘の使命と其消滅

機械の能力が文明を今日の樣なものに變へるもので有ると知ら無かつたヘーゲルは、矢張り敬虔と驚異の子で有つたから、歴史を宗教的階級に近いものに分類した。そしてマルクスによつて、經濟生活の文化が豫覺せられて、今日では唯神史觀を說くものは宗教階級の消滅と共に何處にか消えてしまつた。然し之はその神秘が消えたと云ふのでは無くして、人間の感覺が他の方面にそべて行つたと考ふべきものである。兎に角今日では多く持つと云ふことが、いつの間にか最大の偉人だとせられる樣になつて、多く感じると云ふ昔の豫言者や智者の種類が尊重せられなくなつたので、人間は多く持つことの階級戰爭を初めることになつたのである。卽ち昔は多く持つことは必しも高等な階級を意味し無くて、宗教的に神秘的傳統的血統の方がより多く尊重せられたもので有るが、今日は科學思想の爲めに、その宗教的神秘的階級を破壞して、多く持つ階級と何にも持たぬ階級に區別してしまつた。

それで、昔は階級の成立は社會成立の要素の神秘化（宗教化）から來たもので有つたが、今日の階級は既に成立した社會の支配力の分化から發生したもので有る。それで社會なるものを愛護し無ければならぬ時代に於ては階級別なるものは宗教的庇護を受け、社會が成立した後はその階級を全く宗教的庇護から離してしまつた。

昔の階級は皆心理的實在で有つた。最初の王は權力者で有つたと云ふよりか、魔術者で有つたと云ふ方の說が事實に近いらしい。超自然力を信じた野蠻人は刀には心服し無かつたけれども、魔術には心服したので有つた。之はフォスクー博士の說であると記憶して居る。それで、いくら鴻池や三井が多く持つて居ても階級としては武士に劣つた時代が有つた樣に、印度では王族よりか、波羅門族が高き位置に据えられて居た。それで、今日の樣に多く持つことが大きな階級を作るもので有ると云ふことは、感覺の鋭い昔の人には、到底考へも及ば無い事實である。

所有階級勃興の理由

感覺の退化

然らば、所有階級が何故に今日の樣に頭を擡げて來たかと云ふに、之には色々な理由がある。第一は人間の感覺の退化である。第二は分化の極端に走つてしまつたことである。人間の感覺の退化を助けたものはベルグソンは智識だと云ふて智識を排斥して居るが、私もその本質に於てはベルグソンと違つた思想を持つて居るが、此點に於ては彼と一致する。迷信と宗教戰爭と宗教的階級を科學が破壞してくれたのは善かつたが、その科學は人間性を中心にしたものでは無くて無目的無理想の科學で有つたが故に（今日では大分その人間性を回復して來たが）それはたゞ人間性を破壞するに絕大な威力を逞しくしたゞけで有つて、それは大砲と水雷艇を發明し、ミュールとヂェニーを發明したばかりで機械を發明した爲めに反つて、手足を縛られる樣になつたのである。ギロチン博士は佛蘭西革命に數百人を一度に殺す機械を發明した爲に自分がその下に首を置かねばならなくなつたと同じ樣に、機械を發明した人間は機械に吊られて、人間性を無視することになつた。之はたゞに機械に就て云ひ得るばかりでなしに、今日の一般科學と云ふものが、全く平衡を失つた無機物的研究である爲めに、折角人類を解放せんが爲めに準備せられた科學が途中で、橫道にそべて行つてしまつた。それで、今日の科學は資本主義の御奉公の外は何にも務め無いと云ふ有樣となつてしまつた。卽ち人を愛し、戰爭を廢止する科學は消えてしまつて、獨逸の九十三博士の樣に、戰爭の爲めには、科學の

權威も何にもかも捨てゝ了ふと云ふ有樣である。この智識の人間性否定が近世に於て所有權社會を跋扈せしむるに効能が有つたのである。

所有本能の狂亂

感覺の退化の第二の原因は智識の破壞性に伴ふた主情意生活の衰退である。生きることが持つことより大事なことであると云ふことは昔の人間にはよくわかつて居たものである。それで、貧乏を花嫁とまで云ふた聖人も有つた程である。然し、近世ではたゞ持つ事が、他人の家庭の乳兒死亡率を高めることを意味して居てもそれは平氣である。彼等は決してそれで反省するものでは無い。持つことの本能が生きることの本能より强くなつて、感覺錯誤を起し、人間を地獄のどん底に投げ込んだのである。それで、中世紀には聖く生くる爲めに、所有權の凡てを否定した敎團が起つた位で有つた。昔の人はこんなに感覺が鋭敏で有つた。

つまり、今日では所有本能が著しく變形して來た樣に見えるのである。生物の歷史を見ても色々の本能がその時季、時季で顯著になるもので有つて、下等動物の盛る時などを見ると、今迄に無かつた爭鬪本能が生殖本能の勃興と共に現れてくることを見るのであるが、近世の人類史は所有本能で穢がされて居ると云ふても善い程である。

所有本能の起原

で、私はこの所有本能の起原を生物心理的に硏究する必要がある。兒童の所有本能などを見ると、木屑、小石、硝子の片、紅木綿等に對する所有欲を持つて居つて、大人から見ると、こんなものをと考へるが、それは兒童に對してはその當時の氣分に對して殆ど絕對の價値を持つて居るものである。之は特に兒童の玩具に對する所有欲に著しく現れて居る。下等動物も所有欲の有ることは、色々な硏究があるからよくわかつて居る、殊にルトノーの『財產の起原』などには數千の材料を集めて、下等動物の所有權の進化を硏究して居るから、それによつて、所有本能の進化を人類にまで說き及ぼすことが出來る。卽ち所有欲本能と云ふものは（1）勞働價値と（2）社會價値と（3）量的價値（需要供給による）の產む財產と云ふ可きものゝ外に、心理的適合價値（Psychological affinity）とも稱す可きものが有つて、それは、マルクスの云ふ樣な勞働價値でも無く、レー（Rae）が云ふ社會價値でも無く、正統學派が云

ふ量的價値でも無く、兒童が小石の或特別なものを愛する樣に、また、ガラスの片の或特殊な自己に一度關係の有つたものを愛する樣に、或物質と時間的に趣味の關係が出來るとそれに所有權を主張すると云ふ樣な妙な心理があるのである。私が子供を風呂に入れる時にいつでも氣につくのは、九歳から十一歳の女の子、男の子の懷中から、いつでも、サイダーの口金や、小石や一寸とした紙片、殆ど私等に想像もつか無いお可笑なものを取り出すことである。

それで、私は考へるので有る。今日人類が所有權を主張するその本能は、サイダーの口金に對する所有欲と同一のもので有つて、土地に對し、株劵に對し、衣服に對して、主張するものも、所有本能の進化から云へば、一種の兒戲に類するものであるのである。極端な所有權の主張――人類の運命を忘れて、白濠洲、白人米國を主張して、自我自利を主張する人間も要するに、砂の上に線を引いて地域の所有權を主張して居る兒童と何の選ぶ所があるであらうか? 之は今日の資本家に於ても同樣で有る。百萬圓、千萬圓の持主だからと云ふて、人間としての價値が增すわけで無いことは善く知つて居る筈で有る。然し、何故之れを集めたいか? 所有本能が非常に人類を橫道に導き去る危險なものであるからである。昔の樣に感覺の鋭い時には、多く持つものは必しも豪いものでは無かつた。然し今日では所有本能が餘りに强いものだから、多く持つものを豪傑だとする樣な眞違つた世の中となり、人間性を放棄してマモンに仕へることゝなつたので有る。

分化の極端性と經濟的安定の意義

然し所有欲を刺激したのはこの外にある。それは分化の極端性である。人類の進化が各方面に進展せねばならぬ爲めに、經濟生活の外に、他の各種の文化生活を營まねばならぬ。それで、經濟生活をその踏臺として、各方面に進むことになつた。それで文化が發達すれば發達する程、經濟生活の安定を保證される必要がある。それで生產の形式はマルクスの云ふ樣に文化の保證をなすものであることが明瞭にわかるのである。然し此處で唯物史觀と私が意見を異にして居る所は、生產の形式は文化の方向によつて支配せられるのみならず、生產そのものゝ形式が、人間の心理的爆發(卽ち發明)に待つことが多いことである。唯物史觀論は、生產の形式

とはたゞ唯物的だと考へるのが非常な誤謬で、『生』産である以上、生物的、心理的能力を度外視しては出來ない仕事である。

唯物史觀は史觀の一斷面

つまり、分化作用が激烈であるだけそれだけ、經濟生活の安定を要求するので、マルクスが考へる樣に、凡ての文化が經濟生活の上に乘つかつて居るかの樣に見えるものであるが、然らば經濟生活に凡てを還元すれば善い樣に見えるが、凡てが經濟生活に還元せられると、經濟價値そのものが無くなるもので有つて、人間が食ふ爲めに生きて居ると云ふので有れば、人間は何にも産れて來る必要は無かつたのである。卽ち經濟生活は人間生活の重要分子であるけれども、それが全體では無い。たゞそれから分化して行く所に生產機能の面白味が湧いて來るのである。處が、さて、經濟生活から人間を解放して、自由勝手の方向に行かしめると、今度は生產することを忘れて掠奪することをのみ覺えて分化の袋小路に生息し、ベルグソンが云ふ菌類の樣に他の生物の力によつて、文化を樹立せんとするものが出て來たのである。マルクス學派は今この方面ばかりをその經濟史觀に見て居るのである。卽ち今日の資本主義を生產者の上に生息して居る菌類であると云ふことには、私は少しも異存は無いのである。憖かに資本主義文化だけはマルクス流の唯物史觀で解ける。(然しそれが凡ての歴史を說き得ないことは私が繰返し述べて居る通りである。之に就て私はまだ多く論じたいが他の場合に讓る)

卽ち分化が文明の一大特質になつた爲めに經濟組織が一層緊要なものとなり、自足經濟の時代に、人間が自ら耕し自ら食ふて、自ら唱ひ、自ら敎へた時代は、そんなに複雜な經濟組織がいらなかつたが、今日では、藝術家と、敎育家と、宗敎家と、哲學者に生活の保證を與へねばならぬ。卽ち金を與へねばならぬ。そうし無ければ彼等が食ふて行け無い。そこで、この文明を支持する爲めにどうしても資本主義的經營が必要になつた。卽ち文明に投資し、分化に放資する必要が起つたのである。そして放資せられた文化生活者は、放資者の云ふことを聞かねばならぬことになつたのである。之が資本主義文明である。

で、もし、今日の文化が、無機物の資本によつて保證せられる代りに、社會人格の保證によつて、分化に制限を與へ菌類に退化しない範圍内に於て卽ち、生產者を略奪し無い範圍に於て文明が形造出來るならば、どれだけ幸福で有つたかも知れぬ。然し人間の分化作用は忽然やつて來て、社會人格が秩序よく組織立てられる前に、各方面に散つてしまつた。それで仕方が無いものだから、分化せる生活に何等の統一も無く、たゞ資本によつて、多少欲望の滿足が得られるならば、何事に限らず企業することになつたのである。卽ち或個人が色情を販賣して、金を儲けることが出來るならば、その色情販賣でも辭し無いと云ふ妙な文化が來たのである。

分化の爲めの分化

それにもう一つ陷穽が有つた。それは分化の序でに、產業の爲めの產業、生產の爲めの生產、分化の爲めの分化と云ふ樣な癌種の細胞分裂の樣な形式で、盲目的成長が重ねられて、他の緊要な人間生活の血液までも、この爲めに吸ひ盡して了ふ有樣である。之と云ふのも社會人格が成長し得ない中に智的文明が主情意生活を破壞して了つた結果に外なら無いが、他面に於ては、極端な盲目的自由主義が我等を此處まで導いたのである。所有欲の爲めの所有欲！　集積の爲めの集積はこんなにして、色々な複雜な心理を通じて近世文明の疾患となつたのである。

文化主義者對生產者の爭鬪

金儲けと文化主義

かうして所有本能のみは一層熾烈となり、自由主義の名の下に、略奪することを覺えた資本主義は金儲けと稱する妙なことを知つた。それは世界に於ける人類の生產總量は交換價値に依つて發生する場合は勞力價値に比較して殆どコンマ以下であるにも係らず、生產し得ざる所有本能を中心とし基礎として集團を作つて居る交換價値に生存する商人、その商人の少し變形した株式屋が、殆ど世界の生產總量から發生する富の七八割までも握つて居ると云ふに到つては、人類の迷ひの深いことに驚かざるを得ないのである。（河上肇博士著『貧乏物語』ローレンツ氏『富の分配曲線』參照）

で、この爲めに世界は今や明かに、所有階級と、非所有階級に分裂する樣になつたのであるが、それで默つて居ら無いのは、略奪せられつゝある生產者階級である。彼等も初めの程は近世の機械文明が、どの方向に彼等を導きつゝあるかを悟ら無かつたものだから默つて居つたが、この文化が、明かに誤れる方向に彼等を導きつゝあると云ふことを知つたので、今や死力を盡して有產者階級に戰鬪を開始したのである。

唯物文化の保護者

私は拙著『精神運動と社會運動』の中に『階級爭鬪史論』を書いて、その古代よりの歷史的發達に就ては、叙說したから、私は此處でそれを重複することを避けたい。兎も角、階級爭鬪史を硏究して見て氣のつくことは、それがいつの時代で有つても、文化を少し複雜にすると必ず、文化階級が、自己の文化を保護する名の下に生產者を略奪して來たことは拒むことの出來ない大きな事實である。それで、昔の生產者は凡て奴隷で有つたのだ、處が機械と智識で解放せらる可き筈の人類が、まだ文化主義者に略奪されることは望ましくないと云ふので、自我の目醒めて來た無產者が『我』の回復の爲めに社會人格、卽ち團結性を持つて、金力によつて彼等を縛つたその鎖を打切らんとして居るのは、最も至當な要求であると考へねばならぬ。

肉體藝術の時代

卽ち今日の階級爭鬪なるものは、所有階級對非所有階級の爭鬪であると共に、昔から傳統の文化主義者對非文化主義者の爭鬪である。處が舊式の文化主義者の間違は、人間性を外にして、唯物藝術卽ち――繪畫、建築、彫刻、庭園の中に何か藝術の凡てがある樣に考へて、藝術の保護とは、畫布や、大理石の保護だと考へて來たことである。私の考では、人間の最大藝術は人間そのもの、肉體的美の進化である。卽ち顏の進化、肉體の美術化、音樂的進化、舞踏、演劇、小說、劇曲である。然し、それより更に大きな芝居は日常生活そのもの、全部の藝術化である。卽ち、九十九人が、煤烟下の工場に捨てられて、一人の貴婦人が別莊でピアノを樂しみ得ても、私はそれを文化生活とは云はないのである。私が文化主義者の安價な主張に反對するのは此點である。卽ち、勞働者無產者の解放

を奮き文化主義に改宗せしめることはあまりに恐ろしい墮落である。我等の要求する所は戀愛の如く熾烈な肉體藝術——筋肉美と肉聲美と顔面美と、マラソン競爭と飛行機の肉體主義で有らねばならぬ。ローゴスが肉の形を取つて化身したとヨハネ傳第一章第一節に書いてあるが、文化主義が、生そのものゝ中に文化を發見し得ずして、生を一度通過して畫布と骨董品の中に過去の文化を眺めたものだから、それは常に所有權藝術に終るのである。然し新藝術は所有權藝術より生存藝術、卽ち生きた美と生きた藝術に移らねばならぬのである。卽ち死んだ衣服の美を捨てゝ、筋肉美を誇る生命藝術に移らねばならぬのである。

で、九十九人の無産者は一人の貴婦人を養ふ爲めの文化主義——貴族藝術主義から解放されて、百人が百人とも同じく、人間美——生きた肉體美を回復する爲めに努力せねばならぬのである。之を私は『人間建築』と云ふて居るが、人間が建築される爲めには、たゞ物質の所有のみを主張して、人の子を工場に閉じ込めて、之に光線と空氣と食物を辛うじて與へて居る樣な虛僞の多い今日の間違つた文明から解放されねばならぬのである。

然し所有階級は嘗て、自らを所有階級として告白したことが無い。彼等は常に文化の支持者だと自任して、無産者の人間建築運動に贊成したことが無い。彼等は恐ろしいフエチシイズム（祟物症）にとりつかれて居るのである。この文化主義と稱する迷妄から醒めて、人間性そのものゝ確立を急ぐことは新しい社會運動の根本目的である。

階級爭鬪は歷史の全部に非ず

『我』の發生と階級

以上私が論じて來た所でも、よくわかる通り、社會に於ける各種の階級の出現は歷史上の事實で有つて、昔は宗敎的、心理的、血族的社會階級が有つたものが、それが、近世に於ける智識革命によつて、全く破壞されてしまつたが、智識革命以後に於て社會分化の極端に行つた結果、今度は新しく所有者と非所有者の爭鬪が開始されることになつた。歷史を繙いて見るに、近世資本主義の發生地で有る伊太利のフローレンスでは無産者の革命は十三世紀に於て旣に古代の奴隷戰爭とは違つた全く近世式の所有權に關する階級爭鬪を開始して居る。(Edgcumbe Staley : The Guilds of Florence, P. 44—74) その後獨逸の農民戰爭、佛蘭西革命を經て、一八四八年の無産者階級の出現となり、社會革命の聲が漸く世界的となつた。

分化せざる最初の世界には掠奪も無く階級爭鬪も無かつた、然し分化と分業の爲めに生產者が哀れにも略奪されることになつて以後は、階級爭鬪は悲しき人間歷史の一部分となつた。階級爭鬪は歷史の全部では無い。階級を通じて愛した時代も有つた。然し『我』が生長して、無產者が略奪より目醒めると、階級爭鬪は避くることが出來ない場合が多い。階級爭鬪は事實である。勿論それは『我』の成長を說明するものでは無い。然し『我』が蒔かれると、階級はとても人間を所有物や位階で差別的に處分し得るものでは無い。故に階級撤廢の爲めに、階級爭鬪が始まる。

社會革命說の否定と無抵抗主義

ボルセヴヰズムの否定

然し階級爭鬪の一つのミステリーはそれが階級撤廢を目的とすることである。つまり、階級爭鬪は一つの手段で有つて、永遠の世界では無いのである。殊に階級爭鬪の必要とせられる最後の階段——卽ち物質の量によつて、人間の權利に區別をつける資本主義文化に於ては、その階級別は決して永遠性を持つて居るものでは無い。之は昔の宗敎的、人種的、血統的階級別と違つて、破るにそんなに困難なものでは無い。宗敎的階級は智識革命によつて全く破られた。それで、所有權による階級爭鬪も存外つまらぬ人間性の爆發で消滅することゝ思ふのである。それで私はマルクス流の運命的社會革命說と、それを一層主觀化したサンヂカリズムの階級爭鬪說を勞働運動に必要であると心得るものに反對するのである。前の章に於て私は歷史を說明するのに、階級爭鬪說がその凡てで無いことを說いた。この章に於ては、私は歷史說としてゞは無く、直接行動として意味の無いことを主張するものである。階級爭鬪が事實であることは私は繰返して述べた。そして、今日の無產者の解放運動にストライキと、サボテーヂ

と、ボイコットとラベルの四種の直接行動が有ることも私は知つて居るし、私は勞働組合の運動として、之れを使用することを許容して居る。然し私はこの四種の上に更に、社會革命の名によつて、血を見なければならぬと考へる社會革命説に絶對に反對するものである。即ちボルセヴヰキが普通やつて居る方法として、村や市へ這入ると直に、この市長と地主と有産者と、祭司と智識階級のものを殺して、無産者の解放を叫ぶ虚僞の社會革命を笑ふものである。人は何人をも殺す權利を持つて居ら無い。又人は何人をも束縛する權利を持つて居ら無い。凡ての人が自由で有る爲めに、無産者の解放が始るものを、無産者の名によつて、有産者——それもたゞ所有せる物品のみの差——を壓制し殺戮するならば、それはあまりに狹量な世界では無いか！　昔は財産犯によつて死刑に處せられた、エリサベス法では乞食しても死刑に處せられたことがある。然し『我』の目醒めた文化では「我」と物品を區別する。そして物品の掠奪者を罰するに「生命」の罰則を持つてしない。然し過激派はどうして間違つたか財産階級の戰爭に生命まで奪ふ可きを敎へるのである。私は之をボルセヴヰズムの實行手段の最大矛盾とするのである。

無産者專制の矛盾

更にボルセヴヰズムの矛盾は無産者階級のみの統治の宣言で有る。もしも無産者が有財産者の財産を沒收した時に彼をしも無産者（プロレタリア）と云ひ得るであらうか、私は過激派の憲法を讀んで、それが立派なもので有ると思ふものである。然しそれだけ、無産者階級の財産管理と云ふことに矛盾を感ぜざるを得ないのである。

勞働全酬權の否定

アントン・メンガーに有名な「勞働全酬權」と云ふ定説が有る。それによつて、勞働者はマルクスが云ふ處の勞力價値を全部回收せよと云ふのである。然し實際それが可能なことであらうか？　勞働者にも二種類ある。それは物質生産の勞働者と、生物生産の勞働者である。物質生産の勞働者は容易にその全勞働に對して全酬權を主張し得るであらう。然し生物生産者即ち子を産む母、保育する娘、生命を助ける看護婦、醫師等に對して果して、勞働の全酬を支拂ひ得るであらうか？　そして、母と、娘と、看護婦と、醫師がストライキする權利が有るであらうか？　私の母がストライキするなら私は次の日に死んで居た筈である。母の愛と看護婦の親切は全酬權を要求し得ない特殊の特權である。そして生産者の自覺が一層高くなればなる程、生産者は、母と看護婦の愛と同樣な責任をその中に自覺して來るのである。即ち、生産者は、有産者階級が所有權を主張した眞似をして腐つた文化の跡を追ふことを許され無いのである。即ち生産者階級の自覺の最高點はその全酬權を要求する代りに、所有權の世界が虛妄の世界であると云ふことを敎へねばならぬのである。今日の文明が、先に述べた誤れる所有本能に迷はされて間違つた方向に行つて居るものを、文化の本流に立つてまだ所有權に謬られて居ら無い勞働者が、その覆轍を踏んでまた報酬の問題にのみ心を使ふと云ふことは許す可らざる失敗である。それで生産者は、生活と、自由と、勞働を與へられさへすれば、それで滿足す可きである。それは母の愛にも似る可き相互扶助の世界、社會連帶の世界である爲めに、分産主義を主張して見たり、私有財産を主張して見る可きもので無くして、私が既に說いた肉體藝術に生きる可きもので有らうと思ふ。その爲めには、私は共産主義の不都合を思ふから、公産主義によつて、組合管理の生産機關を經濟組織に採用すれば善いと思ふのである。そして此場合には最早やストライキもサボテーヂも、組合證票も、ボイコットも無くなる時代であるが、之れに至る道に於ても凡そ公益の事業には生産者は何事に限らず、私利を捨てゝ爭鬪的行動を避けねばならぬのである。即ち私は如斯論ずる事によつて、社會革命を全く無用なものとして排斥する理由がよくわかつたと思ふ。

直接行動としてのストライキ

然らば、私は直接行動としてのストライキとサボテーヂと、ボイコットとラベルを階級爭鬪的の手段であると考へぬかと云ふに私は必ずしも之を流血革命的の手段とは考へ無いのである。私は之を社會を敎育する手段だと考へて居る。殊に、ストライキの如きは無産者はストライキをすることによつて餓死することをも賭して居るのである。之が戰爭だと何人が云ひ得るであらうか？　之は勞働者の自殺運動であるのだ。或は之を動物—蜘蛛などが敵に追はれた時に行ふ擬死にも例へることが出來る。然し勞働者はこの斷食的絶望運動を敢てしてまでも社會を覺醒しなくてはならぬと云ふのは、生産者を離れて有産者階級は何事もなし得ないと云ふことを敎へる爲めである。即ち之はモーセの出埃及（エキソダス）にも例へることが出來る。即ちストライキは流血的社會革命と違つて、受身であ

り、防衞的であり、教育的である。一九一二年佛蘭西のジャーレスと獨逸のリープクネヒトの二人がモロツコ戰爭の時に巴里と伯林に總同盟罷工を宣言して、一九一二年に起る可き筈で有つたあの大戰を中止せしめたと云ふことなどは、如何にそれが愛國的であり、教育的であるかを思はしめるのである。

產業戰爭に於ける生產者の立場は愛と相互扶助の贖罪的任務を持たされて居る。若、生產者迄が此上今日までの資本家の眞似をして略奪と浪費と爭鬪を職業とするならば、地球の表面に生命を見ることが無くなるとを恐れるのである。

ストライキと宗教的斷食

生產者の道は創造と光榮と、愛と相互扶助と社會的秩序にある。今日の自由主義と稱する所有權力世界の亂鬪に人間としての眞の自由と愛と秩序が無いから、人間生活の外に何にも持たない——無產者と云ふけれども、肉體美だけは所有して、生產者が、今日の世界に秩序と正義と自由への道を最も平和な手段を持つて敎へるのである。それがよく組織されたストライキである、勞働者の宗教的斷食である。

ストライキと社會革命の區別

世界にはストライキを勞働者の爭鬪的最大武器——社會革命に導く近道の樣に信じて居る人がある。然しそれは間違で有つて、もしストライキを爭鬪の爲めの爭鬪として使用し、略奪本能と爭鬪本能で毒せられた過去の文明の樣に、たゞ食る爲めに、ストライキをするならば勞働運動は惡化し、勞働者自身の自滅は近いのである。米國に於てもストライキの爲めの損害は年々二億弗三億弗と云ふ損害で有つて、大きな戰爭にも比較す可きものである。もし之が、ストライキの爲めのストライキと云ふので有れば、それは社會の進化の爲めには何の役にも立た無いのである。然し幾十萬の勞働者が斷食してストライキをするのは爭鬪の爲めの爭鬪では無い。眞正の社會を產まんが爲めの教育的直接行動である。それでもしこのストライキに暴行なり脅迫が加はればそれは人道的行動と云はれ無くなるのである。卽ちストライキが生產者の社會改造の用途に立つのは、勞働者が略奪者をそのまゝ目醒さずに奴隸的生活に甘ずることよりか斯することが人道的であるからである。之は『我』に目醒めた勞働者が、社會に敎へるたゞ一つの道である。之は爭鬪手段では無い。シベリアの馬群が狼に追はれた時に圓陣を作つて、馬面を外にむけて、

狼を威嚇する樣に、ストライキは爭鬪手段を捨てた、新しき時代の生產者が狼を追ふ爲めの防衞的手段である。生產者は凡ての武器を捨てる。彼等は本能的他愛主義者である。彼等は相互扶助の爲めに生き他人の爲めに喜んで生產すると母の如きものである。母が子供に向つて無抵抗である如く、生產者は新時代の爲めに無抵抗である。生產者は如何なる意味に於ても、ミリタリズムに反對する。それでもし生產者が、無抵抗主義の本然的愛に生き得ないならば、世界は遂に神の國を地上に見ることとなしに終ら無ければならぬ。

反ミリタリズムの人道運動

勞働者は凡ての刀を捨てる。そしてたゞ斷食して社會改造を待つのである。之をしも無抵抗主義者と云はなければ何人を無抵抗主義者だと云ひ得やうか？　或は云ふであらう『人一里の公役を强いなば二里行け、右の頰を打たさば左の頰をも向けて之に打たせよ』と云ふのが絕對の無抵抗主義だから、資本家の强いる八時間勞働の上に九時間十時間の勞働をするのが勞働階級の無抵抗主義だと云ふ人もあらう。然しそれは問題を取違へて居る。生產者が多く勞働することによつて、他人を墮落さすのを知つて居て——その金が妾と贅澤品になるとを知つて居て——共種類の無抵抗をつゞけるとは出來ない。一里の公役を强いられた場合二里行くのは全くそれが教育的分子を含んで居るからである。個性を捨てた無抵抗主義は人道的に見てなにもなら無い。生產者は他人の略奪を助けるわけには行か無い。ナザレのイエスは無抵抗を說いても鞭を持つて神殿の商買人を追ひ出す勇氣を持つて居た。反抗し鞭を持つ人で無ければ無抵抗の意味はわから無い。無抵抗主義は其倫理の根柢に於て教育的意義を持つて居る。そして暴力を敎える外に何にもないから、暴力が問題解決の最終で無いと云ふとを敎へる爲に無抵抗に出るのである。

國家的無抵抗主義

ベルトランド・ラツセルは國家が無抵抗に出た場合を色々と面白く豫想して、之が文明の最後の勝利だと云ふて居るが、(Justice in War Time. P 40—59) 國家として組織立てられたものは絕對無抵抗に出てももう今日の文化の程度に於ては昔の樣に征服が出來無いのみならず、暴力で征服するものが反つて、精神的の敗北を見るのであると云ふて居る。そして彼はその國家的無抵抗主義の最善の直接行動として國家的ストライキを

豫想して居る。（同書四八頁參照）

ストライキはこんな風に無抵抗主義者が採用す可き最後の手段であるのだ。踏繪を踏むことは個性の自由で有つたが、これを拒否することによつて、十字架の苦痛を忍ばねばならなかつた樣に、ストライキは勞働者に取つては踏繪を意味して居る。彼等は新しき世界を産む爲めにこの拒否的手段に出るより外に道が無い。それで彼はその拒否的手段に出ると共に絕食を覺悟するのである。彼等は革命を忌む。劍に依つて立つものは劍にて亡ぶることを彼は知つて居る。それで生產者は凡ての武器と凡ての戰鬪組織を捨てゝ、埃及から逃げ出すのである。彼等の賴む所は雲の柱と火の柱である。彼等がストライキする時に彼等は全く倂宗敎的氣分で之を迎へるのである。

無抵抗的攻勢

それでストライキの根本原則として、生產者が必ず道義的である可きことと、世界的に團結すべきことである。彼等は革命に換へるにこの無抵抗的攻勢を取るのである。卽ちこの產みの苦しみによつて新しき世界を產むか、世界は永遠に所有權世界に止るか、その二つの岐路に世界は立つのである。私はサボテーヂ、ボイコツト、ラベルに就ては多く云は無い。私はサボテーヂの道德的缺點を知つて居る。倂し私は破壞と怠惰を意味し無い「低廉なる賃銀に對する低級なる勞働」の宣言ならば――そしてこの意味のみに於てならば、サボテーヂは必しも排斥する理由を見出すことが出來ない。然し怠惰にして貪ることを意味するならば、私はそれを非人道的として、次の世界に持ち越し得ざるものとして排斥する。要するにサボテーヂは、勞力商品取引の世界に於ては當然有り得ることであつて、資本主義の文化は朝から晩までサボテーヂをして居るのである。それで、資本家のサボテーヂを排斥する我等は同じ論理を持つて、勞働者のサボテーヂを排斥する。それで、もし是非サボテーヂをせねばならぬならば、寧ろストライキの形を取ることを勞働者に勸めたい。

階級脫破と金力

階級爭鬪の目的は階級を無くすることにある。それで飽くまでも階級的精神を保持して世界を所有者と非所有者の世界に區分することは、階級爭鬪論者の究極の目的ではない。殊に今日の階級別は昔と違つて、金の問題だけである。卽ち今日では金の勢力で殆ど凡ての階級を破壞してしまつた。金程階級脫破に勢力を有つたものは無い。然し其金と云ふものも要する所は、生產者が產んだものである。生產者は、自己の產んだ金で、自己が縛られて階級別をつけられ、階級爭鬪をせねばならぬと聞かされた時に、彼は哄笑を禁じ得ないのである。卽ち階級爭鬪と云ふのも自己が生產するから階級爭鬪があるのだとすれば、生產を中止してその階級別をも枯死せしめやうと考へるのは生產者が想倒する當然の結論である。で、金力階級を排斥するに社會革命とか流血爭鬪とか云ふことは實に愚かなことで有つて、生產者は、所有別階級の出現が、全く彼自らの生產の上に湧いた蛆虫であると云ふことを知るに到つて、過去の宗敎階級や、血肉階級を排斥した時の樣な大きな煩悶は持た無いのである。それで、徹底した無產者には今日の無產者と有產者との爭鬪を階級爭鬪と解せずして、一種の生產形式上の誤謬と解するのである。

卽ち勞働者は自制する。爭鬪の爲の爭鬪ならば、彼等は凡ての戰爭準備をする筈である。然し今日勞働運動は全く一種の精神運動であるが故に利己を中心とする、無產者專制の時代を豫想して戰爭準備にかゝるとなどは許されない。合衆國の勞働組合のストライキ基金を硏究して見ても、それは全く戰鬪的意義が無い程貧弱なものである。組合には一定の規定が有つて、餘りに多額のストライキ基金を積まないと云ふ約束がある。（Geoge Milton Janes: The Control of Strikes in American Trade Unions P. 100―101）生產者はストライキをすれば世界が困ると云ふことをよく知つて居る。それで生產者は自制する。そしてストライキの不必要な世界を產み出さんが爲にストライキをするのである。

ストライキの進化

それでストライキは段々進化して來た。初めのストライキは賃銀値上げで有つた。然しそのストライキは勞働者を救ふもので無いと云ふことを知つた。資本主義者は賃銀の値上げと同時に物價を騰貴せしむることを彼等は知つた。それで彼等は人道の爲めに――所有欲文化の根柢を人道主義に引戾す爲めにストライキをせねばならぬと云ふことに氣がついて來た。そして今や、勞働者の唯一つの道は絕對の平和と自由と愛と文明の回轉を世界に告示する爲に、凡ての機械と產業を中止す可きを考へるのである。彼等は一度荒野の退く。そして彼等の神

を拜するパロに告げるのである。

○

止れ而して考へよ

トルストイが露西亞の田舍から敎へてくれた『止れ、そして考へよ』(Stop and Think!) と。勞働者の變らざる意志は世界の甦りである。四千年の汚れたる所有欲から離れて、愛と自由に生きることである。それで彼等はその愛と自由の新しき世紀の爲めに斷食するのである。之は人間意志の回轉である。悔改の懺悔である。新しき宗敎である。出埃及(エキソダス)である。

階級無視とエキソダス

生產者の文化の外に新しき文化は無い。それで、彼等は劍と流血と脅喝を避忌する。生產者は、今日の社會が階級爭鬪が必要とする樣な世界で無いとよく知つて居る。萬國の勞働者が團結して、古き文明に告別して荒野に出るその日に朽ち果てた食ることのみしか知ら無かつた資本主義文明が立處に消滅することを知つて居る。之をしも階級爭鬪と云ふには餘りに大人氣ない。自己の作つた階級を自己が破壞するのを階級爭鬪とは云は無い。現代に於て階級爭鬪は最早や問題にならぬ。勞働者が自覺するか否かの問題だけが殘つて居る。偶像破壞者である金力は、遂に自ら偶像になつたが、金力階級を破壞するに暴力はいらぬ。金力を無視すればそれで善いのである。

○

階級破壞と精神運動

即ち中世紀の宗敎階級を智識革命が絕滅させた如くに、新しき金力階級の絕滅も更に新しい智識革命を待つて居る。先の智識革命は物質的智識革命で有つたが、新しき智識革命は精神科學的智識革命であらねばならぬ。それは充分宗敎的で充分藝術的である。充分科學的で全人全靈全生の悟得であらねばならぬ。その時に資本主義文化は癌種の手術を受け、金力の支配せざる創造の世界を產むことが出來るのである。生產者の道は平和にある。その道は無抵抗と不義に與みせざる拒否にある。彼等は宗敎的斷食の心を以つて文化の回轉を世界に告示する。ストライキは彼等が賴む唯一つの新文明への潜り戸である。然しもし資本主義者にして凡てを悔改めて民衆の前に跪くならばそれも無用なことである、更に大きな啓蒙時代を我等は待つて居る。(十一月四日)

階級鬪爭論

慶大敎授 高橋誠一郎

一

「人類社會の歷史は悉く階級鬪爭の歷史であつた」と解釋することも亦た一面の眞理を道破したものである。國と家族若しくは氏族の維持を目的として行はれた單一の職分は次第々々に分離し分岐し、文明の進步に伴れて愈よ益す其の數を增加して行つた。之と共に人類は亦た其の渡世とする職業の異るに從つて互に相ひ分離し、社會上各々一團を形成するに至つて同種の利益、盡力及び行爲に由つて相ひ結合し、而して其の間に同種の思想、感情並びに慣習が發達して來る。斯くて各家族は世々其の業を繼承し相傳するに至るのである。過去に在つては職業の區別は慣習及び法律に由つて認められ、一定の職業に屬する者には私法上公法上の一定の特權が附帶し、爰に職業の分岐は身分的のものと爲り、軈て職業は即ち身分と爲るのである。新婆羅門敎時代に其の萠芽を發し、印度敎以後に至つて Angira 及び Yama 等の法典に於て愈よ確定的のものと爲つた印度の職業種姓の如きは其の最も極端なる例である。

今日の社會に於ては斯くの如き特權は悉く皆な撤廢せられたとは謂ひながら、身分別は猶ほ其の實を存してゐる。然しながら吾人は各個の從業者の社會的地位、其の國內に於ける勢力、其の經濟的關係に於て保持する權力及び所得に從つて職業的團體を觀察する時は職業的特色は背景の裡に消へて、「階級」なる區別が前景に現れて來るのを見るのである。「階級」とは權力、名望及び地位に從つて離隔せられた社會的團體を言ふのである。而して經濟的事實が社會上愈よ重大となるに至つて、財產資格は社會上、政治上愈々大なる勢力を有することゝ爲つて、今日に於ては階級別の最も有力

なる標準と爲つたのである。

現世に於ける有らゆる幸福の要件であり、生存の堡壘であり、又た發達の資源である資本は洵に亦た貪婪我慾の對象である。或る者は勤勉と節約との對價を支拂ふことなくして之を取得せんことを欲した。古代の社會に在つては財產權は征服の權利に其の基礎を有してゐた。Jure Quiritium に由る古羅馬の所有權の典型は槍に依つて(sub hasta)取得した所有權であつた。彼れ等は暴力に依賴した。彼れ等は盜賊の群れを組織した。彼れ等は勞働者及び商賈を劫掠した。然しながら就中最も重要なる一事は彼れ等が國家と稱する政治組織の支配權を掌握し、依つて以て彼れ等が劫掠をして適法のものたらしむる一種の魔法として其の詩歌と物語とを使用するに於て其の掠奪の方法を見出したことである。彼れ等は國體とか忠君愛國とか言ふやうな巧みな理論を織り上げた。彼等は此の偉大なる政治組織に於ける地位と榮譽と勢威との全部を其の手中に收めた。而して彼等は有らゆる負擔と義務とを他人の上に課した。疑ひもなく曾ては封建の制度は崩壞し盡した社會の斷片を再び糾合する有用なる組織であつた。而も法律家が近世的國王に羅馬法を適用し、而して封建の貴族が朝廷の貴族と變じた時、彼れ等の階級は最早何等の目的にも資することのないものと爲つた（ウイリアム・グラーム・サムサー）、

二

近世に至つて新たなる生命と勇氣とに蘇つた個人は新たなる自己の道を求めんとした。斯くて社會的行爲は愈よ私す個々の活動に基く不規則なる衝動に委せらるゝに至つた。而して靈界の權威が次第に其の精神的方面に於ける任務を遂行するの力なきに至ると共に、情意と信仰との國土から逸脫して、直接現前の世界に逃れ歸つた個人は往々にして功名心と利得慾との導くが儘に行動した。此の間に著しく富强の程度を增加し來つた中央俗界の權力は新興商工業の要素を把握し、而して其の獎勵に對する一般的熱心を滿足せしむると共に、之を政治的目的に供用し、軍事的成功に必須なる財源を供給せしめて、自己の强大と威名とに資せしめんことを期すに至つた、國王の領地及び其の特權に基礎を置いた中世的財政の方法は今や絕えず增大し增加し行く國用に充富するが爲めに十分なるを得なくなつた。其の軍事的政治的目的を助成するが爲めには租稅の增徵を措いて他に其の手段を見出すことが出來なかつた。洵に「近世の經濟學は國家維持の手段として租稅制度を採用したるに始る」ものである。而して租稅の增徵は又た必然社會に於ける富の增大を豫定しなければならぬ。即ち商業と金融との安定と發達とに由る貯蓄即ち資本形式のみ惟り眞に之を可能ならしむることの出來るものである。斯くて近世的國家は國民的經濟政策を遂行し、有らゆる國家的政治權力を傾注して、全國民の現在及び將來に於ける經濟的利益を擴張せんことを努めた。

斯くて同一條件の下に交易を行ひ得可き範圍は擴大し、生產と消費との關係は次第に相ひ解離した。工業に從事する者は最早範圍狹少なる地方的市場を目的として製作することがなくなつた。而して大規模の生產勃興して、販路著しく擴張すると共に、各個の手工業者は能く一般市場の情況に通ずることが出來なくなつて來る。是が爲めに新しい中間階級が其の間に生じて生產者と市場との間に介在するやうに爲る。而して更に國民的分業が發生して、各人は純然たる營利業者たる商人を目的として勞作し、商人は唯だ單に貨物の販賣を國內若しくは國外に於て掌るを職とするに對し、工業者は一定の報酬に對し、前者に依つて統一せられた經營の一部局を行ふに至るのである。其の間に在つて新大陸に於ける鑛坑の發見は著しく西洋諸國の通貨を增加せしめた。主として物々交易に基礎を置いた舊い封建的經濟時代は新しい貨幣經濟の前に其の道を讓つた。今や流通は更に迅速と爲り、遠隔の交通は更に頻繁と爲り、都市生活及び動產は更に其の重要の程度を增加しつゝあるのである。

近世に於ける最大なる現象は中世的都市よりする中層階級の發達、富の集積並びに從來身分と家柄とに由つて占領せられてゐた地位に對する社會的勢力としての富の侵略であつた。中層階級は封建の階級に對して其の權利を擁護するが爲めに鬪はなければならなかつた。而して彼れ等は三四世紀の間に次第々々に國王及び貴族の專擅なる意志に對して人

格上及び財産上の諸權利を確保す可き施設を創始し確立した。彼れ等は又た自己の階級の高貴と尊嚴とを主張し維持するに努力した。「マーカンチリズムのプリンス」たるトーマス・マンに從へば、商人は外人との交易に依つて國家の資財を取り扱ふの職に在るものである。而して其の任務を遂行するが爲めには私の利益をして常に公の幸福を隨伴せしむ可き十分なる練達と良心とを必要とするものである。商人は敢て大學者たるを要しないが、少くも其の青年時代に羅典語を學修す可きものである。彼等は各自其の職業の尊重す可き所以を知悉し、克く其の道に勵み、子孫は長く父祖の業を繼いで其の富を增大し以て家名を揚げ、家門の繁榮を致す可きものである。而して彼れは議院政治を以て貴族の驕慢を抑制し、庶民の傷害を救濟し、君主をして不偏の態度を以て、兩者に對せしめ、君民をして和親一致せしむ可き絕好の手段と認めてゐる。彼れが England's Treasure by Forraign Trade 一篇は其の子孫に訓へて商人道の妙諦を傳へ、併せて商人階級に對する他の社會階級の非難に答へ、以て同階級の爲めに萬丈の氣焰を吐いたものである。

マンは猶ほ外國貿易を以て土地の價格を增進せしめ、地代を騰貴せしむ可き唯一の方策と做し、以て商人階級と地主階級との利益の一致を見出さんとしてゐるが、「ホイッグ黨の哲學者」たるジョン・ロックに至ると資本階級の爲めに利子を辯明せんとして、却つて其の本來の言說よりも土地階級の地代を非難するに庶幾い議論を爲してゐる。即ち彼れに從へば借入資本に對して利子を支拂ふは宛も借地人が其の借り受けたる土地に對して地代を支拂ふと同一の理由に因り、同一の思料に基くものである。土地の不平等なる分配が汝の土地に對して借地人を誘ひ、同じく不平等なる貨幣の分配が余の貨幣に對して借手を齎すが故に、恰も汝の土地が借地人の勞働に由りて其の地代の計上する以上の收穫を產出する傾向あると等しく、余が貨幣は借手の勤勉に由つて交易に際し一定の利子を產出する傾向が有るのである。何となれば貸金業者にして其の貨幣を貸し出すことがなかつたならば（彼れ自ら之を使用することなしと假定し）毫も其の年利潤を齎すことなきが故に、彼れの受くる利子は宛も他人が勞働の所產たるの觀があるが、而も彼れは自己の土地を他人に貸與する者の如く、他人の勞働の利潤から配分を受くることの大なるものではない。即ち借地人の勤勉なくんば

（前者に於けると等しく所有者自ら之を耕耘することなしと假定し）、彼れの土地は彼れに對し殆ど何等の利潤をも與ふることのない筈であるのに、彼れの受ける地代は普通の利子に比して、其の借地人によつて行はれた勞働の所產中より收受する部分更に大なるものがあると論じてゐる。

ロックの勞働價値說は實に技術及び工業に向はんとする近代人の傾向に對して哲學的基礎を與へたものである。而して又た玆に私有財產擁護論の根據を見出し得るのである。財產權に關する彼れの學說は或ひは之れを以て無政府主義的結論に對する前提たらしむることを得可きものであるが、而も彼れ自身は毫も斯くの如き方法に於て之を適用せんとすることがなかつたのである、彼れは最も善く「法の無き所に自由無き」を知つて居つた。唯だ彼れに取つては人生の十分なる氣力と眞實とに到達せしむるが爲めには國家の限界を劃すること狹少にして、個人に對して自由を殘すこと可及的多大なるを必要とするの觀があつたのである。

三

一千七百八十九年の佛蘭西革命は其の性質に於て純然たる市民的のものであつた。大革命の指導者は彼のマラーに至るまで常に私有財產の制度に對して變らざる敬意を表してゐた。人權宣言の第十七條は明確に財產權が神聖にして侵し難い權利なることを宣揚してゐる。而して有らゆる人間生活に對する尊敬が悉く皆な失はれた謂ゆる恐怖時代に於てさへ、財產權に對する尊敬は獨り依然として殘存して居つた、革命の首領等は多く財產權を尊重したフィジオクラアトの影響を受けてゐたやうに考へられる。革命以前の佛國に於て國民的收入の五分の三を享得した社會階級が之に對する報酬として何物をも寄與しなかつた事實を知るものは、縱し斯くの如き著大なる社會的寄生の事實に由つて、彼れ等學徒の所論に明確なる社會主義的色彩を與へたとしても、何人も之に對して奇異の感を懷く者はないであらう。然しながら彼れ等は全然此の種の思想に對して沒交涉に終つた。彼れ等は嘗て土地所有者の地位の薄弱なる所以を諒知しなかつた

のみか、常に最大なる敬意を以て彼れ等に對して適用せられずして、却つて手工業者に對して使用せられてゐる。財産は彼等の謂ゆる自然的秩序の基礎たるものである。所有者は生活の支柱たる麪麭を供給するの任務を委托せられたるものとして一種の僧職的神聖を賦與せられてゐる。彼れ等の手よりして吾人は有らゆる營養の要素を受くるのである。卽ちそは創造の事業を永續せしむる間接の方法たる可きことを命ぜられたもので、自由の制度と相ひ並んで、毫も他の法規の援助なくして、完全なる秩序を確保し得可きものと認められたのである。然しながら這般の思想は敢て彼れ等の學徒にのみ特有なるものではなかつた。彼のジャン・ジャク・ルソーの如きも其大百科全書（Grande Encyclopédie）に寄せた「エコノミー・ポリチック」の一項に於て財産上の諸權利は市民の權利中最も神聖なるものであると聲明してゐる。

學說を離れて之を實際の上から觀ても、彼の羅馬敎會並びに移住貴族の財産沒收の如きは全く政治的方策から出たもので、決して經濟的の性質を有するものではない。法人所屬財産の沒收は單に假設的人格者の侵入、卽ち「死手」の橫暴から眞の財産權たる個人所有權を擁護する方策と看做されてゐる。又た封建の諸權利廢止の秋に際しても主權の「借地人的」權利と其の「所有者的」權利とを區別するが爲めに多大なる注意が拂はれてゐる。固より革命の不幸なる歲月の間に幾多の人々は凋落した。或る者は純然たる災厄から、他はアッシニイア紙幣發行の爲めに生じた混亂の爲めに、而して更に他の者は又た地代の沒收に由つて其の資産を失つた。然しながら財産權其の者を尊重するの意志は猶ほ爭ふ可らざるものとして殘つてゐた。

一千七百八十九年の革命主義者の大多數は階級鬪爭に對して殆ど何等の注意をも拂つてゐない。彼れ等は總ての者を市民として同胞として取扱つてゐる。而して總ての者は平等にして一樣である。資本家對勞働者の對抗は未だ充分に顧みられてゐない。彼等は單に階級的區別の撤廢と階級的特權の革除とに出る幻想的な社會改革の希望に依つて停へられてゐた。

然しながら財産權を承認した階級的區別、階級的特權の廢止は啻に職業に基く身分の區別に代へて、財産的階級を以てするに過ぎなかつた。前者に因る區別が消滅すると共に、後者に基く區別は愈よ鞏固と爲るのである。而して是が主因を爲したものは、第一に職業選擇の自由、第二に所有權移轉及び分割の自由並びに第三に生産的技術及び經濟的交易組織の技術發達するに伴れて職業變更の可能と爲つたこと是である。斯くの如くして現今の社會には幾分階級を分つ他の標準がないではないが、其の最も有力なるものは財産及び之から流出する所得であつて、爰に有産者及び無産者の對立を見るに至るのである。

凡そ經濟的事實は總て國家と法制との上に其の影響を及すことの大なるものであるが、殊に職業及び財産に基く階級別は最も著しく政權の分配、國家組織及び其の當時に於て勢力ある階級の利益に適應せる私法制度の上に現るゝものである。然るに人類相互の間に於ける有らゆる他の不平等が逐次に平等化せられた後に至つても猶ほ財産の不平等は依然として存續してゐる。法律は私法上の平等を齎した。選擧權の擴張は次第に政治的平等を與へた。敎育の普及は一種の知識的平等を創設せんとするの傾向をさへ示してゐる。然るに財産の不平等のみ獨り殘存し增大しつゝあるのである。曾ては他の更に大なる不平等の影に隱れて居つた此の種の不平等は今や他の倒壞と共に一層人々の眼前に明かとなつた、而して自己の上に有らゆる憤怒の焰を浴びて立ちつゝあるのである。而して政權と私法制度と知識との堡砦に擁護せられて立つた資産階級は是等堡砦の陷落と共に亦た孤城落日の觀がある。

四

自己の家屋に定住し、自ら市場に赴いて原料を購ひ、自宅に在つて自己の道具を以て之に加工し、自己の店頭に於て顧客に其の製品を販賣しつゝあつた手工業の時代は過去のことと爲つた。手工業者のギルドが工業上の事項に關し獨立支配の權を享得するに至るまでは未だ勞働者と稱す可き特殊階級の存在を見ることがなかつた。當時に於ける職人の

境涯は何人と雖も獨立手工業者たるの地位を獲得せんが爲めに當然經過しなければならぬ楷梯であつた。決して之を一個終生の職業と見ることは出來なかつた。各個のギルドも亦獨立手工業者の數を限定し、若しくは此の資格を得るの條件を殊更に困難ならしめて、其の員數を間接に制限せんとするが如きことはなかつた。手工の親方は其の性質尙ほ一個の勞働者たるを失はない。獨立して工業を營まんが爲めには家屋を借り入れ、道具を用意し、原料を購入する等、特殊の資本を必要とすることはあつたが、それさへ當時に於ける手工の狀態から觀て頗る少額のものであつたことは推するに難くない。唯だ一定した顧客の確實なる需要に應じ得可き技術上の鍛錬こそ最も重要なる無形の資本であつたのである。

然しながら斯くの如き關係は一方に於てギルドの獨立次第に鞏固と爲り、漸次富の程度が高まり、工業支配の權を其の手中に收むるに至り、他方に於ては資本の必要愈よ緊切と爲り、事實上之に投入せらるゝこと益す多きを加ふるに至ると共に終に全く攪亂せられた。卽ち工業愈よ發達し、愈よ廣大なる市場を有するに伴れて、益す資本放下の機會を增加して來る。而して其の投入資本の收利力を脅すことなからしめんとするの念は獨占の精神を喚起し、ギルドは工業管理の權を利用し幾多の制規を設け、以て新來の競爭者を阻止するの用に供することゝ爲つた。斯くて工業は漸次一定數の家族から成る團體の手に移り、親方等が只管自己の階級的利益を尊重し、之が伸張に汲々たる間に他方には亦た特殊の見解と利害とを有し終生親方の班に列することの出來ぬ勞働者階級の發生を見ることゝなつた。而して次期の家內工業時代に入つて初めて資本的企業家と勞働者との分界は明確と爲るのである。

家內工業は既に營利の觀念を基礎とした資本的企業の例として見る可きものであるが、更に人力に代ふるに器械力を以てし、資本の用法愈よ營利的と爲り、經濟經營愈よ集約的統一的と爲るに從つて、終に工業制工業を生ずるに至るのである。是に至つて資本的企業家は啻に原料品を備へ、精製品を販賣するのみならず、其の間に於ける全經過を支配し、器械及び工場は共に企業家の掌中に屬し、勞働者の獨立は全く失はれて、唯だ自己の勞働力を商品として之を賣り渡すに過ぎないものと爲る。斯くて工業は純然たる營利心に從つて指導せられ、企業家及び勞働者の家族經濟から全然區別せられたものと爲るのである。而して企業に對して財產物件を供用し、之に對して財貨の增加（利潤）を收得する者と自己の勞働を貨幣に換へて賣却し約定された勞銀の外、其の收果に對して何物をも所有し得ない勞働者とが社會の兩端に對立する。資產者及び無產者の對立は亦た資本及び勞働の對立と爲つた。

五

一方に於て「階級」は今日最早社會に存在しない「階級」なる文字は國語の中から削除せられなければならぬものであると主張する者があると共に、他方には又た產業界は生產の資料を所有し、而して之が成果の全部を略取するブルジヨアジーと、自己の勞働力の外、他に何物をも領有することなく、而して之が販賣に依つて生活するプロレタリアとが互に輸贏を競ふ大修羅場である。這般の鬪爭は事實である、證明を必要とする理論でない。常に雇主と勞働者との關係に於て顯然たる事實である。現在社會の經濟組織に固有なる事實であると論ずる者がある。然しながら斯くの如き兩樣の見解は等しく極端に失したものと認めなければならぬ。セリグマンに從へば、吾人が他の機會に於て既に引用したが如く、社會の資本主義化は現代生活の畫一化に依つて象徵せられてゐると言ふ。我れ等は等しく裝ひ、等しく喫し、等しく語り、等しく思ふ。資本を通じて我れ等は世界の市民と化しつゝあるものであると。米國人、英國人乃至佛國人の群集中に在つて勞働者とブルジョアとを區別するは困難である。然しながら我が現代の社會にも階級が猶ほ嚴然として存在する最も確實なる象徵は他階級との結婚、羅馬法の謂ゆる結婚權（jus connubii）の行使が中世若しくは古代の社會に於て行はれた以上に彼れ等の間に於て實現せられることの出來ない事實である。mésalliances に因る pseudo-castes はヴアシシユタやマヌの時代に於てさへ多く存したが、現代に於ける資本階級の令孃にして勞働者と結婚せんとする者がないのみならず、貧小なる官吏民吏の女と雖も、亦た之を欲するものがない。吾人は又た交通機關に於て、歡樂

の巷に於て、人爲的に設けられた境界や障壁が資產者と無資產者とを分つて相互に接近せしめない例を多く見るのである。卽ち資本と勞働との間に於ける鬪爭が現在に於て前景に立ちつゝあることは事實であるが、而も所有する者と所有せざる者とに總ての國民を截然二分し、而して社會に於ける唯一の眞實が掠奪階級と被掠奪階級との對立であると觀るのは餘りに輕率なる速斷ではなからうか。

六

現代に於て階級鬪爭の哲理を高唱する者は革命的サンヂカリストである。サンヂカリストは階級鬪爭の必然性及び可望性に關する其の概念をカール・マルクスより踏襲してゐる。彼れ等はマルクスの教義を其の本原の純正に復歸せしめんことを努めてゐる。斯くて彼等は謂ゆる正統派のマルクス主義者に對して著しく不信の態度を表明してゐる。エンゲルス、老リープクネツヒト及びカウツキーの徒は先師マルクスの理論及實際的教條の純金に市民階級的思想及時宜主義者的術數の參和物を混ずるものである。新たなる社會制度を樹立するが爲めに議院的行動に信を置くは非マルクス的な市民階級的思想である。彼れ等は力のみ獨り有效なる革命的方法であると主張する、彼れ等に據れば、歐米の社會黨はマルクス主義の信仰を遺棄しつゝあるものである。時代の要求は「マルクスに歸れ」と叫ぶと說くのである。

然しながらサンヂカリズムの理論家は其の祖師マルクスの「資本論」に對して宛も基督教徒が聖書に與へたるに等しき完全無疵を認めんとする者ではない。卽ち純然たる消極的若しくは批評的見地よりすれば彼れ等は明かに正統派のカウツキーより寧ろベルンスタイン等が新マルクス派の修正主義に共鳴することの多いものである。けれども彼れ等の要求する所は單純なる進化にあらずして、新社會形態の革命的創造である。ベルンスタイン一派の閑却し去つたもの〻中に革命的サンヂカリズムの純正哲學者ジョルジ・ソレルが「マルクスのマルクス主義」と呼ぶ眞正なるマルクス主義がある。そはマルクスによつて傳へられた貴い遺產であるに拘らず、彼れ等修正主義者が其の偶像破壞者流の興奮に於て

全然之を保存することを怠つた所のものである。

そは謂ふまでもなくマルクスの階級鬪爭論である。社會主義的理論の上にも、又た人知に對しても共に顯著なる貢獻はマルクスが階級鬪爭に關する教旨、資本及び勞働間の絕對不可避なる鬪爭に關する其の說明である。縱し彼れが其の價値觀念に於て全然誤謬に陷つたとしても、縱し又た彼れが掠奪者の掠奪せらるゝ時機の到來近きを說くに於て僞の豫言者であつたとしても、彼れが階級鬪爭に關する理論は正しく神來の感悟であつた。そは實に「共產主義宣言」の神髓であつた、而して「資本論」は之が存在と必要とに對する長い論證である、有らゆる歷史は階級鬪爭の歷史であつた。彼れに從へば階級鬪爭は倫理的思料を適用することの出來ぬ狀態である。そは歷史的發達の一階段である。而して其の通過し去つて他の階段が現れるまでは、產業の布置は有らゆる皮相の變革に拘らず、大體に於て依然として舊態を改めることがないであらう。人は或ひは進化の過程を促進することは出來やうが、進化其の者と抗爭することは出來ぬ。然しながら幸にして資本主義は我れと我が○○に向つて努力しつゝあるものである。增大して止まぬ市民階級の力と富とは之と對立して其の生活上の運命が次第々々に悲慘と爲り行くの傾向ある貧民階級を○○しつゝあるのである。貧民階級は彼れ等の窮迫其の者に由つて自家防衞の組織を○○○○○○ざるに至るのである。斯くて彼れ等は或る程度まで資本主義其の者の創造である彼れ等自身の施設たる勞働組織を發達せしむるに至るのである。其の極、終に是等兩階級の利害は全然隔絕して○○○○が行はれないやうに爲り、外皮は突如として○○○、其の叛起を喚起した過程其の者に由つて自己の組織を發達せしめた貧民階級が生產の○○○○○○するを得るに至るのである。斯くの如くして階級鬪爭、卽ち破裂點まで緊張した資本勞働間の對抗に因つて○○○○○○○○○○○、而して○○○○○○○は開かれるのである。（エスティ）。

而して現制の○○に向つて不可抗の勢力が作用しつゝあるならば、積極的努力は其の○○○○するものである。マルクスは言ふ「○は進步の助產婦である」と。而して○○○○○○に取つては是こそ眞のマルクス、「共產主義宣言」の

マルクス、一千八百四十八年のマルクスの表白である。洵に「共產主義宣言」の第一版が倫敦に於て印刷器を離れたると同一日を以て二月革命は巴里に勃發し、「有らゆる國々の無產者よ、結合せよ」と云へる近世社會主義の產聲は海峽を隔てたる對岸の雷鳴に打ち消されて殆ど聞くことが出來なかつたに拘らず、サンヂカリストは此の著出版の日を以て○○○○○を徵示するものであると稱してゐる（ラブリオラ）。勞働階級にして其の○○者の軛を脫せんことを期するならば彼れ等は恐怖なく、戰慄なく、○○○熱烈と○○的奮激とを以て其の面を○○○○に向けなければならぬ。○○○は生れ出で偉大なる事業と窮極の成功との母である自己の力に對する信念を此の○○○○○しなければならぬ。彼れ等はなければならぬ、而して無產階級は○○○○○に依つて分娩の苦痛を短縮することが出來る。

革命的サンヂカリストは啻に階級鬪爭の實在と其の不可避性とを○○○○○○○○、少くとも其の理論に於ては此の世を頽廢より○○勞働者をして雇主の略取と支配とに○○○○○、緊密なる單一體を○○○○○○ものは是である。現在の法制に對して○○○○○を展開せしめつゝあるものは是である。勞働者の自識、意力及び德性を發達せしめ、而して彼れ等に適應せる組織形態を創造しつゝある○○○○ある。略言すれば勞働者の釋放に必要なる有形無形の武器を鑄造し、而して之を其の手に握らしむるものは○○○○である。サンヂカリストの事業は幾分朦朧たる勞働者の階級的感情に○○○○、而して之れを階級的利益及び階級的理想の明確なる○○○○せしむるに在るのである。而して這般の企圖は惟り勞働者を結んで○○○○○○○○○○○○由つて達し得らるるのである（レヴアイン）。

相互の利害關係が全然相ひ反する此の二大階級間に於ける戰は○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○熟れか一方の階級の完全なる○○に由つてのみ惟り終熄す可きものである。資本家階級は貧民階級の絞取者であり、壓迫者である。彼れ等は勞働者を奴使し、抑壓し、而して又た墮落せしむる顯然たる目的を以て社會を現存の形態に組織した。資本家的組織及び之が制度の○○○○○するに因つてのみ、貧民階級は其の釋放を期待し得るのである。資本家的社會の全構造は○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○之に代らしむ可きものである。是に至つて彼れ等は最早貧民階級に非ずして、上長の寄生階級によつて搾取劫掠を受くることなく、彼れ等が勞苦の全收果を享有する自ら釋放せる自由にして平等なる勞働者と爲るのである。斯くして有らゆる賃銀勞働者は有らゆる資本家及び資本家階級統治の恩惠に浴しつゝある有らゆる人々の○○○○○○○であると說くのである（スパルゴ）。

七

富の集中的傾向並に資本的生產破滅の避く可らざるを豫言したマルクスの所說は如何なる點まで事實と爲つて現れたか。マルクスは此の學說に關しても亦た他と等しく自ら之を創始したものではない。彼れは前人の所說を採つて之に細心精緻なる研究を加へ、而して後、最も深甚なる印象を與へ得可き方法を以て之を社會に發表したものである。初めて新產業制度の下に在つて謂ゆる富の集中的傾向並びに之に隨伴せる勞働者階級貧困增加の理論を構成したものはシスモンヂである。彼れは其の Nouveauxprincipes p'économie politique の第一卷に於て「斯くの如くして富は少數所有者の手に集中するが故に、國內の市場は漸次狹縮せられ、而して工業は次第に其の生產物に對する他の販路を國外市場に求むるの已なきに至つて、爰に更に一層著大なる革命的の變動は可能と爲るのである」と說いてゐる。マルクスの集中說（Konzentrationstheorie）、集積說（Akkumulationstheorie）、困窮說（Verelendung theorie）、搾取說（Ausbeutungstheorie）恐慌說（Krisentheorie）、崩潰說（Zusammenbruchstheorie）等は孰れもシスモンヂに由つて預示せられてゐる。

マルクスは富の集中的傾向を預定し、中產階級は大資本家の爲めに吸收せられ、大資本家は財界の少數貴族に依つて吸收せらるゝに至ることを主張し、斯くして資本制度は自己の重量に堪へずして粉碎せらる可きものであると謂ふ結論

に到達してゐるのであるが、マルクス主義の科學的基礎に對して根本的の修正を必要なりと做すエヅアルド・ベルンスタインは斯くの如き學說が事實に徴して全然其の虛妄なることを證明せられたること、並びに社會民主的信仰の誤謬とを暴露し、富の集積は工業的企業の集中と步調を等しくして行はるゝものに非ざることを闡明するに努めた。產業の集中と資產の集積とは事實上全然別個のものである。兩者を同一視するは甚しい思想の混亂と謂はざるを得ない。而して近代に於ける株式組織に依る會社企業發達の社會的影響は資產集積の傾向と著しく相背馳せるの事實を示し、社會主義者が全く之を知悉せざりしことを遺憾としてゐる。

彼れは數字を擧げて資產の集積が產業集中の傾向と全く獨立にして沒交涉なるを論じてゐる。英國に於て最も集中的にして大規模の經營行はるゝ棉毛二業に投入せられた株式資本は非常に多數なる株主の間に分配せられ、而して各株主の持株は比較的少數なるの事實を指摘してゐる。彼れは又た普魯西及び索遜兩國の所得稅統計から引用した長い數字を以て、中流階級が漸次消滅して貧困窮迫の增加を見るに至るは正に資本制度の避く可らざる結果なりと看做すマルクスの學說が毫も確實なるものに非ざるの證左として擧げてゐる。斯くてベルンスタインは其の所論を概括して曰く、「現代に於ける經濟上の發達は單に相對的のみならず、絕對的にも亦た資產所有者の數を減少せしむるの傾向ありと做すの主張は徹頭徹尾誤謬である。彼れ等の數は絕對的にも相對的にも共に增加するの勢を示してゐる。若し社會民主政治の運動及び其の將來の希望が資產所有者の數の減少に基礎を置いてゐるならば、そは正に有らゆる希望を拋棄しなければならぬことと爲るのである」と。彼れは「絕えず其の數を減じつゝある少數の大資本家に依つて有らゆる餘剩價値は吸收し去らるるに至る」と做すの思想を以て妄信謬見と觀じてゐる。

近世に於ける生產業の主要なる特徵として認む可きものは勞働の偉大なる生產力增加である。其の結果は亦た消費貨物の總產額にも少なからさる增加を見るに至るのである。而して是等の財貨は如何に處分せらるゝのであるか、詳言すれば勞働者は其の取得する勞銀の高に制限せらるゝが故に、彼れ等が自ら消費し得る限度以上に生產した謂ゆる餘剩生

產高は如何に處分せらるゝのであるかと云ふ疑問を提出しなければならぬ。謂ゆる資本的貴族は一般に認められるよりも十倍も廣大なる胃の腑を有し、且つ又た彼れ等が實際上有するよりも十倍の僕婢を使傭し得るかも知れぬ。然しながら事實さうとしても彼れ等の消費額は之を國民經濟上に於ける全生產額と比較する時は殆ど重きを爲すに足らぬものである。大資本的生產の第一の特徵と認む可きものは多數生產であることを忘れてはならぬ。果して然らば此の資本的貴族や其の家內の者どもが消費し盡すことの出來ぬ商品は如何に處分せらるゝのであらう。若し是等の商品が何等かの方法に由つて貧民階級の手に達せないものとしたならば、そは他の階級に依つて吸收せられなければならぬ。資產は次第に一部少數者の手に集積せられて資本家の數愈よ減少すると共に貧民階級の幸福亦た之と同時に增進するか、然らざれば幾多の中流階級が存在してゐなければ、常に增加して止まない生產物の吸收せらる可き途はないのである。事實に徴すれば一部少數者の手中に於ける集積が近代に至つて著しく增大したことは明かである。ジードの言ふやうに億萬長者と稱するものは前代未知の新經濟的動物である。然しながら資產家の數の增加並びに貧民の數の減少も亦た事實である。

勞働者の狀態を以て全然絕望的のものと說いた時代は遠い過去のことである。千八百三十年から千八百五十年に至る頃の急進的社會主義者の著作中には悉く此の種の文字が記載せられてゐる。而して當時の事情は斯くの如き悲觀的な言說を是認す可き正當の理由を有するの觀があつた。斯くてマルクス及エンゲルスは其「共產主義宣言」の中に「勞働者の狀態は產業の進步と共に上進するものに非ずして、却つて不斷の低下を來し、勞働者は貧民と爲り、貧窮は人口及び財富の增加よりも更に急速なる發達を來しつゝある」旨を絕對に宣明し、エンゲルスの「階級鬪爭論」を讀む者が勞働者の狀態に最少の改善を見んと期待するは市民的國家の眼には常に空想として映ず可きものであるとの言に接するのである。是に由つて之を觀れば勞働者の地位の絕望的なる一事は實に謂ゆる科學的社會主義の動す可らざる公理であつた。

エンゲルスが其の「賃銀勞働者階級の狀態」に關する描寫の資料を得たのは英國勞働者に取つて最も悲慘な秋であつた一千八百十二年から四十七年に至るの期間であつた。即ち貧民階級が窮迫と罪惡との深淵に陷つた時代であつた。而

して彼れ等に取つては其肉體的及び精神的の墮落を抑止す可き有利なる法制も、有力なる勞働組合の運動も存在しなかつた時代であつた。ポール・ルロア・ボリユーの謂ゆる「大規模産業組織の混沌時代」であつた。然しながら社會は徐々に此の混沌の狀態を脫して組織的のものと爲りつゝあるのである。勞働階級の狀態は日一日と改善せられつゝあるのである。既にカウツキーも「所有者の數は久しく減少することなく、却つて增加しつゝあるのである」と云ふベルンスタインの鞏固なる主張を引用し、スタツトガルトの會議に於て悲痛なる語氣を以て彼れに說て言ふ、「若し此の事が事實であるならば、吾人が勝利を得るの時は啻に甚だ遠い將來と爲つたのみならず、吾人は全然吾人の目的を貫徹することを得ないであらう。若し果して增加しつゝあるものは「資産家」の數であつて、「無資産者」の數でないとしたならば、吾人は常に社會改良の行はるゝ割合と比例して、次第に吾人の目的から遠ざかりつゝあるのである。而して漸次自ら廢滅の域に向ひつゝあるものは資本主義に非ずして社會主義たるの結果と爲るのである」云々と。

斯くて又た資本主義の顚覆近きを豫言したマルクスの見解が其の正鵠を失し、資本主義は生産上に於ける其の地位と支配とを放擲せんとするの徵候を毫も示してゐないのみならず、却つて其勢力は强大と爲りつゝあるを觀たソレルはマルクスの謂ゆる大破裂は彼れの想像するが如く經濟的恐慌の形態に於て來らずして、正に總同盟罷業の狀態に於て現れなければならぬと論ずるものである。有らゆる工業國の勞働組合裡に新産業主義の誕生を促成し得可き革命の力は存在する。彼れ等は戰に對して特殊の能力を持つ。彼れ等は現在の布置に由つて苦惱しつゝある者のみを抱擁する。而して同盟罷業の手段に依つて最も成功の見込十分なる戰場に於て戰を行ふことが出來る。ソレルは此の不斷の鬪爭、即ち其の謂ゆる violence によつて敵の生命財産に危害を加ふるを目的とする暴力の發動を意味するものでない。それは防寨や公衙の破壞や又たは總ての政治的革命に普通なる徵候に就いて言ふのではない。ソレルは又たサボタージを是認しない。サボタージは舊制度に屬するものである。而して毫も勞働者を解放の途に着かしむるの効果なきものである。彼は violence なる語を以て、抗敵心の現實なる表現、而して特に總同盟罷業に適用せんとするのである。無産階級の violence は

市民階級の創造であつた「恐怖時代」を模範とす可きでない。

〇〇〇〇〇〇に從へば資産階級は又た飽くまで資本主義的であり、銳意生産の業務に盡瘁し、徹底的に自利的であり、而して何等慈悲仁愛の父性的衝動に導かれぬことが〇〇である。米國の富豪はソレルが理想のブルジョアに近いものである。資本主義は其の活力の最も旺盛なる時に於て〇〇せられなければならぬ。〇〇は是に由つて成功の最大限を贏得することが出來る。世界の進歩其の者は市民階級の刻薄强烈なる主我主義と密接なる關係を有するものである。近代文明の道に伏在する最大なる危險は〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇に墮して、社會的平和の坦道を辿るの虞である。如何なる社會と雖も、其の支配階級と産業界の貴族とが他愛的であり、而して非利己的なれと云ふ誘惑に聽從した時、而して又た彼れ等が等しく勞働者の運命を安穩ならしめ、共同なる利益の紐に資本と勞働とを結合せんと努むるの時、其の社會は〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇に立つものである。安易なる徑路の上に有らゆる進歩の〇〇は橫はる。社會的鬪爭をして休止せしめよ、然らば其の國は自己の〇〇に向つて其の道を急ぐものである、と說くのである。

八

寔にマグドナルドの謂ふやうに現在社會の根本的事實として階級鬪爭を信ずる者はサンヂカリストの論理に對して自己を防護す可き何等の根據を有してゐない。階級鬪爭を是認するならばサンヂカリズムは之が必至の推論である。然しながら階級其の者の存在は是認しなければならないが、幸にして今日に於ける社會は資本勞働の二者に截然二分せられてゐるものではない。勞働者資本家の外に吾人は猶ほ土地所有者を認めなければならぬ。彼れ等は常に必ずしも資本家と利害の一致を見るものではない。ホイツグ及びトーリー、自由及び、保守兩黨の政爭は英國の歷史に古い所である。自由貿易の主張に際しては工業家は勞働階級に黨して地主に對抗した。工場法の通過に際しては地主は勞働者に與して

工業家と戰つた。彼れ等兩者は今や勞働階級の威嚇に對して暫く親善の關係を維持しつゝあるに過ぎない。等しく資本家と稱せらるゝものゝ内にも謂ゆる能動的資本家、卽ち企業者と消極的資本家、卽ち利子に衣食する者とが在る、彼れ等兩資本家の關係は宛も債權者對債務者のそれであつて、同一の利害關係を有するものではない。勞働階級は又た常に必ずしも同一の利害を有するものではない。彼れ等の間に更に階級を劃することが出來る。精練勞働者は往々にして不精練勞働者と一致を缺く。其の他、中流階級と稱せらるゝ旗幟頗る不鮮明なる混成階級がある。彼れ等は又た農民と工業家と勞働者とが各々其の利益を主張して暴虐を極むるの時、痛切に自己の間に共通の利害を感ずるものである。而して又た有らゆる階級の分岐を無視し、無差別一樣の利害關係を有する消費者が一般生産者に對して立つのである。階級の存在は事實である。階級の間に鬪爭の發生することも事實である。然しながら戰は常住不斷、資本勞働の二個に由つてのみ戰はれるものではない。社會階級の金字塔の頂點と底邊との間を構成する中間階級は、縱しヴィルフレドオ・パレトーの云ふやうに凹狀の側面を形造つても、決して消滅し去るものではない。

私は爰にレオン・ブルジョアが一千九百〇五年七月の演說を以て此の稿を了る。而して特に之をソレルが Reflexions sur la Violence から引く。「階級鬪爭は事實である。而も殘忍なる事實である。余は問題の解決が得られるのは此の鬪爭の持續に依るものであることを信じない。余は解決は寧ろ其の制壓に存することを信ずる。人は同一事業に於ける共同者として自己を思料することに導かれなければならぬ」。縱し社會の主要なる職分は明確なる階級に體現せられ、各人は各々誠意を以て自己の任務に從事す可きものであるとしても、總てはプラトーンの理想國に於けるが如く理知の統治下に給付の全體を得るが爲めに相ひ結合すべきものである。而して社會は此の全體的勤務を離れて個人的或ひは階級的なる利己的目的に向つて奔ることを制止するが爲めに其の有らゆる力を傾注しなければならぬ。有らゆる個人の間に於けると等しく有らゆる階級の間に於ても亦た meum et tuum の區別を絕しなければならぬ。

國家社會主義と階級鬪爭

高　畠　素　之

一

社會主義の有らゆる傾向は、大體に於て之を二別することが出來る一は集産主義（コレクチフイズムス）（國家社會主義）、他は共産主義（コンムニイズムス）である。集産主義と共産主義との區別は、先づ分配制度の理想に於て現はれる。

資本主義撤廢後の分配制度に於て、集産主義は貨幣經濟（ゲルドホルトシヤーフト）を主張し、共産主義は自然經濟（ナツールホルトシヤーフト）を主張する。集産主義は、何等かの方法に依つて、各個人の收入（アインコンメン）を調節することを主張する。卽ち各人が自己の消費の爲に支出する價値量をば、社會の力に依つて正確に量定することを主張する。

之に反して、共産主義の分配制度は、各人の收入を調節せず、一定の價値量としての收入なる概念をも除外して、只だ直接に消費のみを調節し、或は消費さへも全然調節しないのである。隨つて集産主義の分配制度に於ては、何等かの形體の貨幣の助なしに生産物の分配を行ふことは出來ぬ。各人は只自己の所有する價値限度に於てのみ物質を消費することが出來る。消費を行ふには、各人は必ず自己の收入の一部を支拂はなければならぬ。されば此制度のもとに於ては、物資は總て一定の價格を有することを必要とし、價格は總て一定の價値單位に依つて測度されることを必要とする。

之に反して、共産主義の分配制度は、收入に關係なく直接消費のみを調節し、或は消費でさへも調節しないのであるから、分配機關としての貨幣の仲介を必要としない。謂ゆる自然經濟の分配法である。

されば集産主義も共産主義も、共に分配上平等を主張するものであるが、集産主義の平等は收入に關係し、共産主義の平等は直接消費に關係する。尤も集産主義にも共産主義にも、此點に於てそれぞ〵又た二大派別がある。

二

先づ共産主義に就て云ふならば、消費その者の平等を期するものと消費の平等なる自由を期するものとの兩主張がある。前者は年齢男女の限界內に於て、各人に同質同量の物資を分配すべしと說く。卽ち此派の共産主義は、分配の客觀的平等を主張する。之に反して、今一派の共産主義は分配の主觀的平等を主張する。卽ち各人の必要に應じて直接物資を使用すべしと說く。前者の著名なる代表者としては、カベー、バブーフ等を擧げることが出來る。そしてフーリエー、クロポトキン等の無政府的社會主義は後者を代表する。

各人は消費を客觀的に平等ならしめると云ふ主張は、社會主義の最も原始的な形體であつて、個性の尊重と自由の追求とを生命とする現代人の要求に添はない。之に反して、消費の自由を平等ならしむべしと說く無政府的社會主義の主張は、自由•平等•正義の有ゆる理想から見て、我々現代人の要求に最も一致したものと云ふことが出來る。只、此種の分配制度を實現するには、一面に於て社會の生産力が總ての産業部門を通じて、著しく(殆ど無限に)發達してゐることを豫想しなければならぬ。生産力の發達が未熟な所に此制度を應用すれば、社會の經濟的秩序は勢ひ混亂狀態に陷ることを免れない。吾人の要求する物資が豐富なる場合には、必要に應じて分配すると云ふことは寔に結構である。然し物資に依つては、需要に相當した供給を仰ぐことの出來ぬものがある。斯くの如き物資に對して必要に應じた分配を行ふことは、社會の秩序の維持の上から云つて非常に危險である。

私は資本主義撤廢後の新社會に於て、總ての産業部門にわたり生産力が多かれ少なかれ增大することを豫想するものであるが。然し此點に關して非常に樂觀的であることは出來ぬ。殊に私の信ずる如く、近き將來に於て突變的に舊社會の崩壞、新社會の成立が行はれる場合には、少なくとも此突變後當分は、資本主義の時代よりも生産力が却つて低落することを豫期しなければならぬ。私は之等の豫想に可なり重大な主義を孕ませてゐる。隨つて之等の豫想と兩立し能はざる無政府的社會主義の所論には贊成することが出來ぬ。

三

所が集産主義の貨幣經濟制度は、此點を充分考慮に入れてゐる。生産力に制限があるから、隨つて生産された物質にも制限がある。そこで各人の分配を制限しなければならぬのであるが、それには一面に於て、各人の收入としての貨幣額に制限を置くと同時に、又他の一面に於て物資に價格の差等を附することが必要である。需要に對して分量の比較的多い生産物は價格を低廉にし、然らざるものには高い價格を附する。限定された生産力のもとに於て分配の公平を期するには、人間の道德心•愛他心が極度に進むことを豫想しない限り、何うしても此方法に依るの外はなからうと思はれる。

然し斯くの如き集産主義の中にも亦、共産主義の場合と同じく大體に於て二の派別がある。一は各人の貨幣收入を絕對に平等ならしめると同時に、其收入の使用法を各人の自由に任せることを主張し、他は各人の技量に應じて收入に差等を附すべきことを主張する。謂ゆるマルクス派社會主義者は大體に於て前者を代表し、ルイ•ブラン、サン•シモン、ロドベルツス等は後者を代表する。私も亦集産主義の一人として、此點に於てマルクス派の集産主義を信奉するものである。此派の集産主義は、一先づ貨幣經濟論に於て、右に述ぶる共産主義の缺點を補ひ、收入平等論に於て人類の平等心を滿足せしめると同時に。又收入の自由使途を主張する點に於て、自由の要求をも滿足せしめる。

四

以上は分配論から見た集産主義と共産主義との區別であるが、此兩主義の區別は又、生産方面に於ても看取される。一口に云へば、集産主義の生産組織及集中的であり、共産主義のそれは分散的である。集産主義は、原則として一切生産機關(土地を含む)を國家の(或は生産機關の種類に依つては、地方的權力の)所管に移すことを主張する。之れに反して、共産主義は中央權力の破壞を主張すると同時に、又一切の生産機關を種々なる自治體(地方的自治體、勞働組合等)の所管に委ねることを主張する。

私は此點に於ても、集産主義を是とし、共産主義を非とする。共産主義的生産方法の最大缺點は生産力の平均を維持することが出來ぬことである。集中的權力なき共産主義の社會に於ては。如何にして各職業或は各地方の間に生ずる、生産力の不平均を救治することが出來るであらうか。一例を擧げるならば、パン燒業の生産力は社會の需要に比して五割方過剩であり、之に反して製帽業の生産力は社會の需要に比して五割方不足を來

だすと云ふやうな場合に、自治本位では一方の有り餘つた生産力を、他の生産力の不足な職業に融通することが出來ぬ。隨つて社會全體から云へば、生産力はそれだけ無駄になる譯で、消費者としての社會は之が爲に非常な迷惑を蒙ることになる。

五

此點に於て、資本主義の現社會は中々うまく行つてゐる。資本主義は、元來、自由主義・個人主義に立脚するもので、個人的活動の自由を尊重し、國家の干渉を排斥する點に於ては、共産主義と頗る共通した趣きがある。所が資本主義は一面斯くの如く、非國家主義・自由主義であると同じく、他の一面に於て營利主義・競爭主義である。之に依つて、資本主義の社會に於ては、生産力の割振りは非常に巧く行はれる。

先きの例で云ふならば、パン燒業の生産力が需要以上に過多なる時には、パン價格はそれだけ下落する。隨つて他の事情に變化なき限り、資本の利潤はそれだけ減少する。之と反對に製帽業に於ては資本の利潤は增大する。そこで社會の資本は一部分、パン燒業を去つて製帽業に流入することになる。斯くして社會の生産力は巧みに其平均を維持する。

隨つて資本主義的生産方法のもとに於ては、國家は生産方面に干渉する必要はない。極端の自由放任主義であつても、生産力の割振りは巧みに運ばれてゆく。資本主義の社會に於ては、國家の職分は生産方面から驅逐されて、狹義の政治に局限されることになる。かくて『お役人の商法』は、産業經營に對する國家(或は政府)の無能の嘲笑語となつた。

然るに社會主義の世の中になると、資本主義的生産の指導力たる營利及び競爭の原理が無くなるのであるから。之に換て何うしても强大なる中央權力が生産事業に干渉しなければならぬ。今まで營利や競爭がしてゐた其同じ仕事を、國家が中央權力が實行しなければならぬ。此意味に於て、社會主義は資本主義に比べてヨリ多く國家的である。從來、狹義の政治的方面に局限されてゐた國家の職分は、進んで産業方面にまで浸潤して來る。つまり國家の權力を以て、一方に有り餘つた生産力を、生産力の不足な他の産業方面に振り向けるのだ。國家の命令に對しては、個々の職業的或は地方的單位は絕對に服從しなければならぬ。苟くも生産の目的が生産それ自體になく、國民全體の消費生活にある以上、國民全體の消費のために國家が强制的に生産の干渉を行ふは已むを得ぬことである。そんな干渉をしないでも。國家の消費生活が侵害されないと云ふならば、それは無きに越したことはないが、我々の頭はまだそんな結構な狀態を想像することを許さない。

尤も國家(或は政府)の名はなくとも、各職業或は各地方間の國民的中央委員會と云ふやうなものがあつて、それが生産力の割振を營理すれば宜しい譯であるが、其委員會に國家と同じ强大の權力を賦與しなければ、そんなものはあつても何の役にも立たぬ。又それに各職業或は各地方を强制するだけの强い權力を與へるならば、それは即ち國家である。國家なら男らしく國家と云ふが善い。國家の實質に、國家と違つた名稱を被せることに何れ程の樂しみがあるのだ。俺は泥棒をしないと吹聽しながら詐欺を働いたからとて、何も泥棒以上に善事をしてゐる譯でもあるまい。

六

以上、私は分配及び生産の兩面から集産主義を支持したが、私が集産主義即ち國家社會主義を主張する理由は、單に之のみではない。私は更に方法論の方面から、集産的社會主義を支持することが出來る。

私は資本主義から社會主義への經過を徐々の進化と見ずに、
れに乘じて、火事泥式
の無責任漢が輩出することも豫期しなければならぬ。他方に大小新制度の整理がなか〳〵困難である上に、反動的勢力の擡頭を絕えず强壓的に抑止する必要も生じて來る。

私が
無政府主義やサンヂカリズムに反對する理由の一は、之等社會主義思想とレボリユーショナリズムとの間に理論上の一致點を見出すことが困難であるからである。社會が何十年何百年かの間に徐々に次第に進化して行つて、生産力が非常に增進し、個人の道德心が神の如く發達した曉には

又恐らくそれは最も萬人の要求に適したものであるかも知れぬ。　權力の確立なしに如何にして新秩序を維持することが出來るであらうか。

七

私の國家社會主義の理論的根據は、大體に於て以上の如きものである。然らば私は、此の國家社會主義的理想の實現に對して如何なる手段を採るか。曰く階級鬪爭である。露骨に非妥協　。ブルジョーアに對するプロレターリヤの　

私の見る所に依れば、國家社會主義實現のための鬪爭は先づ第一に政治的でなければならぬ。　更に具體的に云ふならば、日本國民　の意思を代表する政府の成立を主眼とするものでなくてはならぬ。其目的の爲に、私は先づ普通選擧獲得のための運動(アクチオーン)を急務と信ずる。

私は次に經濟的方面に於て、消費者としてのプロレターリヤの大衆運動を主張する。勞働組合の缺點はプロレターリヤを一括的に網羅することの出來ぬ點にある。生産者としての組織的運動は、何うしても職業(トレード)に縛られる傾きがある。そして結局の獲物は『地位の改善』が關の山である。此意味に於て縱斷も横斷も大した違ひはない。單なる地位の改善なら溫情主義で結構だ。私は階級鬪爭主義の立場から慈善事業と社會政策とを五十歩百歩と見ると同じ意味に於て、溫情主義と組合主義とを五十歩百歩に見てゐる。

私は車掌運轉手のストライキよりも、電車賃の値上に對して勃發する市民　。小作人組合は出來ても出來ないでも宜しいが、米價昂騰に對する國民的デモンストレーションの　大變な相違である。勞働組合は　ヨンを造らぬ。外國の例を引いて云へば、ロシヤの革命は勞働組合と　の直進を妨げる原動力の一は勞働組合の『實力』であると云はれてゐる　本場と稱せられる。フランスは『革命』ロシヤを膺懲することに最も徹底的である。

勞働組合が如何に發達しても、資本主義のもとに於て組合に包括されるプロレターリヤの數は知れたものである。イギリスの如く、勞働組合の馬鹿々々しく發達した國に在つても、組合加盟者の數は五百萬に達しないと云ふではないか。それが一齊に起つて總罷工をやつたからとて、資本主義は決して倒れないプロレターリヤは國民の大多數であると云ふ以上、プロレターリヤの運動は國民の大多數を網羅するものでなくてはならぬ。

謂ゆる議會政策の社會民主黨の本領が、投票の掻き集めと社會政策的立法の制定とに盡きる如く、職業本位の勞働組合の本領は基金の掻き集めと地位の改善とに盡きる。私は議會政策の社會民主主義に反對であると同じ意味に於て、職業本位の組合運動に反對するものである。地位の改善や勞働施設の制定は、資本家と政府とに一任して置け。

時間の短縮や、賃銀の引上は向ふでして呉れる。組合運動五十年努力の結果は、　一日の効果にも及ばない。

更に考ふるに、勞働組合は勞働者の『地位の改善』を以て　使命を瞞着するものである上に、其地位の改善も實は大した改善を意味せぬ場合が多い。時間を短縮し賃銀を引上ぐれば、資本家は(他の制肘力なき限り)同時にまた生産物の價格を引上げることが出來る。かくて消費者としてのプロレターリヤの生活地位は(少なくとも或時期の間は)『改善』されない前に比べて何程も改善されたことにならぬ。

加ふるに、プロレターリヤの中には、謂ゆる勞働者でないものも含まれてゐる。此種のプロレターリヤに至つては、勞働組合の『實力』のお陰で、地位を改善されない上に物價はます〳〵騰貴すると云ふ二重の痛苦を忍ばなければならぬ。而も此間にあつて單り無痛の快樂を樂んでゐる者は資本家である。

されば勞働組合の努力を、斯くの如く無益有害に了らしめない爲にも、一面に於て絶えず消費本位の大衆運動を激發(アヂテート)する必要がある。

附言。私の態度は今春國家社會主義を唱道し始めた時分とは幾分變つてゐる。根本理論は動かないが、實行手段に於ては大分變つた。今後も尚ほ變はるかも知れぬ。それからも一つ。私は　プロレターリヤが普通選擧に依つて議會に活動することを重要視するものである　・運動の導因及び表現たる意味に於て議會的活動を主張するものである。

一の理想として說かれる場合は、例へばマルクスやバクーニンの時代に之を說く場合には、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○ ○○ ○ ○○○○。然るに今日の時代の如く、その理想が既に孤獨の思想家の理想に止らずして、一の可能な主義として實行の第一步を蹈出した場合には、之が手段も亦相當の變更を要するのである。鬪爭を必要とする前に鬪爭を說くのはよい。既に鬪爭が始まつた今日はなるべく之をして悲慘な血路から免れしめる工風が必要であらう。今日はクラス・ソリダリチーを奬勵する代りにソシアル・ソリダリチーを奬勵することが急務である。若し福田氏の眞意がそこにあるならば、それには我等も大賛成である。

咬豆茶話

△山憲問題で、內閣は必ず潰滅すると、此問題に大きに思はせ振りを、含ませるものが多いが、何にせよ、憲政會はこの問題を提げて議會に一働きするつもりだそうな。

△それかあらぬか、本問題に在海外の某々氏が關係ありとか、某政黨が關係ありとか、隨分不可思議の巷說が俱樂部あたりを賑はせておる。シーメンスの二の舞なき樣にお用心〳〵。

△熊本縣からの一投書に曰く、國憲黨の努力も漸く衰亡の徵を呈して來たが、今回の選擧干涉で、又候、國憲黨の反撥心を惹起し、安達謙の努力回復の日が來た。アマリ干涉が露骨だけに、却つて贔負の引き倒しに了つたと。隨分酷かつたと見える。

△和製ルーズ歸朝以來、白哲、長島、秋山それに伊東巳代、水野等までが一團となつて、後繼內閣の引受方に熱中しておるとの話だが、原がソウ易々と白髮首を引渡すか、それに西園寺はどうしても、牧野に家督を讓るつもりだし、平田は第一、加藤第二牧野の胸算でおるから、オイソレとうまく新平に廻つて來るかは疑問ダテ。上院あたりでは、新平の敬に對する新熟柿主義を冷評しておる。

—((改造壹月號))—

智識階級を開放せ

勞働者は開放せられて、智識階級は全然開放せられざるは、我國の怪現象である。物質的にも幾分か勞働者の待遇は改善せられた。精神的にも今將に釋放せられんとする途上にある。しかし官吏は服務規律で束縛せられ會社銀行員また行則社規で以つて口を緘せられて自己の苦衷を語ることが出來ず。よし自分の考へが正義にあつたにせよ。それを文書にしても、口頭にしても、陳述するの自由を與へられず。また自己の經濟問題に對しても團體的行動が出來ぬのは遺憾事と云はねばならぬ。この現狀を默して忍從しつゝある智識階級の苦痛は多とせねばならぬ。

理解ある政治は智識階級に待たねばならぬ。穩健なる社會及國家の改造は智識階級の手を藉らねばならぬ。社會に理解があり、思想に理解があつたら國家の前途も、社會の改造も別に憂慮するに足らぬが、今この逆風潮をいかに轉回すべき。

大破壞から大建設へ、破壞しつゝその跡を堅實に建設して行かねば、そこに理想の國家も、理想の人道も割くことは出來ない。煽動、妄動、暴動は恐るべく、また排斥すべきである。これ等は世の無識者によりて起さるべきものである。

無智識者が開放せられ、好遇されて、智識階級の虐待さるゝ今日の如きはなく、我國の現狀の如きはない。

國家を既倒に救はんと欲するものは、須臾く、智識階級の開放を斷行し、その中核勢力を善用して社會及國家の圓滿なる改革を期せねばならぬ。それには「官吏服務規律」よりの釋放、社規行則を打破して、智識の獨立を宣言する以外にない。現時の智識階級は文字ある奴隷に過ぎないことを自覺して、釋放への道へと辿らねばならぬ。

生存權の倫理的考察

文學博士　藤井健治郎

一

生存權てふ觀念は、近世社會主義及社會運動が懷抱してゐる根本思想の一つである。そは如何なる權利かなれば、アントン・メンガーに從へば、『社會の各員は、現在してゐる方便の量に從つて、緊要の程度の比較的少い他人の需用の滿たされるのに先だち、その生存維持に必要なる物及奉仕の頒與されんことを要求する權利である』同氏著勞果全收權第四版九頁。猶同氏の其後の著述たる新國家論第三版九八頁。及新道德論第二版七六頁に於いては、前述の『生存維持に必要なる』といふ語は更に『人間相當(メンシエンウルデゲン)の生存をなすに必要なる』と言ひ直されてある。是は如何にも必要な修正と思はれる。)メンガーは此生存權を勞果全收權(Recht au fden vollen Arbeitsertrag)と及勞働權(Recht auf Arbeit)との二つに並べ加へて、之を三つの經濟的根本權利であると稱してゐる。(同書六頁)。

然らばかうした生存權といふやうな觀念は、思想上に如何なる根據から生れて來たものであるかといへば、そは富の分配は、之を個々人の需用に從つてするのが、最も公平で又適當であるといふ思想に基づいてゐるのである。社會主義の中には一切平等にするのが、分配上最も公平なものであるといふ、所謂平等分配を主義としてゐるものもないのではないが、然し、當人が需用しても、しなくても、又欲しても欲さなくとも、すべて平等に分配するといふのは、甚だ無定義なことであつて、而かも形は平等に似て、實は甚だ不平等極まつたものである。それよりも各人の需用する所に從つて分配するのが、却つて公平なる分配である筈である。何となれば各人が富を求める所以は、それによつて其需用を滿足せしめんが爲めであるから、今其需用に從て富を分配すれば、皆それぞれ當人に滿足を得させることになるからである。そこでメンガーは多くの共產主義者が財產の平等分配といふ場合には、それは畢竟需用と現存してゐる方便とに從つて分配する意味であるといつてゐる。(同書八頁)。さて需用に從つて財を分配するといふことを主義として、その實行の場合を考へると、各人の需用なるものは、性・年齡・事情・境遇・性格・習癖など、種々の事情によつて種々に異なるものであつて、實に千差萬別のものである。かうした多分に主觀的要素を含んでゐるものは、到底之を一般的な、客觀的な立法をなす所の基礎とするの煩に堪へない。從つて需用に從つて分配するといふことは主義として採用するにしても、猶之を實行的なものにするが爲めには、その需用といふものを制限しなければならぬ。然るに各種の需用の中でも、人間相當の生存を維持するのに絕對に必要なる所の需用、例へば衣・食・住・醫藥等は比較的一般的な客觀的な性質を帶びてゐるので、是等は或る立法上の基礎となることが出來る。メンガーは之を生存需用(エキジステンツベデュルフニクス)と名づけてゐる。(同書八頁、新國家論九八頁)。此生存需用といふ觀念を思想上の根據として生存權といふ觀念は生れてゐる。

しかし、人は生存權を有てるからといふので、唯生活に必要なる物資の供給を受けるばかりで、而して自分はブラブラ遊んでゐて宜いといふ法はない。そうした事は現代の經濟組織に於いて不都合であるばかりでなく、社會主義的社會に於いても亦許すべからざることである。若し人は供給を受けるばかりで遊んでゐても宜いものならば、誰が好んで働くものであらうぞ。そうしたなら供給すべき物資を生產する者がなくなつてしまつて、その行使も止まつてしまはねばならぬに至るであらう。そこで生存權の裏には勞働の義務が付いてゐなければならぬ。即ち社會の各員は、生存權によつて生存需用の滿足に必要なる物資の分配を受けると同時に、又社會一般の爲めに勞働しなければならぬのである。かやうに考へ來ると謂ふ所の生存權なるものは、ゴッドキンが唱道した所の交易主義(レシプロテイー)(同氏著政治的正義論)のやうな思想になる譯である。それでメンガーはゴッドキンを以て財の分配は各員の需用に從てするのが正當であるといふ、所謂需用說を徹底的に主張した少數社會主義者中の一人であると教へてゐるし、(同書八頁)、

又、『社會は其各員に對し、必要にして又有用なる生産及奉仕を須與すべき義務を負つて。而してそれと同時に其各員は、又其社會の爲に一定時間（一日六時間）必ず働かねばならぬ義務を課されてゐるのである』とのウィルヘルム・ヴイトリングの言を引用して、かうした論述をなす限に於いてヴイトリングは生存權を認めたものであると說いてゐる。（同書一六三頁）。それ故に社會の各員は義務的に勞働しなければならぬといふことは、生存權を單に共者として外に關係なく規定せんとする時には、必ずしも必要な說明でないが、しかし其生存權を周圍から觀て、それ等と關係を有たせて規定せんとする際には、必要なる註解である。此の關係については、後段、生存權について論議する際に、更に觸れる機會がある。

かうした譯であるから、生存權は社會の各員が之を有てるものであるとはいふものゝ、實際に於いては勞働に堪えない處の小供や老人、乃至病人、虛弱の人などの場合に最も明瞭に現はれるものである。即ち小供は養育と教育とを享け、老人・病人・不具者・虛弱者等は社會の保護を受け、而かも彼等自身はその代りに社會の爲に働くことをしないからである。（同書九頁。新國家論九頁）。此點からいへば今日現在成立してゐる制度の中で、孤兒院や、養老院や、乃至疾病・養老・傷害等の國家の强制的保險制度の如きは、此生存權を具象化したものであるといへる。（新國家論九九頁參照）。

二

生存權といふ觀念は、財の分配は需用に從てするのが、最も公平で、分配的正義に適つたものであるといふ思想から生れたものであるとすると、それは今日の私有財產權卽ち所有權に對して如何なる關係に立つかが問題になつて來る。何となれば私有財產權のある今日に於いては、財の分配は、或は賃銀又は勞銀などの形に於いてもされるのは勿論であるが、それよりも多くは或はレント、或は利息などいふ形でされて居つて、需用の如何の如きは、此點に於いては殆ど顧慮されないやうな有樣になつてゐる。そこでそうした性質の私有財產權と、謂ふ所の生存權とは、果して如何なる關係に立つかゞ問題になつて來ざるを得ないからである。メンガーは之に對して私法制度の持續と生存權とは、兩々相並存することが出來るもので、必ずしも相悖るものでない。勞果全收權を徹底的に行はうとすれば、それはどうしても無勞所得、從て亦私有財產制とも撞著するを免れないが、生存權はそうしたものでない。斯かる場合に於いては國家の各員が、其生存需用を要求するのは、謂はゞ國家の收入に對して抵當權を設定したやうに考へれば可い。卽ち遶り合せの好い有產者連が其無勞所得を收得するに先て、須與さるべき優先權を有つた所の抵當權を設定したものと考へれば可いと說明してゐる。（同書九頁）。しかし此生存權も飽くまで徹底的に之を實行すれば、今日の土地及資本の所有者等が、單に其等を所有するといふことから得てゐる所の、無勞所得の大部分を取り去り、爲めに私有財產といふことも、甚しく其經濟的效用を奪ひ去られ、從つて其私有財產は忽ち共有財產に變ずるやうな傾向を呈するに至るであらうが、（同書九頁）、しかし理論上二者は相兩立することが出來るものでないといふのではない。そこで現時の社會運動は、一面に私有財產てふことを認容しておいて、而して他面に一定の範圍內に於いて生存權の確立を主張してゐるのである。メンガーは生存權と今日の私法的所有權との關係を、かくの如くに說明してゐる。

其點は判然たとして、然らば生存權と、三大經濟的根本權利中の他の二者、卽ち勞果全收權と、勞働權との關係は如何うであるか。先づ勞果全收權との關係についてのメンガーの意見を聽くと、かうなつてゐる。勞果全收權が徹底的に行はれる社會、卽ち私有財產制のない社會に於いても、國家の各員は自己の生存需用の資を得んが爲に、一日に若干時間は必ず働かねばならぬ義務があるとして、其れ以外の時間は一定の制限の下に任意に働き、かくて得たる所の結果は、すべて之を當該者の所得とするといふことであつたならば、そこに勞果全收といふことがある筈である。かうした譯であるから生存權は勞果全收權とも並存することが出來ると、猶私有財產制と並存することが出來ると同樣であると論述してゐる。（同書一〇頁）。

次に勞働權との關係は如何であるかなれば、メンガーは一方に於いては生存權は自己の勞働作爲に對し直接に生存需

用の滿足を國家又は自治體に向つて要求するの權利であるが、勞働權は人が如何にしても個々人の私的企業家から仕事を得ることが出來ない際に始めて行使し得る所の權利である。そればかりでなく、生存權は未成年者にも勞働不能者にもある所の權利であるが、勞働權は唯勞働有能者にのみ許される所の權利であると、明かに兩者の區別を說いてゐるが（同書一五頁）、又一方に於いては勞働權は生存樣の一種であるとも述べてゐる。（同書一二頁）。そうして彼は更に此兩者は佛蘭西の大革命時代の憲法と、當時の社會主義者の論議とに於いて、或は混同されたり或は同一視されたりしてゐた變遷を概說してゐるが、（同書一五—二四頁）、其等の點から觀ても、此兩者は甚だ密接なる關係を有つてゐるものであることが理解される。しかし之についての考察は、後節の論述の場合に於いてする積である。

三

メンガーの生存權についての說明の叙述は此位に止め、進んでその倫理的考察に入つて見たいと思ふ。生存權の觀念は決してメンガーによつて初めて闡明された思想でない。ロツクカヴー（政治論）、や、モンテスキユー（法律の精神）やフイヒテ（鎖國的商業國家）やなども、その內容は之を說いてゐる。唯メンガーは之を法學上の術語にして、法學的說明を與へたに過ぎない。さて此生存權なるものは、果して何等の根據をも有つてゐないものであらうか。若し有つてゐるとすれば、それは如何なるものであらうか。私は是は決して根據のない、空想のものとは思はぬ。何となれは近世國家が自覺してなす所の法律の設定、例へば第十七世紀の初年以來英國に發達した所の救貧法の如き、或は前世紀の中葉以後獨逸に創設された所の國家の强制保險法の如きと、及諸の社會的施設、孤兒院・貧民院等の如き、或は職業紹介所の如きは、或は之を國家がそれ自身の利益を主張とする所の國家その者の利己心に出たものであるとか、或は之を慈善な愛の心に出たものであるとか、種々に之を說明することも出來るが、又それを生存權の實際に實現された現象であるとも說明することが出來る。少くともさやうに說明してならぬといふことはないからである。既に何等かの根據を有つてゐるとして、それは果して如何なるものであらうか。私は少くとも其の四つを擧げ得ると思ふ。

第一は人道の觀念である。苟くも緣あつて人間に生れてゐながら、或は疾病・或は老衰、或は廢疾・不具、或は羸弱、或は幼少、或は失業又は無業等種々の原因の爲めに、自分自らで其生命を維持する能はざるものを、見す〳〵之を見殺しにしてしまうといふことは、如何にも慘酷極まつた話で、人道上默して已むべきことでない。殊に其失業者・無業者などの場合に於いて、何等か執るべきの職業がありさへすれば、彼等は自分で自分を養つて行くことが出來るのに、それがないばかりに餓死しなければならぬとして、かうした失業者・無業者を生み出すやうな社會組織共者が、何等かの缺陷を有つてゐるといはなければならぬ。果して然らばそうした缺陷ある組織を有つてゐる社會共者が、彼等に對して責任を感じなければならぬ筈である。此點についてはメンガーも『もう既に占有されてゐる世界に生れて來た人は、若しも彼が當然要請し得べき兩親から養を享けることが出來ず、又社會は彼が勞働を要せざれば、彼は一握の食物に對しても權利を主張することが出來ず、事實彼は此世に於ける餘計者なのである。つまり自然の大饗燕中に彼に殘された一つの空席もないのである。是れ自然は彼に此世を去れよと命じ、而して速かに其自分の命令を行はうとするのである』といふマルサスの人口論中の有名な一節を引用して、是は如何にも慘酷な、しかし正直に現實を暴露した言で、これは啻に食物ばかりでなく、他の一切の需用にも當嵌まる言ではあるが、しかし是は、多くは今日の私法關係から生れ出た慘劇で、それを改訂すれば幾分か、其殘酷さを減ずることが出來る。かういふやうな意味のことを述べて、現代の缺陷を攻擊してゐる。（同書四頁）。こんな譯で、今日の私法關係の不完全なことからして、大自然の大饗燕に列することが出來ずにゐる人々も尠いことではあるまい。是は人道上から觀てまことに遺憾なことで、吾等はあらゆる方法を盡くして一人も殘らず各其生存を遂げる得るやうにするのが、同類人間の本務てはあるまいか。

第二は團體生活の見地から生ずる根據である。人間の生活は、多數の人間が相集つて、非常に複雜な組織を構成してゐる團體の中にある、相依相助の生活であり、又それでなければ人間らしい文化的生活を成遂することが出來ないもの

である。此は前世紀の學術研究に於いて明確にされた事實である。所謂個人主義的人生觀は到底立し得ないものになつてしまつて、所謂團體主義的人生觀でなければならぬといはれてゐるのは、此事實があるからである。かやうに人間は團體生活をなさねばならぬものであり、團體は其自ら一獨立體として生存を遂げて行かねばならぬものである以上は、其團體からいへば、團體の構成分子全部が各其處を得て、其爲すべき職分を働き、一分子でも無駄になつてゐず、不健全になつてゐないやうな、狀態が、その團體に取つて望ましい、所謂理想の狀態に相違ない。即ち少くとも其一分子でもが、働かせさへすれば相當の働きをなし得るのに食ふに食へず、衣るに衣れないが爲めに、むざ〳〵犬死させるのは、團體として決して健全狀態、理想狀態にあるものといへない。此點から考ふれば團體が其各自に對し、少くとも最少限度の生活資糧を保障することが、團體共者の本務であるまいが。即ち社會の各員に生存權を認めるといふことが、團體其自らの生存發達といふ見地から觀て、當然のことであるまいか。殊に前世紀即ち十九世紀の初葉以來歐米社會の安定を破り、それをして動搖・不安の狀態に陷らしめ、今二十世紀になつて以來は、我が日本社會をも共渦中に取捲き、更に這回の世界大戰爭の中から其終結に至つた今日に於いては、一層猛烈なる勢を以て世界の全社會を動搖せしめ、世界の全文化民族の心をして恟々の念に打たしめつゝある所の、社會主義及社會運動は、つまり產業革命の結果として、世界多數の人々が、食ふに困る、生きて行くのが難かしいとふ切羽詰つた狀態から起つたものではないか。メンガーが、十八世紀の末葉以來、漸次文化民族を動搖せしめつゝあつた處の社會運動なるものは、所詮、勞果全收權と生存權と、二つの權利を社會又は國家によつて保障して貰はうといふことを目的としてゐるものである（同書五頁）といつてるのは、今日では殆ど常套語(ツルイズム)として認められてゐる程のことである。斯かる不安動搖の際に、社會の他の一方の富豪階級、資本家階級の人々は、自分達は食ふに困らないから可いはで、平然晏如たることを得べきか。否々共不安・動搖の飛沫は必ず彼等の頭や、身體を濡らずんば已まぬものである。彼等は到底晏如たるを得るものでない。たとひ彼等は強いて恬然として不關焉の態度を取るにしても、社會又は國家は默してゐることの出來る譯のものでない。社會は國家がそれ

に手をつけるとなると、前述の理由によつて、自然生存權を認めるやうな傾向を取らざるを得ないやうになる。

第三今日文化民族の國家の現狀に於いては、救貧法、强制的國家勞働保險、孤兒院、貧民院、養老院等、若干の法律制度を除いては、國民に對して其生活上の保障を與へてゐるものはない。今日あるものは、既に生存は出來るものと假定しておいて、それが出來てから後に起つて來る事柄に對しての保障である。即ち所有權相續權等の私法的確立、保護、及び生命身體の安全に對し、又居住、移轉、言論、出版等の自由に對する公法的確立、保護等である。是等はいづれも殆ど至れり盡くせり大に備はつてゐるのであるが、しかしながら、前にもいつた通り。是等はすべて生きることが出來てから後のことで、其の前に生まんが爲めに戰はねばならず、又戰つても刀折れ矢盡きて如何ともすることが出來ず又始めから戰ふ力さへないものには、所謂二階から眼藥で、風馬牛相及ばない感がある。それればかりでない、なまじいそんなものが見せ付けられて焦らされるばかりである。つまりメンガーがいつてるやうに（同書一九三〇頁）近世法律は既に生存することの出來るものを保護するの法律で、生存の難しいものを保護するの法律でない。リチーが其『自然權利』に於いて、生命權を論じて未生兒の權制までをも說きながら、多くは死刑とか、自殺とかいふ點についてのみ詳論して、如上の意味に於ける生存權に密に觸れる處があつたのは、『自然權利』第三版一九一六年版一一九―一三四頁）、やはり近世法律に囚はれ過ぎた見解であるといはねばならぬ。生存することの出來るものを保護するのは、其生命共者の內實的價値及其尊嚴といふことゝ、それの團體に及ぼす效果といふことと、此等二つの根據から來てゐるのであらうが、果して然らばそれ等の同一の根據は、生存の出來難いものをも保護する立法の原理とならぬであらうか。

最後に第四には近世の文化民族の國家のすべてが既にやつてゐることで、それを徹底すれば、自然に生存權を認めねばならぬやうになるといふ根據である。此點はメンガーも幾分之を說かないではないが、それよりもシュタインが最もよく之を論じてゐる點である。（哲學の光で見だる社會問題。八九七。六一六―六一七頁）それは今日の文化民族の國家は何處でも墮胎及嬰兒殺等を嚴刑を以て禁止してゐる。是はそれによつて各國家は可成其勞働力と國家の防禦力とを增加

し、常に青年の氣分を持して、國家をして老ひざらしめんが爲めである。親は必ず子供を生んでならぬといふことも勿論ないが、又必ずそれを生まねばならぬといふ義務もない。さりながら既に宿緣があつて小供を胎內に宿した以上は、最早親の自由でそれを處分することは出來ず、必ず生命を與へてやらねばならぬ。卽ち國家は法律の力によつて胎兒の權利を認め、胎兒は必ず產まるべきものにしたのである。此の如くにして國家は胎兒の生命權を認めた以上は、既に生れた小供に對して其生存權を認めてやるのは當然であつて、それを認めないのは不徹底であるといはねばならぬ筈である。卵は之を保護するけれども、雛は之を構はないでは理論が徹底せぬ。今日の文化民族の國家も無論其雛を全く看却してゐるのではない、其親に對して幼兒、未成年者の養育・敎育の義務を負はしめてゐる。其點からいへば暗默の中に未成年者の生存權が認められてゐるといつて可い譯である。しかし親の方からいへば、彼等は其義務を負はねばならないから、到底其義務を果たし切れないといふ考のあつた際には、墮胎なども亦全く已むを得ないといふ論に落ちてゆくやうであるが、それは國家から嚴禁されてゐる。そこに矛盾がある。重ねていへばその矛盾といへば、國家は墮胎、嬰兒殺等を嚴禁してゐる點から觀て、一方では生存權を認めてゐるやうであるが、生れてから後の養育、敎育の義務は自分で之をせずに、親にさせてゐるといふ點からいへば國家は生存權を認めて居らぬやうであるといふ矛盾である。そこで墮胎や嬰兒殺を嚴禁するといふ原理を、既に生れた後の子供にも適用するやうになれば、此矛盾に消ゆることになつて、生後のものにも生存權を認めるといふことになるのである。今日の實際問題としては、到底小供を養育したり、敎育したりする餘力のない親達の小供は之を如何にすれば可いかといふ問題となつて來るであらうが、卽ち一の特殊問題となつて來るであらうが、しかし其根柢には一般的な生存權といふ觀念が裏付けられてゐなければならぬ筈である。

以上の四點が、先づ生存權の社會哲學的根據であるやうに思ふ。

四

以上を生存權の根據であるとして、私はそれについて更に論究して觀る積であるが、それをば猶少しく後へ廻はして其前に所謂經濟的根本權利の他の二つ、卽ち勞果全收權及勞働權に對する生存權の關係について論究して觀たいと思ふ。しかし其中で、勞果全收權との關係については、私は前節に述べた所のメンガーの所說以上、只今の處あまり多くの議論を有つてゐないから之を略して、專ら勞働權との關係について述べて見たいと思ふ。

既に述べたやうに、メンガーは生存權と勞働權とを區別して、生存權は自己の勞働作爲に對し、直接に生活需用の滿足を國家又は自治體に向つて要求するの權利であるが、勞働權は、人が如何にしても個々人の私的企業家から仕事を得ることが出來ない際に、始めて行使し得るの權利であり、第二には前者は未成年にも勞働不能者にもある所の權利であるが、後者は唯勞働有能者にのみ許され得る權利であると述べてゐる。先づ未成年者、勞働不能者、概括的に到底自分自らで自分の生活資糧を得る能はざる人についていへば、若し生存權が認められたといへば、其生存權は此等の人々の上に最も顯著に表現される譯である。何となれば彼等は勞働といふ對立作爲（ゲーゲンライスツング）をなさないでも、猶其生存を續けて行くことが出來るといふのは、全く彼等に與へられた生存權の御蔭であつて、其場合には其生存權が最も簡單な、又或る意味に於いては最も純粹な形を表現したものといふことが出來るからである。此際に於いては明かに勞働權と區別される。しかしさうした場合でも、勞働權は可能狀態に置かれてゐるものであるいふことが出來る。卽ち未成年者や勞働不能者等は、現在は勞働權を有つてゐないが、未成年者が成年者になつたり、病人又は虛弱な人間が健康體になつたりした場合には、彼等も當然勞働權を享有し得るとすれば、それを事實有つてゐない現在の狀態は、勞働者が現實狀態にならずに、可能狀態になつてゐるといはれ得る譯である。兎に角勞働不能者の場合は、一通り勞働權を區別された生存權が最も明かに表現された場合であるといへるが、十分勞働の出來る人に對して考察すると、生存權と勞働權との區別が甚だ明瞭を缺くやうになる。それでシュタイン（前出書六一七頁）や、ヲルフ（社會主義九一二頁）やがメンガーの生存權の定義であるとして只此の幼兒に對する養育及敎育と、老、病者、不具等の勞働不能者に對する一時的又は永久的保護

が生存權であるといつてゐる一節のみを擧げてゐるのは、メンガーの全體から云へば其誤解であるといはねばならぬ。よし誤解でないまでも不備であるといはねばならぬが、しかしメンガーの論述の中に、さやうに誤解され得る契機はなくはない。そこでヲルフは今日認められてゐる所では生存權は酷しい饑餓の權といはうとよりも、むしろ病弱の權といふべきであると斷じてゐる。（前出書九三頁）。是は生存權は病弱者、幼兒等勞働不能者の場合には判然と其姿を表はして來て、直ぐ何人の眼にも付き易いが、勞働有能者の場合になると、所謂勞働權と混同して來るから、そこで自然生存權といへば勞働不能者の養育保護であると理解されるやうにするのである。此點からいへば生存權問題は、それが實際問題になると、救貧問題となつて來るのは自然の徑路であるやうに思はれる。

　しかしそれが勞働有能者の場合になると、事情が全く異つて來る。假りに生存權が一般的に承認されて、それが一般的の立法原理とされたとする。しかし如何にそれが認められて、その原理で組織された社會が出來上つたにしても、自分は全く坐してゐて、すべて他人から養はれてゐて可い筈はない。若しそれが可ければ、その社會には坐して養はれてゆく人と、働いて養つてゆく人と、二種類の人が出來る筈である。其場合養はれてゆく人はそれで滿足ならんも、養つてゆく人は不平であるに相違ない。それ故に徹底的に生存權の認められてゐる社會でも、働かねばならぬ筈である。否意味の取り方によつては、生存權が認められてゐる社會であるから、働かねばならぬともいへる。フーリエーが自然狀態に於いては、野蠻人は漁、獵、果實の收拾牧畜の權利を有つてゐたが、自然が既に占有されてゐる社會狀態に於いては、此等の四根本的權利を行使する譯に行かぬ。そこで其等に代るべき等價の新しい權利が現れて來た。それは外でない、勞働權或は最少限度の生存權であるといつてゐるとメンガーは述べてゐるが、（同書一六頁）、フーリエーの此說は人間は生きんが爲めには、如何なる場合でも働かねばならぬものであることを示したものであるといへる。即ち自然の資料が既に他人によつて占有されてゐる社會狀態に於いては無論、猶天與の物資は饒多で、それに人口が甚だ少い時代でも、生きんが爲めには、猶やはり或は漁獵をやつたり牧畜をやつたり果實を收拾したりする仕事を爲さねばならぬことを說いたものであるといへる。それ故に如何なる場合に於いても働かずに生きてゆける法はない。猶生存權は働ける人でも働かずに養はれてゆく權利だとすると、誰か苦んで働くものがあらうぞ。働くものがなくなつて、それで何うして人々を養つてゆく資料を得ることが出來やうぞ。だからどうしても生存權を、働ける者でも働かずに養はれてゆく權利と解釋することが出來ない。のみならず、權利は其半面には必ず義務を伴つてゐるものである。權利が表なら、義務が其裏であり、又義務が表なら權利は其裏となつて居り、權利と義務とは必ず相表裏の關係をなしてゐるものである。さうでなかつたなら權利と義務との概念は成立たない。此抽象論は、權利、義務の關係の殆どあらゆる場合に適用されるのであるが、之を彼の生存權と勞働權との場合に當篏めて考へると、個人は既に國家に對して生存權を有し、國家はそれを認めて彼の生存を全くさせる義務を負つてゐるとしたならば、其當該者は、自己の生存權を享愛すると同時に社會又は國家に對し、勞働の義務を負つたものであるといはねばならぬ。かくて生存權といふ者は、勞働の義務といふ裏付を得た譯になつて、生存權の意味が始めて判然と確定されることになる。それだからメンガーはフーリエーは生存權勞働權の二概念の區別を沒却してゐると非難してゐるけれど、（同書一七頁）しかしそれは寧ろ言過ぎである。兩者は概念としては無論異つてゐるが、しかし互に甚だ近密な關係を有つてゐる。つまり右といへば左を豫想し、上といへば下を豫想するが如きものである。唯生存權に對して、勞働權といつて、それを權利であるかのやうに說くのは謬見で、それはむしろ前述の理由によつて勞働の義務といふべきである。此點からいへばメンガーは自分で言て置きながら、しかしあまり判然と論述してゐないやうに見ゆる所の『アメリカの共產村は予が既に生存權として擧げた所の權利と義務との和合を規範としてゐる』（同書一五八頁）といふ言は、生存權と勞働權との關係を最も明瞭に表はしてゐる言であるといはねばならぬ。かやうに考ふれば勞働は權利でなくて義務であつて、生存權を裏付けてゐるものである。前にも述べたゴツトキンの交易主義（レンプロシヤー）（政治的正義論）やカベー及ルイ、ブランの『其需用に從て各人へ、其能力に從て各人から』の主義の如きものは皆此生存權と勞働義務との一致を意味してゐるものと解釋することが出來る。

しかし、生存權と勞働義務との一致といふことは、生存權が徹底的に行はれてゐる社會を豫想しての上のことであつて、それが完全に行はれてゐない今日の社會に於いては兩者の十分なる契合を見ることが出來ぬ。而して又私有財產制即ち私法上の所有權といふものが儼存してゐる今日に於いては、勞働は義務と觀るよりは、やはり權利と觀念する方が妥當なやうである。何となれば勞働を義務なりと觀て、それを果たさうとしても、唯だ勞働力ばかり有つてゐて、それを活現せしむべき土地と資本との方便を有たぬ所の人は、到底それを果たすことが出來ないから。そこでそれを權利と認めて、メンガーのいつてゐるやうに個人の私的企業家から仕事を得る能はざるものに、國家が仕事を授けて、その權利を行使せしめるやうにすると觀るのが穩當な見方であるやうに思はれるからである。さうすると、その勞働權なるものは、今日の實際上の重なる問題としては、所詮は所謂失業者の問題といふことに落ちて行くやうに思ふ。

要するに生存權の觀念は、勞働の義務又は權利に密接に關係してゐるもので、勞働不能者に對しては兩者は判然と區別されるけれども、勞働有能者に對しては、兩者は屢混同される程に密接してゐるものである。

五

次ぎに生存權と所有權との關係について論述しなければならぬのであるが、是は他の議會に一題目として詳論して見たいと思ふから、姑く之を省き、直ちに自然權利としての生存權其者の性質について論じ。以て此稿を終りたいと思ふ。

生存權は勞果全收權、勞働權と相並んで、經濟上の三大自然權利であると理解されてゐる。是は全く詰らないものではないのは無論であるが、しかし重に一部有產階級に利なものであつて、無產者階級から觀れば其內容甚だ空疎であつて、それ程難有いものでない。然るにそれにも拘はらず格外に尊重されてゐた。しかし今日はそんな內容の空疎なものよりは、それの充實されてある、經濟上の根本權利の享有行使に向て叫ぶやうになつたといふ程のことを述べてゐる。(同書五頁)。

而してそこに謂つてる所の根本權利とは、所謂自然權利を意味してゐるのである。(同書二八頁)。「近世法理學は生具的若しくは自然的と、後天的と二種の權利を區別する。前者は人間の生存に卽して各人に存してゐる所の權利をいひ、後者は契約、相續、其他法律上の事實によつて、特に各人に對して建設されねばならぬ所の權利である。勞果全收權(而して同樣に生存權も亦)明かに第一題に屬してゐるものである』新國家論三三頁及九五頁)。

そこで此處で問題としたいのは、此の如き生存權といふか如き自然權利なるものが果して存在するか否か。若し存在するとせばそは如何なる意味に於いてであるかといふ點である。今その問題を論究する前に、自然權利の概念について一言せんに、若し權利といふ概念を唯單に成法(ポジチーヴ・ロー)によつて與へられたるもののみを意味するものと限定したならば、さうした意味の自然權利といふ概念は成立する筈がない。しかし其成法に何を標準として出來てゐるものであらうか。歷史派はそれは國民精神であると答へる。しかしそれはさうでない。國民精神は法律の內容を形成する材料に過ぎぬ。その材料だけでは法律は出來ぬ。何かの標準に照してそれが整理され、精錬されることによつて法律は始めて生ずるものである。其標準は何であるか、それが卽ち自然法律である。その自然法律が尺度となつて、それに從て國民精神が裁縫されて成法が出來上るのであり、又其自然法律を嚮導觀念とすることによつて、成法は變遷進步するものである。シユタムラーが此自然法律なくば、如何にして甲乙の二成法の優劣、若しくは價値を比較し、判定することが出來やうぞと論じたのは(經濟と道德)、全く如上の意味から、若しくは如上の立場からいつたものである。既に自然法律がありとすれば、それから與へられる自然權利の存するのも當然のことで、何等疑を容るべき餘地のあるものでない。固より其自然法律及自然權利は理想的なものであつて現實的なものでない。それ故に自然權利の全姿を卽刻此に示現して欲しいといはれた處で、それは何人にも出來る筈がない。自然權利は人類のあらん限り、その發達の歷史中に段々に現はれ來るべき筈なものであるといつておきさへすれば可いのである。

さて右の如く自然權利を理想的なものと解し、生存權は一種の自然權利であるとすれば、其生存權なるものも亦理想

的なものと謂はねばならぬ。其生存權が理想的權利であるといふ意味は然らば如何なるものであるかといふに、それは生存が吾等人間の權利とあると認められる根據、又は理由は、それが或る理想を實現する所に存するといふ意味である。吾等人間の生活は、唯單に此肉體的生活を生活してゐるといふだけでは、何等の意味もない價値もない。單に肉體的、生理的生活ならば、啻に吾等人間ばかりでなく、動物でも、否植物でも、皆之をやつてゐる。從て單なる肉體的生活を、特に人間的生活卽ち人間相當（メンシエンウエルデッヒ）の生活といへる筈はない。その單なる肉體的生活が、眞に人間的生活らしい、意味ある價値ある生活となつて來るのは、それがある理想を實現してゐるといふ處から來るのである。動物も植物でも、自己保存の本能を有つてゐるのは事實である。しかし其本能其者が直ちに權利の根據となるものでない。吾々人生が自然權利としての生存權を有つてゐるといふのは、その肉體的生存を通して、或る理想を實現するといふ處に存するのである。然らば其理想は如何なるものであるか。前に述べた通り、理想は一時に其全姿を表はすものでなく、人類の永久的な歷史を通して漸次にその姿を表して來るのものであるから、直ちにそれを何であると說き難い。或は之を人類一般の幸福であるといふ人もある。しかし幸福といふ語は間に多義な語であるから、意味の如何によつては幸福でも可いかも知れぬが、しかし普通に解釋されてゐる意味ならば理想は幸福でない。それよりも理想は文化の創造であるといつた方が適當である。個人として國民として特殊の意義ある文化を創造するのが理想である。此理想は絕大な力を有つて一切のものを生々存續せしめてゐるものであるが、人間以外のものはそれを自覺してゐない、唯人間のみが自覺してゐる。中庸に誠は天の道であつて之を誠にするのは人間であるといつてゐるは全く此主義に外ならない。かく人間は理想によつて促進されてゐることを自覺してゐるから、そこで人間にはゾルレンがある。それ故に生存といふことも徹底的に考察すると、權利であるよりも、理想實現に對する義務であるといへる。ヲルフが生存權は其根底をいへば權利でなくして『文化義務』といつてるのは、(社會主義六一四頁)、蓋此意味であつて、實に要領を得たものである。

生存權は此の如くにして其意味を有つてゐるものであるから、所有權が絕對不動なものでないやうにやはり絕對不動なものでない。其國民、其社會、其歷史、其事情等種々の條件に制約されて、色々に其姿を表はすものと見做なければならぬ。今日の孤兒院、貧民院、養老院、失業者保護等は、生存權の今日に表はされた姿である。

(大正八、一二、三稿了)

人間の義務と其他

武者小路實篤

一

人間には實にいろ〳〵ある。

主觀的に云ふと、崇拜すべき人と、尊敬すべき人と、愛すべき人と、親しむべき人と、同情すべき人と、憎むべき人と、輕蔑すべき人と、卑しむべき人と、などがある。

又さうはつ切りしない多くの人がある。しかし少くも、人間の性質は同一ではない。

同一の性質の人は一人もないと云つていゝ。こゝが又面白い處ではある。しかし個人々々を見ると隨分淋しくなることもある。しかし全體として見る時、それも反つていゝのかと思ふ。ともかくいろ〳〵の人がゐる。そして何處へ行つてもその人は自分の肉體や顏をもつて歩くやうに性質ももつて歩いてゐる。可笑しい程甲はいつでも甲で、乙はいつでも乙だ。何を見ても、何をしても、何を云つても、甲は實に甲らしく心を動かし、乙は乙らしく心を動かす。よくもきめられた軌道を通るものだと思ふ。

甲はいつでも甲で、乙はいつでも乙だ。どんなにいゝことをしても、悪いことをしても甲は甲以外には出られず、乙

あると云ふ反省を對峙せしめてゐる。マルクスの流を汲める社會民主々義を支配せる幸福に關する原則にも亦た之に等しき陳套を發見するのである。

二

至全なる幸福は當に至全なる對象の觀想から生じなければならぬ。而も美と德とに優りて完全なるものありや。而して萬有のそれに等しき美、若しくは眞正不變の實在たる神性の仁愛及び公正に比較し得可き德を那邊にか發見し得可き。若し斯くの如き觀想の快感を減殺し得可きものがあるとしたならば、そは吾人からして是等の美と至善との最大部分を隱蔽する吾人が能力の狹少若しくは是に於て吾人を敎養す可き十分なる時を許容することのない吾人が生命の短少に存しなければならぬ。人類に取つて永遠の事業たる可きものは不定假現の現實世界をして道德的世界（Die moralische Welt.）及び美の帝國（Das Reich des Schönen.）たらしむるに存するものである。「二つの物は之に就て沈思すること愈々多く且つ長ければ愈々新たに且つ脹大し行く嘆美と崇敬とを以て心意を滿す、吾人を蔽ふ星斗爛たる天と吾人の內に存する道德律とは是である」。

凡そあらゆる物は悉く勞働に對して賣却せらるゝものであるが、人は啻に外界の自然に對するのみならず、彼れ自身の上にも亦其勤勉を導かなければならぬ。彼れにして若し自己を圍繞する障害を克服せんことを欲したならば、彼れは須らく自己の才能、心意及び肉體を改善しなければならぬ。我れ等の了解する「勞働」は單に現代に於ける經濟學者の云ふが如く外部的結果を生ずるを目的とした人間（マカロツクの如きに至ると人間以外に、下等動物、器械若しくは自然的要素をも含めてゐる）の能力表現又たは障害克服の盡力と結合した財貨取得、即ち經濟價値の形成を目的とした行爲のみに止らない。啻に外界と一定の關係を有する肉體的勞苦と等しく、內部の心理的作用のみより成る心知的のものをも亦た包含するものである。從つて又た吾人の領有せんと努力する「財貨」は單に占有し得可き外部的物質的の欲望滿足資料にして、併せて經濟的商量及び行爲の目的物たるものを意味するものでない。第十八世紀の英國哲學者の謂ふが如く、吾人が心意の內部的滿足、吾人が肉體の外部的利益及び吾人が自己の勤勉及び幸運に由つて取得し占有せる物の享樂の一切を包括するものである。「希望と歡喜とに對する性向は眞の富である、恐怖と悲哀とに對するものは眞の貧である」。

「財貨（goods）」は「善（good）」でなければならぬ、而して事物は單に快樂若しくは苦痛に關聯して善、若しくは不善と爲るのである。「善」とは吾人の內部に快樂を惹起し、又たは增加し、若しくは苦痛を減少し、或ひは或る他の善の領有若しくは或惡の缺無を取得し、又たは維持するに適せるものを謂ひ「惡」とは之に反し、吾人に或る苦痛を誘起し、又たは增加し、若しくは或る快樂を減じ或ひは又た或る不善を取得し、若しくは或る善を吾人より奪取する傾向あるものを名附けて謂ふのである。

洵に快樂及び苦痛並びに之を招致する善及び惡は吾人が欲情の廻轉する樞機である。或る物の現在の享得が必ず之と共に歡喜の觀念を導く可きものと認識せられた場合に、其の物の存在せざるに由つて、吾人が自己の裡に見出した不安は即ち吾人が「欲望」と稱する所のものであつて。そは又た不安の大小に從つて大小あるものである。人間の勤勉及び活動に對し主要なる刺戟たるものは不安である、即ち縱し如何に善美なるものが提示せられたとしても、若し其の缺無が何等の不快若しくは苦痛を隨伴することなく、人は之を有せざるも尙ほ安易にして滿足せりとしたならば、之に對して何等の欲望なく、又た之を求めんとする何等の盡力も起つて來ないが爲めである。欲望は又た提供せられたる善の不可能性又たは不到達性を認むるに由つて不安が癒治せられ、若しくは緩和せらるゝ限り、是に由つて停止若しくは減殺せらるゝものである。假令ひ太陽中に多量の金の存在することが發見せられたとしても、一般地球上の人民は之に對して何等の欲望をも感じないが如きは是である。

經濟行爲發動の原因は欲望である。而して之が目的は其の滿足である。經濟上の欲望とは外界の財貨を得んとする不安の狀態であつて、這個の欲望を滿足す可き手段方法を講ぜんとして人類の經濟的活動が起るのである。而して人類の經濟的生活は未だ滿足せられざる欲望に始まり、其の滿足を得んとする盡力之に次ぎ、欲望を滿足せしめ得可き財貨の占有を經て、遂に滿足せしめられたる欲望を以て一段落を來すものである。然しながら「時」は萬物の貪食者（tempus edax rerum）である。無限の創造力を有する「時」は亦た無限の破壞力を有して人類の享得せる物質物體を破却し去るのである。人類は更に新たなる物質物體を得て常住不斷再起し來る其の所要を補ひ、更に進んでは次第に其の數を增し、其の量を加へ、併せて又た其の質を變じつゝある所要に充てなければならぬ。

勞動問題批判

三

S 30
68

勞働組合と同盟罷工

慶大教授　高橋誠一郎

見えざる力の畏しき影が見えぬながらに
我等の間に浮動する
（シェリー）

一

巴里講和會議に附隨して行はれた國際勞働法規の決議は其一箇條として、勞働を以て貨物又は商品として認めざるの大原則を宣明してゐる。然しながら此紙上の宣言が事實として公認せらるゝのは何時の日であるか。國際聯盟に加入せる各國、殊に我國に於て事實と爲つて現れるのは何時の日であるか。

人格的奴隷は解放せられた。土地に對して不可分の關係を有してゐた隷民は解放せられた。然しながら「貨幣價値に依つて一切の物の量定せらるゝ所に在つては(Omnes omnia pecuniis

metiuntur)」貨幣の紲に束縛せらるる奴隷、貨幣の笞に鞭打たるゝ奴隷は戰慄す可き程度に於て存してゐる。完全なる解放は一切の所得主體が悉く皆勞働者と爲つた社會に於てのみ獨り期待し得られるのである。完全なる自由は一切の所得形態が悉く皆勞働所得と化した時代に於てのみ獨り期待し得られるのである。(誤解を免れるが爲に附言する、私の謂ふ「勞働者」は決して肉體的勞働者のみでない、私の謂ふ「勞働所得」は所謂「賃銀」のみを指すものではない)。國際聯盟に加入せる歐米亞の諸國は孰れも皆、强力に依つて他人の勞働を略取し(是を今日の言葉で言へば「貨幣に依つて他人の勞働を購入し」と爲る)、而して是を以て其特權と看做す者の存する一方に於て、他方には又此强力に屈從し、其勞働を絞取せしむるを以て自己の義務と看做す者の存する社會である。遊惰無爲にして放逸なる奢侈、鄙陋なる快樂に耽りつゝある階級の存する所には必ず奴隷制度は存するのである。戰勝の光榮に誇る資本主義の國々に階級としての勞働者の滅止、貨幣所得の消失を望み得る將來は遠い。

勞働者なる特殊の階級が「事實」として存在するならば、而して其消滅が遠い將來に屬するとしたならば、勞働が完全に商品として取扱はるゝを免るゝの前に於て、先づ最も有利なる條件を以て販賣し得る貨物たらしむることが必要である。而して勞働者に對して、其地位の改善が今日の國家、現在の社會制度の下に在つて、如何なる程度まで克く之を企圖し得可きかと經驗せしむることが必要である。現在の社會制度に對する最終審判の日は將に來らんとして、而も容易に到らない。勞働問題は今日の問題である。現在の麵包に窮しつゝあるある者に社會改造の高遠なる理想は何等の價値もない。今日の勞働者は先づ彼等が唯一の所有たる其勞働を出來得る限り高價に販賣し得る所以の道を求めなければならぬ。勞働問題は今日と雖も猶ほ第一に「胃の腑の問題」(eine Magenfrage)であり、純然たる肉體的安慰、若しくは有形的生存に關するものである。

二

ウォリアム、トオマス、ソオントンの On Labour. が初めて公にせられたのは一千八百六十九年のことであつた。洵にピイルソンの所言の如く、それはまだウォリアム、スタンレー、ジェヴオンスが其 Theory of Political Economy を書く以前 カアル、メンガアの Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. が現るゝ以前のことであつた。隨つて經濟價値の學說は著しく未發達の狀

慨がある。

而も勞働組合の更に重要なる職能は其產業上の勢力を增進し而して組合員の所得を增加せんことを求むるに在るのである。勞働組合の行動は此點から觀ると二個の項目に分つことが出來る。被傭の條件を標準化せんとするの企圖と作業を限定せんとするの努力とである、第一の項目の下には標準勞銀率及び正常勞働時間の確保を得んとするの努力を擧げなければならぬ。今日の經濟組織の下に在つては勞銀は企業家に依つて其貨幣資本から支拂はるゝものであつて、其生產費の一部を形成し、其之に當つる部分は全く生產物の價格に依頼するものである。即ち勞銀增加の可能なるは生產の總收益を增加するの可能なるや否やに依るものであつて、後者の增加不可能なる場合には勞銀の上騰は單に企業家所得の失費に依つて行はれ得可きのみである。而も斯くの如く企業家利潤の失費に依つて勞銀を增加するは事情の特に勞働者に利にして、企業家に不利なる場合に之を實行し得可きものであるが、此種の一般的勞銀引上げは勞働者の側に於て共同的行動を取るの困難と資本市場の廣大なるとに由つて其實行の機會は頗る乏しきものと爲る。加之、毫も企業家所得を減殺せずして勞銀を增加し得可き場合と雖、之を引上げなければ同じ額だけ企業家所得を增加し得る所以であるが故に、勞働者は相互競爭して企業家と「個人的契約」を締結するを避け機敏に自己の利益を獲得せんことを努め、多數團結して所謂「團體的契約」の手段に依つて之と勞働條件を協定し、企業の好地位より生ずる利益を自ら利用し得たる場合に於て勞銀の增加は漸く可能と爲るのである。標準勞銀率は必ずしも勞銀の畫一を意味するものではない。畫一は單に同一の仕事に對する同一の支拂に求めらるゝのみである。標準は最低のそれである、最高を畫せんとするのではない。此點に於て幾多の工業に於ける勞働組合は往々にして個數勞銀を主張するのである。要は最低標準の維持と引上とに在るのである。之に反して正常勞働時間の確定は最高を畫せんとするものである。過超時間の勞働を許す時は企業家は軈て定時外の勞働を甘んじて行はんとする者のみを使傭するとと爲り、終には各時間に對する支拂は必然減少するとと爲るのである。勞働時間短縮の企圖は實に勞銀の標準を引上げんとするの企圖に外ならない。吾人は茲にも社會の資本主義化が產んだ現代生活畫一化の一面を觀るのである。

勞働組合が作業を限定せんとするの努力は職業に對する權利の主張、徒弟年期の制限及び生產高の限定と爲つて現れる。第

一の主張からして往々組合と組合との間に紛爭を生ずることとなるのである。第二の制限から過長なる徒弟年限の主張、徒弟數の限定又は新加入者に對する多額の入組合料の徴收と爲るのである。而して第三の點から屢々新機械新技術の使用に對する反對が起る。而して其異議が棄却せられた時、彼等は往々にして「ノロノロ政策 "go easy" 又は "ca canny"」に依つて作業の高を制限せんとするのである。而して此古い蘇國の俗語から出たカ、カンニー政策並にそれから源を發した佛國の消極的サボタージ Sabotage perlé 卽ち「惡しき支拂に對する惡しき仕事」の思想から來た Travailler à coups de sabots、木靴(sabots) 履きの遲鈍なる勞働者の如く働くに依つて最少可能なる勞働の高を提供するの行爲からして、進んで積極的サボタージ、卽ち企業家の資料又は器械に對して損害を與ふるの擧に出づることがある。サボタージの諸形式中佛國刑法を以て所罰し得るは是等有形の損害のみである（第四百四十三條）が、それさへ實際に適用されたことがない。斯くて又彼等は組合員外の勞働者を迫害し、米國などで主として行はれるやうに組合勞働者の手に生產せられた生產物に添用する貼紙を發行し、標準勞銀を支拂ふ工場を單に勞働階級のみならず、一般消費者にも推擧するのである。而して其反對に勞働組合の賃銀率を承認しない工場に於て製造せられた商品の販賣を妨害するものは非買同盟である。彼等は又組合に對する忠實の感情を其組合員に鼓吹し、之に背く變節者に對しては往々ボーイコットを行ふのである。是は一般に雇主に對して不忠實なる勞働者を解雇することを要求するの形式を取るのである。而して雇主にして之を肯じない場合にはストライキを以て之を脅すのである。斯くの如くして幾多の訴訟を誘起するに至つた。固より斯くの如くして當該勞働者に加へられた損害は戰慄す可きものである。有ゆる他の工場に入ることを遮ぎられた彼の前途には獨り流浪と飢餓が横るのみである。然しながら法理は組合が單に組合其者並に勞働階級の利益を擁護するを目的とし、個人的怨恨から之を行つたものでない以上は、彼等は法に據つて彼等に賦與せられたる權利の正當なる行使を爲しつゝあるものと看做すのである。獨り斯くの如きボーイコットに依つて其同業者に與へたもののみでなく、ストライキに出つて雇主若しくば第三者に與へた損害に對する組合の民事上の責任如何は頗る困難なる問題である。縱令斯くの如きを以て勞働組合に伴ふ弊害であると見ても、是が爲めに勞働組合其者を抑制せんとするは角を矯めんとして牛を殺

て那邊までを抱有せんとするか。ジードは言ふ「若し電氣及び鐵道の勞働者が同盟罷工を行ふの權利を拒否せらる可しとせば何が故に麵包屋の使用人の同盟罷工をも禁ぜざる。一都市は麵包の供給を缺くよりも、寧ろ燈火の供給なきを忍ぶを得可きである」と他方に於て斯くの如き法規を厲行するが爲めに草案者の揭げたるが如き罰金若しくは禁錮は果して那邊まで有效であるか。同じ佛國經濟學者の言ふが如く勞働者にして無一物なる時は如何にして彼等より罰金を徵し得るか。然らば獄舍か。範圍の極めて狹少なる罷工ならばいざ知らず、如何にして數千數萬の人を逮捕し、裁判し、禁錮するを得るか。然らば解雇か。恐らく是が唯一の有效なる所罰であらう。然しながら雇主及び國家は何時たりとも其勞務を怠り、又は之を拒否せる勞〻者を解雇するの權利を有してゐる。然らば即ち特別法の必要を見ないのである。

同盟罷工は如何なる種類の勞働者によりて行はるゝとを問はず、唯だ單に他の生命財產に直接の危害を加ふる場合に於てのみ所罰せらる可きものである。法律の力は輿論の力を借るに非されば國家社會の存在を脅す大規模の同盟罷工を抑制することは出來ぬ。官僚的政治家は問題の紛糾する每に常に强壓的方策に出でんとする。昔佛王の宮廷に於て、國內の紛爭に國王の倦み疲れたるを見て一廷臣乃ち强壓的方策を提唱して言ふ、「王國を支配するものは唯だ斧鉞あるのみ」と。フランソア、ケネー傍に在つて問ふて曰く「而して、閣下よ、斧鉞を支配する者は何者なりや」と。對手の沈默するを見て經濟學の祖は自ら答へて言ふ「そは輿論なり。卿は輿論の上に卿の行動を始めざる可らず」と。法規も銃劍も獨り輿論の援助を得て之を有效に使用することが出來る。同盟罷工者も亦輿論の同情を得て初めて眞の勝利を得ることが出來る。而して經濟上に於ける輿論を代表するものは一般消費者である。一般消費者の利益は究竟の支配者でなければならぬ。一般消費者の利益を蹂躙して暴富を獲得しつゝある企業家の横行する我國に於て小規模ながら同盟罷工の頻發せんとしつゝあるは敢て怪むに足らぬ所である。利潤の增加せる所に勞銀の引上げを希望するは當然である。勞働運動を拘束するよりも寧ろ之に對して妨害たる規定を廢棄し、其前途に自由を與へることが目下の急務である。（八月十二日夜大磯王城山莊にかて）

(2) 勞働運動の戰術としてのサボターヂュ

山川均

一、日本最初の譯字『怠業』

七月二十三日の新聞には、博文館印刷所の男女職工千五百名は、賃銀三割增其他の要求條件を提出し、若し要求が容れられねば、明二十四日より一齊に『怠業（サボターヂュ）』を行ふと云ふ記事が現はれた。サボターヂュは同盟罷工と共に、資本家に對抗する勞働運動の戰術として、勞働組合によつて正式に採用せられて居る所もあるし、又た實際に於ては、賃銀制度のある所、勞働者が本能的にサボターヂュを行つて居らぬ所はないと云ふことが出來る程ではあるが、我國ではサボターヂュと云ふ用語は、多くの人々には尙ほ耳新らしい言葉であつて、『怠業』てふ譯語の附せられたのも恐らく今回が初めてゞある。多數の勞働者が同盟して、組織的のサボターヂュを行ふといふ報道も、恐らく今度が初めてゞあらうと思ふ。

殊に無意識的、若くは半無意識的のサボターヂュは、實際上には寧ろ同盟罷工に先つて、同盟罷工以上に廣く行はれて居るものではあるが、意識せられたる組織的のサボターヂュ、勞働運動の一戰術としてのサボターヂュは、同盟罷工を以て勞働者の當然の權利と認めて居る人々の間にも、尙ほ非難の聲を聞くし、勞働運動の內部に於てすらも反對が少くない。所が其れにも拘らず、同盟罷工に對しては、何づれの國でも、多かれ少かれ、直接か間接かの壓迫を伴ひ、從つて犧牲を伴ふので、各國の勞働運動は漸次にサボターヂュを採用し、採用せざる迄でも漸次にサボターヂュに對する反對、又は嫌惡の度を少なくする

傾向のある事は、爭はれぬ事實である。そこで今日に於いてサボターヂュの意義と性質とを明らかにして置くことは、最も緊要のことであらうと思ふ。

二、サボターヂュの意義

勞働組合運動の一戰術として、最も廣くサボターヂュの行はれて居るのは佛蘭西であつて、佛蘭西語のサボターヂュは、今日では殆ど世界的の通用語として用ひられて居る。

サボターヂュなる言葉は、サボー（木製の靴）から來たもので、此問題の權威と云はれるエミイル・プウゼーによると、『木靴を作る』ように働らくと云ふ意味ではなく、重い不様な『木靴を穿いて歩るく』ように仕事をすると云ふ意味から來たものである。是より先き、英國では『ゴー・カンニイ』と云ふ言葉が行はれて居つたが、佛蘭西語のサボターヂュも、ゴー・カンニイに則つて造語せられたものであつて、ゴー・カンニイは蘇格蘭語の方言で『ぼつ／＼歩るく』の意である。

そこでサボターヂュの本來の意味は、勞働の効程を少なくすることであつて、此範圍に於ては、怠業と云ふ譯語が當つて居るが今日組織立ちたる戰術としてのサボターヂュは、少しく意味が廣められて居る。アーツァ・ヂオヴァンチはサボターヂュを定義して、次の如く云つて居る。

（一）他に救濟方法の存せざる場合に、傭主より一層有利なる雇傭條件を獲得し、若くば約定せられたる雇傭條件の實行を強制し、又は在來の雇傭條件維持の目的を以つて、一人又は多數の勞働者が、工業界にあつては其生産物の揚がりを遲緩にし、又は減少し、商業界にあつては事業を拘束し、利潤を減少せんとする一切の意識的行動である。

（二）罷工破の就業を不可能ならしめ、之によつて罷工期間中、作業の完全且つ眞實の停止を來たさんが爲めに、永久的の破壞ではなくて、單に一時的に其運轉を不可能ならしめる目的を以つて、生産に要する機械裝置の上に加へる、有らゆる巧妙なる操作

を指すものであると云ひ、『サボターヂュは是だけであり、少しも是れ以外には出でない。故に其れは破壞的ではない。其れは生命に對しても、財産に對しても、暴行とは何等の關係もない。即ちサボターヂュは生産組織體を魔睡させ、資本大王の寶庫を警戒し増加する火と鋼鐵の食人鬼を眠らせて、無害の狀態にする爲めの痲睡藥以上のものでも、以下のものでもない』と云つて居る。

斯ような意味でのサボターヂュは、一八九七年、勞働總同盟のツウルウス大會の問題となつて以來、初めて勞働運動の組織的戰術として承認せられるようになり、今日ではサボターヂュ

と云へば、著るしく佛蘭西的色彩を帶びたものとせられて居るけれども、サボターヂュは佛蘭西の特産物ではなくて、佛蘭西は之をゴー・カンニイてふ名稱と共に、英吉利から輸入したものであつて、サボターヂュは佛國に輸入せられる前に、早くからゴー・カンニイてふ英國風の商標の下に、英國勞働者によつて、組織的に實行せられて居たものである。

其一例は一八八九年のグラスゴウ船渠ストライキであつた。當時船渠人夫は、一時間二錢の賃銀増額を要求し罷工を起したが、傭主側では素氣なく要求を拒絕したばかりか、莫大な費用を投じて、地方から農業勞働者を驅り集めて罷工者に代らせた其結果、罷工は總崩れとなり、從來の條件その儘で全部復業することゝなつたが、愈々復業する時に組合の幹事は罷工者を集めて斯う云つた。

『…諸君は今日、從來の賃銀率で復業しなければならぬ。ところが傭主側では、此數週間吾々に對して罷工破りをして居る農夫の仕事に對して充分滿足の意を再三表示した。吾々は彼等の働き振りを見て、彼等の謂はゆる滿足すべき仕事とは、如何なる種類のものであるかを熟知する。即ち彼等は、ブリツヂの上で重心を取ることすらも出來なかつたこと、又積込み陸上げの貨物の半分は海中に落としたことをも見た。一言にすれば、彼等は二人掛かりで、吾々の一人ぶりの仕事をも能くし得ないことを見た。然るに傭主は、彼等の仕事で滿足して居たと云ふのであるから、吾々にはなすべき一事あるのみである。吾々は即ち之と同一種類の勞働を與へればよい。そこで諸君は農業勞働者のやつた通りに働くがよい。彼等は無能極、海に落ちることとすらもあつたが、勿論、諸君は海に落ちる必要はない』

この勸告は徹底的に服膺せられたが、數日ならずして、傭主は一時間二錢増しの要求に應じたと云ふことである。

此のゴー・カンニイの理論を宣傳する爲めに、一八九五年に出來た一小冊子のうちには、次の如き文句がある。

『諸君が若し、二圓の値打のある帽子を買はうとするならば、諸君は二圓拂はなければならぬ。若し諸君が一圓五十錢だけしか遣ふまいと思ふなら、諸君は下等品で滿足しなければならぬ。帽子は商品である。諸君が若し一枚五十錢のシャツを半ダース買はうと思ふなら、諸君は三圓拂はなければならぬ。若し諸君が二圓しか遣ふまいと思ふなら、諸君は五枚だけ買ふことが出來る。

『然るに親方は、勞働と技術とは、帽子やシャツと等しく、商品に外ならぬと揚言する。

『宜しい、吾々は諸君の言葉通りに解釋しよう。そこで若し勞働と技術とが商品だとすれば、其所有者は帽子屋が帽子を賣り、雜貨商がシャツを賣るのと同じ權利を持つて居る。商人は一定量の價値を、等量の價値と交換に引渡すものである。安い値打に對しては、諸君は品質の惡るいか、さもなくば分量の少ない品物を受けるだらう。勞働者に相當の賃銀を與へよ、彼れは諸君に對して、最高の熟練に於ける最善の勞働を供給するであらう。

『之に反して、勞働者に不充分の賃銀を與へるならば、之れ諸君は彼れの勞働、最善最多を要求するの權利を喪失すること、尙ほ一圓に對して諸君が二圓の帽子を要求し得ないと同一である。』

この平易な言葉のうちに、ゴー・カンニイの理論的根據は充分に盡されて居る。卽ちゴー・カンニイとは、『安からう、惡からう』といふ日常の原則を組織的に應用したものに外ならぬ。斯ようにサボタージュの本來の意味は、安い賃銀に對しては、當然能率の少ない勞働を提供すると云ふことであつた。

斯ようにサボタージュは、一個の組織的運動方法として、早くから、英國の勞働團體によつて主張せられ、且つ實行せられて居たが、間もなく海峽を超えて佛國に渡り、更らにアルプス山脈を超えて伊太利に侵入した。サボタージュが理論に基づく組織的の方法として、初めて佛國に主張せられたのは、恐らく一八九五年であつた。當時全國鐵道從業者組合は、鐵道從業員の組合組織の禁止を目的とする有名なメ!ルラン・ニツラリュ法案に對する反對運動をやつて居つたが、萬一議會が此法案を通過すれば、總同盟罷工を以つて應ずべしと云ふ提案が問題となつて居た。此問題が議題となつた聯合組合大會で、全國鐵道從業者組合の幹事ゲラアルは、鐵道從業員は團結の自由を防衞する爲めには、如何なる手段に訴へることをも辭しないものであつて、若し必要があれば總同盟罷工を行ふの決意ある旨を述べ更らに總同盟罷工に代はるべき、一層巧妙にして廉價な方法に言及し、『……僅かに一錢を或方法で有意に利用すれば、吾々は一臺の汽罐車を運轉不能とする事が出來る』と聲言した。此一語は、旣に總同盟罷工の風說によつて威嚇せられて居た世間をして愕然たらしめた。

けれどもサボタージュは、一八九五年七月二十三日のゲラアルの演說によつて、初めて佛國に現はれたものではない。グラスゴウ船渠罷工に先だつこと六年の一八八一年、中央電信局に起つた次の出來事は之を證明する。

當時電信局員は、午後六時から午前七時迄での夜業勤務に對して、五法の賃銀を受けて居つたが、時の郵電大臣コーシュリイに對して、賃銀倍額の要求を提出して居つた。ところが數日間待つたが回答がない。去りとて罷工は到底不可能であつた。すると或る朝のこと、巴里全部の電信が不通となつた。當時巴里では、未だ電話の架設を見なかつたので、全市の混亂は非常であつた。郵電省からは技師、監督などが多くの工夫を引率して、中央局に出張して有らゆる電信線を檢査したが何處にも故障がない。斯くて五日間を經過して、不圖五法の夜勤の手當を十法にすることに氣が附いた。すると翌朝からは不思議に全線が通ずるようになつたが、故障の原因も故障の個所も、遂に分明しなかつたと云ふことである。

けれどもサボタージュが佛國勞働團體の爲に、理論上からも實際上からも、運動方法の一つとして認められるようになつたのは一八九五年のゲラアルの演說以後のことであつた。

三、歐洲に於ける怠業

一八九七年には、ツウルウズで勞働總同盟の大會が開かれたが、セイヌ縣知事は、市營事業從業者の組合に對して、大會列席の爲めにする暇賜の要求を卻ぞけたので、セイヌ職工組合同盟は組合自由の侵犯と見做して猛烈に反對した。ツウルウズ大會は第一日の會議で、セイヌ縣知事に對する詰責の決議案が提議せられたが、此時エミイル・プウゼーは、『知事は勞働者大會の詰責に何等の痛痒をも感じない。抗議するは行動するに若かず』と主張し、『政府は其本來の任務を完うせるものに過ぎざるを以て、大會は政府を詰責するを無用と認め、市營事業の勞働者が、セルヴス氏の拒否に復ひる爲めに、其勤務に十萬法の損害を生ぜしめんことを勸告す』と云ふ決議案を提出した。

此決議は大會に大波瀾を惹起し、遂にボイコット併にサボタージュ委員會を選んで審議せしめることゝなつたが、委員會の報告書は、資本者に對抗する、同盟罷工以外の方法として、ボイコットとサボタージュを是認したあとで次の如く云つて居る。

『……剩ます所は、如何なる形式の下に、吾々はサボタージュを佛國勞働者に推薦し得るか、の問題である。傭主は常に、吾々の屈從狀態を益々甚だしからしめる爲めには、吾々が從來用ひ來つた唯一の手段たる部分的罷工によつて、其蠶食に抵抗することの、最も困難な時期を選んで居ることは、吾々の熟知する所である。窮迫のうちにあつて、罷工の力が無い爲めに、勞働者は資本家の新要求を甘受しなければならぬ。然るにサボタージュを用ゆれば、勞働者は能く之に抵抗することが出來る。彼等は最早や、全然資本によつて左右せられるものではない。……

『且つサボタージュは一見新奇にして、而かも新奇でない。勞働者は常に、一定の方法こそなかつたが、個人的には之を實行して居つた。彼等は本能によつて、傭主が其要求を增加した場合には、常に其生產を遲緩にした。彼等は知らす識らずの間に『安賃銀に安仕事』てふ定式を應用して居たのである。

『更に或る產業に於いては、出來高拂を以つて時間拂ひに替へて居るが、此代用の原因の一つはサボタージュであつたと謂ふことが出來る……斯くの如く、此の戰術は誰だ散漫に實行せられて旣に効果を奏したなれば、一度び資本家に取つて不斷の威嚇となつた時、何故に、

一層の效果を齎らさないであらうか。

『時間拂ひを出來高拂ひに替へることによつて、資本家はサボタージュを免かれ得べしと信ずるは誤りである。……サボタージュは請負仕事の都合にも應用することが出來る。唯だ此場合には行動の性質を異にする。即ち生産を制限することは、勞働者に取つては其賃銀を制限することであるから、サボタージュは勞働の量に應用せられないで勞働の質に應用せられなければならぬ。又た請負仕事には、勞働者が自宅に於いて自己の原料を用ひる場合と、傭主の工場に集中せられて居る場合がある。第二の場合には、商品に於けるサボタージュと共に設備に對するサボタージュが行はれるものである。……』

委員會は次の如き結論を以つて、其報告書を結んで居る。

『傭主の要求に基づくと、勞働者の自發によるとを問はず、傭主勞働者間に爭議の起つた場合には、そして同盟罷工が所要の結果を勞働者に齎らさないような場合には、宜しくボイコット又はサボタージュ又は兩者を同時に應用すべきものと認む……』

此決議は熱狂を以つて本會議を通過したが、翌年開かれたランヌ大會では、幾多の組合代議員によつて、幾多の實驗が報告せられ、大多數を以つて通過した。一九〇〇年の巴里會議は、ミルランが初めて社會黨から內閣に拔擢され、組合運動界にも政治熱が盛んになり、殊に『社會的平和』の叫びが高まつて、階級鬪爭的の行動は甚だしく非難せられるといふ形勢の下に開かれたにも拘らず、會議は七十六票に對する百十七票の多數を以つてサボタージュを是認した。此大會によつてサボタージュは佛國勞働組合運動の有力なる運動方法の一つとして、理論上からも實際上からも、明白に確立せられるに至つたものである。

四、暴行と怠業の別

斯ようにサボタージュは、本來は、同盟罷工の不可能な場合に、罷工に代へて用ひる方法であつて、此意味に於けるサボタージュは、ヂオヴァンニチの定義の前半中に含まれて居る。然るにサボタージュの應用は一層擴大され、一八九七年のツウルウズ大會ボイコット及びサボタージュ委員會の報告に見られる如く同盟罷工を完全にする補助的の手段として、之に併用せられることが少くない。巴里パン燒職組合の幹事ブウケーは、罷工の補助的方法としてのサボタージュに就いて、次の如く論じて居る。

『單に勞働を停止することは、罷工の目的を實現するに足らぬ場合がある。鬪爭の好果を確保する爲めには、工具、器具、機械其他の生産機關も亦た罷工することが必要である、又た缺く可らざる事である一言にすれば、是等のものを運轉せざる狀態に置くことが必要である屢々罷工破り(スカブ)は工場に入いつて、是等の機械工具等が良好なる狀態にあることを發見する。罷工者は是等の生産機關を健康狀態のまゝに殘

したといふ一大過誤によつて、彼等は致命的に、其敗北の第一理由を殘して置いたものである。……

『斯くの如く勞働の完全なる停止が、眞實のものとなり、豫期の結果即ち工場の活動の完全なる停止を來たし得るのは、傭主と勞働者とが同一立場に立つて、勝負が公平に行はれる場合に限られ居る……』

是によつて見ると、サボタージュを罷工運動の領域內に誘導したものは、傭主側の罷工破りであつたことは明らかである。

然らば罷工に伴ふ機械や工場の破壞等はサボタージュであるかと云ふと、ヂオヴァンニチの定義によれば、是等の暴行は生産機關の永久的破壞であつて、サボタージュとは全然目的を異にするものと謂はなければならぬ。尤も罷工破りの就業を妨げる爲めに是等の暴行の行はれた場合には、之をサボタージュと認む可きか否かは極めて機微なる問題であるが、假りに之をサボタージュと認めるとしても、極めて拙劣なサボタージュたることを免れぬものである。

尤も或種の暴行を以つて、サボタージュと認めて居る人もある。オーギュスト・パウロウスキイはサボタージュを次ぎの四種に分類して居る。(一)傭主には有害にして、消費者には有利なるもの、(二)傭主に有害にして、何人にも直接の利害を齎らさぬもの、(三)暴行の狀態を呈し得るもの、(四)集合的にして暴行に亘るもの、之れである。第三はヂオヴァンニチの定義第二項に當る行爲を指したものであつて、必ずしも暴行とは謂はれない。第四は機械その他の破壞であつて、ヂオヴァンニチによれば、明白なる暴行は即ち暴行であつて、固よりサボタージュを以て目すべきものではない。

五、滑稽な怠業と開口怠業

サボタージュの理論上の根據は、斯くの如く、極めて單純であるが、之が應用に至つては殆んど無限であつて、多くの實例のうちには、隨分罪の無い、滑稽味のあるものが少くない。

一九〇八年の頃、米國のベッドフォルトでは土木工事の親方が來る何日から工夫の賃銀を幾らに減額すると云ふ通知をしたが工夫等は一人も不平を云はなかつた。ところが愈々其期日の前の日になつて、工夫一同は近隣の鍛冶屋へ往つて、一齊にショベルを小さくして、矢張り默つて働いて居た。『小賃銀に小ショベル』之が親方の質問に對する彼等の答へであつた。

或時フィラデルフィアの毛皮裁縫工が賃銀增額を要求して罷工した。傭主の方では、譯なく代りの罷工破りを入れて仕事を續けて往つた。ところが出來上つた毛皮の外套は悉く註文の寸法

働者のサボタージュよりも、遙かに非難すべきものである。勞働者のサボタージュは、單に資本家の銀行勘定を衝くものである。然るに資本家のサボタージュは人間生活の本源を切つて、民衆の健康を破壊し病院と墓場とを滿たすものである。勞働者のサボタージュによつて生じた創口からは、黄金が流れ出るに過ぎないが、資本家のサボタージュの爲めに齎らされた創口からは、人間の鮮血が迸つて、流れを成して居る。更らに勞働者のサボタージュは、俠的な愛他の原則によつて鼓吹せられるものである。其れは傭主の貪婪に對する保護と防衛の楯である。自己と其家族の生存の爲めに鬪ふと同時に、一般勞働者の生活狀態を改善し其解放を目的とする弱き者の武器である……』

要するに、サボタージュを以つて、一般社會に對する道徳上の罪惡として非難するの説は、少くとも一般社會が營利主義の上に立つ間は、到底薄弱な非難たるを免れない。單に消費者たる一般社會に不便を與へるといふ事實は、必ずしもサボタージュの非難とはならぬ。何故ならば、同盟罷工も亦た屢々消費者の不便を伴ふからである。そして同盟罷工も亦た、精密に此理由によつて、曾て社會的罪惡と見做されて居たからである。

サボタージュが、積極的に、消費者に危害を及ぼす實例として、巴里のパン燒職人がパンの中に硝子の粉末を混じたとか、藥劑師が故意に危險な藥品を調劑に混ぜたといふような事實が傳へられて居るけれども、サボタージュの主張者は、斷乎として斯かる事實を否認して居るばかりか、反つてサボタージュの原則に反したものだと云つて居る。彼等の主張によれば、パンに硝子を混ぜるよりも、パンの量目を増すことが一層有効なサボタージュであり、危險な藥品を混ずるよりも、引合はぬほど優良な藥品を使ふことが、サボタージュの本旨である。若し假りに斯くの如き事實があつたとすれば、云ふ迄でもなく最も拙劣にして最も誤りたるサボタージュの應用である。

七　サボタージュの非難

サボタージュに對する最も有力にして、最も傾聽すべき反對論は、サボタージュの實行は勞働階級の道徳的水準を低下し、階級としての鬪爭力を減少し、階級としての創造力を破壊すると云ふ説である。サボタージュは、普通にサンヂカリズムの運動方法と認められて居り、プウゼーの如き、イヴェトーの如きトム・マンの如きヘーウッドの如き實際運動家は多く之を是認して居るが、サンヂカリズムの哲學者と見做されて居るソレルの如き、又はベルトの如き、若くはミシェルの如き人は、何づれも右の此理由を以つてサボタージュに反對を表して居る。ソレルによれば、社會主義の社會は、單に資本制度によつて發達せしめられた生産要點と、技術上の協力によつて發達せしめられた科學とを相續するばかりでなく、長き工場生活によつて涵養し來つた協力の力をも相續するものである。然るにサボタージュは、勞働者の技術上の熟練を破壊し、其專門的の價値を低減する。勞働者の專門技術者たる價値は、現在にあつては勞働者の唯一の富であると同時に、明日の世界に於いては、勞働者が至上權を要求すべき理由とするものだからである。河田嗣郎氏は其近著『社會問題及び社會運動』のうちに、之と同樣の理由を以つてサボタージュを非難せられて居る。

『サボタージュは勞働者をして其業務を怠り、其技術を退化せしめ其精神を麻痺せしむる。そが組織的に永く行はるゝ間には、勞働者の質は退化し、勞働者としても人としても甚だ頼もしからざる、少しも油斷の出來ぬ陰險なる者となるを免れぬ。然るに今サンヂカリズムは勞働者を解放し、勞働者が支配する産業組織を造り出さんとするものである。さるに若し此の將來の社會構成の材料たり棟領たる可き勞働者が、斯く劣惡のものと爲るに於ては、實に之れ腐敗せる材料を以て建築を爲さんとするもので、將來に大いなる堅固の建築を計畫し乍ら先づ以て其材料を腐敗せしむる方法を採ると云ふは、如何にも心得ぬ話である。されば所詮サボタージュは勞働者解放の武器としては不適當なものである。建設的のものたらずして廢頽的のものである……サンヂカリズムがサボタージュの靴を穿つ限りは、サンヂカリズムの將來は闇黑である。之を奉ずる勞働者は呪はれたる者として、自ら敗滅の地獄に向つて急ぐものたるに外ならぬ……』『社會問題及社會運動四二一頁』

河田氏は心理學上の推理から此結論に到達せられたものであるか、若くは實際の勞働運動に於ける、實驗上の事實から此結論に到達せられたかは、固より知るを得ない所である。けれども大體に於いて、サンヂカリズムの理論家がサボタージュに反對し、實際運動家がサボタージュを是認するといふ傾向になつて居る事は注意に値ひする。

然しながら其れにも拘らず、サボタージュは創造的階級として、革命的階級としての、勞働階級の階級的品質を下げると云ふ非難は、サボタージュに對する非難中、唯一の有力なる非難たることを失はぬものである。それと同時に、此非難はサボタージュが社會に對し、若くは資本家に對する罪惡であるといふが如き道德論、感情論を超脱して、純粹に、勞働階級に與へる効果問題に入いつて居ることをも忘れてはならぬ。そして効果問題を決定する場合には、實驗上の事實が最も有力なる發言權を有することは云ふ迄でもない。

八、戰術としての考察の餘地

する見込が立つ。同盟罷工は卽ち資本家と競爭する爲めに職工同志が協力する一方法にほかならない。ナポレオンが衛る最上方法は攻めるにあるといつたのは、人間の本性を見た人の言である。同盟罷工にもこの意義がある。

三、常設產業會議の必要

資本家といふものを產業界から根本的に無くしてしまはうといふ目的で、同盟罷工を辯護し且つ奬勵する人は姑らく之を別問題として、產業には資本と勞働とが分業的に必要であるといふ考へを常識として、或は學說として持つて居る人についていふならば、資本家が全力を、及び全力に伴ふ權力を不正當に利用することが惡である如く、勞働者が同盟罷工といふ手段を濫用することは惡である。眞の意味に於ての正義を資本と勞働との間に維持するために、或は創造するために、已むを得ずして用ゆる方法としての同盟罷工であらねばならぬ。同盟罷工は所謂最後の手段であらねばならぬ。

實をいへば同盟罷工に依らないで同盟罷工の目的を遂げる方法を講ずることが今後の產業界の一務である。常設產業會議を各工場本位、各地方本位、各國本位、及び進んでは國際本位のそれ〴〵の規模に於て造り、勞働者側を代表する、責任ある委員と資本家側を代表する責任ある委員とがその會議の成員であつて、國家が、又將來についていふならば國際組織を代表する制度機關が、或程度の發言權を帶ぶる、同じく責任ある委員をその會議に選出する。かやうにして同盟罷工と同盟解雇とを未發に制し、又既に發したる後にも成るべく圓滿なる解決を急速に齎らす便宜を常設するのである。勿論この產業會議を可能にするためにも勞働者の組合を資本家の組合と同樣に認めることが必要である。然し組合なしでは責任ある委員を選出する便宜がない。

四、勞働組合の總團結

同盟罷工をすればその職工等は一時生計の途を失ふ。持久せずして資本家の軍門に再び哀を乞ふことになる。これを防ぐためには組合が必要である。平素一定の醵金をなし組合員の失業費を辨償してやる。併しながらこの目的を確實にするためには一工場の、或は一地方の勞働者が團結するのみならず、すくなくとも一國の勞働者が團結する必要がある。又各種の勞働組合の總團結が必要である。英國でいふならば鐵道、機關、炭坑、

其他の各種組合の全體的組織を完成することが最近の勞働運動擁護者の一努力となつて居る。一九〇九年に瑞典の總同盟罷業が資本家の總同盟に遇ふて散々な負け方をして以來勞働組合が聊か神經過敏になつて居る。勞働組合の總團結を有力なものに仕上げなければ資本家の同盟の前に敗北するほかないことを豫想して危虞して居る。資本家が本氣になつて相組めば勞働者が普通の程度に協力して同盟罷工を敢てしても、先づ以て資本家の勝利に歸するであらうといふことは勞働運動の最も熱心なる信者が、まじめに心配して居る一事である。最近の新聞社間に起つた問題なども、幾らかこの點に光明を投ずる。

五、國內的罷工より國際的罷工へ

何といつても勞働運動が今尙主として國內的に限られて居ることは爭はれない。平時に於ては勞働運動は國際的色彩を最も强烈に滯びて居るやうに見える。併しながら一旦戰爭的氣運が國際間に動き出す時には、勞働運動の國際的色彩が午後の朝顏の如くに褪せてしまうことは今度の戰爭に於て痛酷に例證された。國際的に同盟罷工を可能にする時代には世界がまだ到達してゐない。戰爭前に白耳義の勞働組合が普通選擧を目的として總同盟罷工をやつた。そして英國の勞働組合に向つて石炭を白耳義へ送らぬやうに同盟罷工することを賴み込んだ。英國の炭坑夫組合はその旨を運輸勞働組合に通達した。けれども結局石炭は滯りなく白耳義へ送り込まれたことがある。今度の戰爭に於ても賃銀を增し時間を減すためには同盟罷業が頻りに起つたけれども、勞働者の平素の主張である非戰論を實行するために軍器彈藥の製造を各交戰國の勞働組合が相呼應したるが如くに同盟罷業するといふ擧には出でなかつた。國際勞働法規には希望を屬すべき點が幾多存するけれども同盟罷工が目下尙國內的規模に於てしか行はれないといふ事實には倫理的に考へても政治的に考へても面白い意味がある。（八、八 五）

■片隅の幸福（生田春月著）近時頓に文壇に其名を宣傳せらるゝ青年詩人生田春月氏の第一感想集にて小品あり詩歌あり日記あり感想ありすべて皆淸楚なる筆に盛れる珠玉の如き散文詩にして殊に十年前十八歲の少年として故鄉にありて東京を慕ひ功名に憧れ〱愛に惱みつゝありし日の手簡日記の如きは愛誦措く能はざるものあり（定價八十錢 東京神田中猿樂町越山堂書店）

廢業することにでもなると、勞働者は失業に襲はれ、更らに或は一旦引上げられたる勞働條件の低下を餘儀なくさるることともなり得る。加之、一般社會特に消費者から見ると、少くとも罷業の當時、物の供給を斷たれ又は其價が暴騰して非常に困ることとなり得る。特に其が必要品又は必要的勤務に關すると甚しい。例之、其ノ麵麭燒業に關し、或は電車、鐵道、郵便電信電話、瓦斯電燈石炭等に關するときは社會は大に困まる。啻に其罷業當時に於てのみならず、此當時の損害が後になつて資本家生産家から消費者に轉嫁せらるる危險が多く、罷業の結果、勞働條件の良くなつた埋合せをも消費者に對する供給價格の中にて得んと努めらるることとなり、斯くて消費者が永久にも不利を被り得る。で恐らく全體上から見て同盟罷業が經濟上有利とはいへない。而かも尚ほ此が承認せらるるのは、前の道義上の理由に因るので、即ち勞働者の正當なる要求を達するが爲めに避くべからざる方法であるが爲めである。道義上の要求の爲めには經濟上の利害を超越して見なければならぬ。

(四)　罷工に因る一面の利益

併し又更らに進んで考ふると、同盟業罷が必ずしも全體上不利を齎らすとも限らない。勿論罷業により其當時、生産の結果を減ずるだけは、勞働者自らも、資本家も消費者も皆な不利を受くるが、斯くて勞働者資本家が不利を受けたゞけ、其後に至つて之を取返へさうとして一層奮勵努力することともなり得る。特に又此罷業の結果として勞働條件の良くなつた場合の如き、資本家としては生産の技術及組織の改良を以て之が埋合せを得やうと努むることとなり、勞働者も其地位の向上を善用して、益々其勞働能率を高めることを努めたならば、或は生産の効果が前の時よりも遥に大となり、勞働者の地位が高まるのみならず、資本家の經濟上の都合も良くなつて、別に消費者に向つて埋合せを求むるにも及ばずといふこととなり、社會の何れにも損害を與えずして、結局、勞働者の地位の改良されたるだけ、又は時に其以上にも永久に利益を齎らすこともあり得る。同盟罷業の結果が常に斯くなることを期することは出來ないが、此もあり得ることであり、隨て此同盟罷業は成るべくは避けた方が經濟上有利であるが、既に此が避くべからずに起つた以上は、之をして斯の如き結果を得せしむるやうに導きたい。

(五)　同盟罷業解決の手段

同盟罷業の結果は時と場合とにより斯の如くに相違を生じ得るから、之を公認するとして、出來るだけ其損害を少くする爲めに、種々の制度を設けなくてはならぬ。第一には其穩健なる方法にて行はるるやう、穩健なる職工組合を認めなければならぬ。第二に穩健なる方法にて之を行ふのは禁制しないが、人の生命財産に損害を及ぼすだけにては、之を處分するの法を設けなければならぬ。第三には出來るだけ速かに爭の解決するやう別に公平なる國家的制度としての仲裁々判制を定めなければならぬ。そして其手續も簡單にし、其裁判も出來るだけ迅速に行はれなければならぬ。又其決定の基礎材料については國家が平生十分に注意して集めて置かなければならぬ。第四には一般民衆の生活に甚しき困難を與ふることあるべき特殊の業務に於ける同盟罷業については、特別の制裁を要する。其他同盟罷業を行ふ勞働者も其重大なる結果に對して愼重に考慮し、敢て輕卒に之を行ふてならぬと同時に、一旦行つた以上は、其よりして良好なる結果の得らるるやう折角奮勵するの覺悟がなくてはならぬ。又資本家も消費者も國家も、同盟罷業については相當に理解して、其相當公平なる解決の一日も早く着くやうに盡力しなくてはならぬと同時に、其結果の有利になるやうにも、努力しなくてはならぬ。又特に資本家としては其を起す必要なからしむるやう、自ら進んで勞働者に與ふべきものを與えなければならぬ。

(六)　罷業を許さゞる官公吏

以上は經濟上に於ける同盟罷業についていふたのである。其について之を承認したにしても、其あるが故に、軍隊や學校などで之を爲して良いとはいへない、營利的ならざる官公署の役人などの同盟罷業の肯定を爲すとも斷じて出來ない。現代の營利經濟の下に、勞働者が資本家に對し、之を爲すのは已むを得ぬ。消費者が生産者に對し非買同盟を爲し、小作人が地主に對し不作同盟を爲すなどゝいふ風に、利害相反する者が相互に抗爭するのは已むを得ぬ。が併し營利關係を持たず、公益上の目的の爲めに統一的に管理せらるる場處にては、純粹に道義上の理想を以て批判しなければならぬ。學生が學校の處置に不滿をいだいて同盟休校するなどは、以ての外の心得違である。軍隊に於ける兵卒、官公署に於ける役人亦然りである。唯だ役人と官公署との間には報償干係があるから、其だけに於て經濟上の批評が許され得なければならぬ。役人の生活の脅かさるる程に報

疑なきを以て論者の如きは勞働者の自覺ある迄偷安の夢を貪るものにして而して不公正の制度の下に永く默々たる生活を送るが如き勞働者は國家の一員としても決して强固健實なるものに非ざるなり。

今假に一歩を讓りて勞働立法に依りて勞働者の境遇を改善することを得べしとするも吾人は尙問題の殘れるものあるを感ず即ち外來の手段に依りて勞働者の境遇を改善するを以て果して勞働者の幸福は增進せられたりとすべきか、勞働者の求むるものは單に境遇の改善てふ客觀的事實にあるや抑又吾人の爲すべきものは勞働者に物質的幸福を與ふるを以て滿足すべきや否や、之實に勞働政策の根本問題たらずんばあらざるなり。

若し人民の安寧幸福のみを以て政治の最高目的たりとせば專制政治は最も適當なるものなるやも知るべからず、然れども人類の歷史は敎へたり、政治の結果のみが人民の求むる所に非ざるなり、政治に參與すると之實に近代政治に缺くべからざる要訣ならずんば非ざるなり、人民の爲の政治のみに非ずして人民による政治は民本政治の眞髓なり、此の問題は政治上に於て既に略解決せられ今日何人も民本政治の眞諦を贊せざるものなきに拘はらず今も尙勞働問題に付て開明專制を主張するものあり、善政主義を是認せんとするものあるは吾人の怪訝に堪へざる所にして勞働政策は單に勞働者の爲めのみならず勞働者に依る運動を認めざるべからざるなり之實に勞働政策の分岐點にして專制と進步保守と自由とは暫らく勞働者の爲めの政治に吳越同舟を繼續し來りしも此に至りて始めて勞働者に依る運動を認むるや否やに至りて吳越舟を異にせざるを得ざるなり、勞働組合に對する問題の重要なるは實に此に在り、勞働問題の根本哲學は此に至りて始めてその眞相を表現せざるを得ざるなり。

（二）勞働問題の最も合理的發達を爲したる英國の歷史に徵するに同國に於ては現代の社會政策に到達する以前に於て夙に個人主義自由主義の時代なるものありて個人人格の權威を宣傳し自由の神聖にして犯すべからざるものなる所以を敎へたりしが「アングロ、サキソン」人種の自立の精神と獨立不羈の美風とは實に此の時代に於て涵養せられたるものとす而して勞働者と雖一般人間と絕對平等の地位にあるものにして既に等しく人間たらんには其の生活の貴重にして忽諸に付すべからず之が爲めに努力せざるべからざる所以亦實に此の時代に於て深く肺腑に穿たれたるものとす不幸にして社會の實狀は自由を與へたるもの自由を享有すべき境遇を與へず人生の貴重なる所以を敎へたるも之を修養すべき機會を缺きたるを以て遂に國家の保護と干涉とを要求するに至り國家政策の變轉を齎らせるものとす既に此の如く自覺あり訓練あるを以て社會政策の實施はよく其要求に合し本旨に副ふことを得たるものとす、例へば十時間運動の請願に於て心身の疲勞を休養し智識的發達を爲すが爲には十二時間の勞働を十時間に短縮することは目下の急務なりと曰へり此の如き要求ありて始めて短縮せられたる時間は之を活用するを得べく賃銀の値上は之を其の所に用ふることを得べきなり之を要するに歐米に於ける社會政策は之に先ちて個人の自覺と準備とを有したりしものにして此の如くにして勞働立法の實施は其效果を發揮すべきなり

翻て本邦を見るに本邦現代の社會政策は勞働者の要求に依るよりは寧ろ爲政家が時代に順應し社會の要求を慮りて案出せるものにして之が實施の前に於て勞働者に自覺あるなく又精神的準備に缺くるものあり此の如くにして制定せられたる勞働立法は果して勞働者に依り活用せらるゝことあるや否や頗る疑なきを得ず勞働者保護の社會政策は却て其本旨に戻るの結果を生ずることなしと云ふべからざるなり之れ實に社會政策の實施に當りて最先に考慮すべき重大の問題なりとす。

斯の如く我勞働者に自覺少く訓練乏しきは一は其敎育の足らざるの致す所にして此の點に於て義務敎育を徹底的に實施すること頗る必要なりと雖一般に我敎育及行政の方法の之を然らしむるものあるを感ぜざるを得ざるなり、即ち我敎育も行政も外界より命令と權力と注入とに依りて事を爲さんとすれどもかくの如きは徒に形式を整へ統制を裝ふことを得べしと雖徹底的に其敎ふる所を體得せしむるに足らざるなり之れ我國傳來の後見的政策(Paternalism)の致す所にして一般に我國民は此政策の賜物として制度と立法とを飾るを得たるも其內的生活に於て毫も根本的覺醒を爲したるを見ざるなり

既に個人として自覺を缺き訓練を有せざる國民は國家の基礎としても脆弱なりと云はざるべからず勞働者は國民の大多數を占むるものにして此の多數の國民をして確固たる精神の訓練を受くることなくして了らしむるは啻に社會政策の問題たるのみならず實に國民の運命に牽連する重要なる問題と云はざるべからず。

然らば如何にして勞働者をして自覺せしむべきか之實に自

由を與へ獨立自助の運動を認むるの外なきなり徒に先覺者の案出せる法律制度を上より與ふることなくして自由潑溂たる運動の中より勞働者をして自ら悟らしめ求むる所あらしめざるべからず而して勞働者の運動は勞働條件の改善を求むるの外他にあるべからざるを以て之卽ち勞働組合の成立を承認する所以にして吾人が組合の公認を說く所以又實に此に在りとす

（三）組合は曩に述ぶるが如く教育的機關を設くるものにして新聞雜誌を發行し小冊子を刊行して勞働者として必要なる知識を供給するのみならず其の講演會に於ては或は組合員相互の意見を發表し或は一般勞働問題に熱心なる先覺者を招きて其薀蓄を聽くことを得べく之を要するに勞働者の精神的向上はかくの如き組合の成立に依りてのみ之を庶幾することを得べき也

或は組合が秩序を紊り平和を害するを怖るゝものありと雖組合員にして組合を組織し自ら共同の生活に加はらんには共同生活の何ものたるかを解し秩序の貴重なる所以を知ることを得べく斯の如くして始めて秩序を尊重するの精神は徹底するものと云ふべきなり又組合は同盟罷業の基金を有し相互扶助の積立を爲すものなるを以て是等の施設は組合員をして輕擧妄動を愼み其の思想を平穩保守的ならしむるに預るものとす、

勞働者は國民の多數を占むるものにして國家に於ける貴重なる市民の一部なり是等の勞働者は時代の推移に依りて國政の要部を占むることあるは歐米の實例之を示すが如くにして既に然らば是等の勞働者をして徒に無能無自覺に放任することなく之が智識を開發し秩序を尊重するの精神を涵養せしむるは實に國家生活の上よりしても賢明なる政策と云はざるべからざるなり。

（四）我國の勞働者は外國傳來の思想を吸收することを知りて之を消化することを知らずとの非難をなすものあり外來思想を輸入して之を現代日本の國情に消化せしむる機關なき我國の如きは大なる危險を犯すものと云はざるべからず、若し我國勞働者一部の思想にして社會主義過激主義に走りつゝありとせば其は外國に於ける事實を紙上に讀みて之が徹底せる說明を爲すべき機關を有せざる當然の結果と云はざるべからず須く勞働組合の成立を認め之を中心として我國の勞働者に對して國際上に於ける我國の地位、我國產業の幼稚にして歐米先進國と異る所以を宣傳し勞働者をして眞に了解する所あらしめ和衷協同の實を擧げしむるに努力すべきなり。

（五）資本家階級に屬するものと勞働者階級に屬するものと其意思を疏通するの機會少きこと我國の如く甚だしきは歐米諸國に見ざるところなり若し資本家勞働者の双方組合により集合協約の成立を見るが如きことあらんには此の會合に於て協約の條項を討議するに當りて資本家は勞働者の要求の奈邊に在るを知るべく勞働者は產業の經理に付て始めて理解し其の要求の無法不合理なるを感知することあるべし之を要するに今日資本家勞働者をして相互の理解を爲さしむるもの組合の成立を措いて他に之を求むべからざるなり。

（六）我國には勞働者の利益を代表する一人の代議士あるなく彼等は其要求を述ぶべき辯論と文章とを有せざるなり國家は勞働者の利益を代表すべき要求を聽くの必要あり又勞働者をして其の意見を吐かしむることは、卽ち不平の噴火口を設くる所以にして國家の安寧よりしても蓋し必要缺くべからざるものとす。

（八）勞働立法と組合運動の關係

既に此の如く勞働組合を認むれば勞働立法と組合の運動とは如何なる干係に置くべきか如何なる範圍の勞働者に對して勞働立法を適用し如何なる範圍の勞働者に對して組合の自助的運動に放任すべきか之れ勞働法規の適用に關する根本問題たらずんば非ざるなり

之に關しては婦人未成年勞働者と成年男子勞働者とを分ちて之を說明せざるべからず

（一）婦人及未成年勞働者に對しては勞働立法を以て之が保護を圖らざるべからず蓋し是等の勞働者は一般に不熟練作業に從事する者にして且勤續年限は概して短く加ふるに婦人勞働者は結婚家庭を差控ふるの事情あり未成年勞働者は其の精神の發達幼稚にして共同團結の生活に適せざる等各種の理由に依り勞働組合を組織し自ら勞働條件の改善を企つるの能力に缺くる所あるを以て國家は特に法律の力に依りて之が保護を講ぜざるべからず更に未成年者は未だ心身發達の半途にあるものにして其健康教育は從來の國民と爲るに大なる關係あり婦人勞働者は其身體男子と同じからず加ふるに男子と異る生理作用を有し其の健康は單に當該勞働者のみならず第二の國民に影響する所大なるを以て之が保護は緊急を要し其實施は確實ならざるべからざるを以て特に立法の發動に依らざるべからざるものとす而して近時歐米に見るが如き婦人勞働者の組合にして成るの時あらんか進